

日本タンゴ・アカデミー機関誌

# TANGUEANDO EN JAPON

No. 35  
2015

タンゲアンド・エン・ハボン

# TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 35, Enero de 2015

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

## タンゲアンド・エン・ハポン 第35号 (2015年1月)



2014年7月22日に東京リンコン・デ・タンゴ納涼大会が開催された東京・御茶ノ水の「山の上ホテル」(画 須貝 仁)

日本タンゴ・アカデミー  
(<http://tangoacademy.jp/>)



## 日本タンゴ・アカデミー 2014年下期活動実績

### ● タンゴ・セミナー (CLASE DE TANGO)

- ◎ 第87回セミナー：9月14日（日）、東医健保会館において13時30分から少し時間を延長して16時45分まで、鈴木一哉、吉村俊司、飯塚久夫の3氏をコメンテーターとして開かれました。今回は「ピアソラを語る 何故ピアソラもタンゴか?!」というタイトルで、鈴木氏はサルガン作品の“ア・フエゴ・レント”がピアソラの音楽に与えた影響について、吉村氏はピアソラの自作自演による“アディオス・ノニーノ”（及び“ノニーノ”）の5種類の演奏バージョンについて、飯塚氏はピアソラ音楽の底流を流れるタンゴの伝統について、それぞれ大変充実したお話がありました。セミナー参加者は会員37名、ビジター4名、招待者1名の計42名でした。
- ◎ 第88回セミナー：11月23日（日）、東医健保会館において13時30分から16時30分まで、島崎長次郎名誉会長による『SPで訪ねる「ラ・クンパルシータ」の軌跡（戦中・戦後編）』というタイトルのお話がありました。これは2013年11月23日開催のセミナーでの島崎会長（当時）による『SPで訪ねる「ラ・クンパルシータ」の軌跡（戦前編）』の続編で、その時のお話の内容を踏まえて、SP盤による1942年から1955年までの名流楽団・歌手による「ラ・クンパルシータ」を22曲たっぷり聴かせていただきました。出席者は会員45名、ビジター3名の計48名でした。
- ◎ 第89回セミナー：12月14日（日）、東医健保会館において13時30分から16時30分まで、高場将美、山本幸洋、笠井正史、大澤 寛の4氏をコメンテーターとして、年末恒例の「今年聴いたタンゴから」の紹介がありました。高場氏はアルゼンチンの放送番組La FM 2×4から、笠井氏は最近のCDを中心にした音源から、大澤氏はアニバル・トロイロの作曲作品とその作詞家・歌手たちについて、それぞれトロイロ生誕100周年に因んだお話がありました。また山本氏は最近の新しいタンゴの傾向を示すCDの紹介がありました。出席者は35名でした。

### ● 東京リンコン・デ・タンゴ

- ◎ 7月22日（火）：昨年に引き続き今回も「納涼大会」と銘打って、レコードコンサート＋生演奏で暑い夏の一日を盛り上げようということにしました。今回は会場として御茶ノ水の「山の上ホテル」の宴会場を借り切り、首都圏にあるタンゴ同好会の代表者11名をコメンテーターに、各自1曲ずつの選曲による『私の「これがタンゴだ!」』と題するレコードコンサートに加えて、今回も池田みさ子とロス・アミーゴス四重奏団による演奏会という形で会を進めました。80名程度の参加者を予想していたのですが、蓋を開けると何と会員56名、ビジター53名、計109名という大盛況ぶりで、主催者側はうれしい悲鳴を上げました。
- ◎ 9月9日（火）：今回のコメンテーターは寺本千栄子さんと池永博威さんのお二人です。寺本さんは「名曲によるタンゴストーリー」というタイトルで、タンゴの曲名を繋げて1編のラブストーリーに仕立てるというユニークな内容でした。池永さんは「自作自演」というテーマで、普段あまり聴くことのない演奏家の自作自演を聴かせてくれました。第3部は名曲5人選「ラ・クンパルシータ その2」で、石濱 洋さん、大澤 寛さん、佐藤 進さん、福川靖彦さん、山本嘉子さんの5人の方々による選曲を楽しみました。参加者は会員47名、ビジター3名の計50名でした。



- ◎ 11月4日（火）：今回のコメンテーターは高橋研二さんと宮本政樹さんのお二人です。高橋さんは「ビッグ バンドがタンゴを演奏したとき」と題して、スタン ケントン楽団など日・米のジャズやラテンのビッグバンドによるタンゴという珍しい音源を紹介されました。一転して、宮本さんは「今一度、蘇れ！ あの時代の忘れ難き旋律の響き！」と銘打って、1920～1930年代のマイナーレーベルからの名演奏を聴かせてくれました。生演奏は、女性バンドネオン奏者の小川紀美代さんによるバンドネオン・ソロで、アンプを通さないアコースティックの演奏でしたが、その豊かな音量は会場内に響き渡りました。参加者は会員38名、非会員4名、ビジター1名の計43名でした。

#### ● 第4回NTAミロンガパーティー

第4回NTAミロンガパーティーは11月8日（土）において、昨年と同じ東京都千代田区一番町「いきいきプラザ一番町・カスケードホール」にて開催されました。今回は会場の都合で開催時間は18時30分から21時30分までの3時間となりました。出演楽団は新進気鋭の5重奏団編成のメンターオ、ダンス・デモはタンゴ・ブラネット「利幸&舞子」で、それに4人の女性NTA会員の選曲によるCDコンサートがありました。夜間開催でしたが約130名の参加者を得て、踊る人と聴く人をまじえて会は盛会のうちに終了しました。

#### ● 関西リンコン・デ・タンゴ

第24回関西リンコン・デ・タンゴは2014年11月9日（日）に神戸市三宮の「サロン・ド・あいり」において開催されました。プログラムの第1部は吉岡 凜（pf）、外薮美穂（vn）、星野俊路（bn）の3人によるトリオ「タンゴ・コケータ」のライブ演奏で、古典曲から現代曲まで多彩なプログラムでした。第2部は姫路在住の井上 濤さんによる『「インスピレーション」の5楽団による聴き比べ』と鈴木忠昌さんによる『「ラ・クンパルシータ」の発展史』という興味深い内容でした。第3部は飯塚久夫NTA会長が4部構成からなる「映像で見るタンゴの魅力」というタイトルで14本の珍しいビデオを紹介されました。出席者は会員11名、非会員10名でした。

#### ● 中部リンコン・デ・タンゴ（第14回）

第14回中部リンコン・デ・タンゴは2014年6月29日（日）に名古屋市千種区「喫茶ロイヤル」において開催されました。プログラムの第1部は西村秀人さん（NTA理事）による「音で聴く日本のタンゴ百年史」、第2部は同じく西村さんによる「日本のタンゴ史を飾るアーティスト／来日楽団の映像集」で、第1部、第2部共に西村さんが2013年から2014年にかけて行った「タンゴ日本渡来100周年記念講演」がベースになっています。但しプログラムで使用する音源・映像は中部リンコン向けに再編集したということです。第3部は名古屋を中心に活躍する、丹治清貴さん（Cb）と長井美香さん（Pf）によるデュオ・リフレのミニ・コンサートでした。コントラバスをアレンジのメインに置き、タンゴだけでプログラムを構成するというユニークな試みで、それだけに演奏にも一層力が入っていました。出席者は40名を超えました。

#### ● 中部リンコン・デ・タンゴ（第15回）

第15回中部リンコン・デ・タンゴは2014年11月30日（日）13時より、会場を四日市市内のライブ・

ハウス「ジャズ・テーク・ゼロ」を借り切って開催されました。プログラムの第1部は三重県名張市在住のSPコレクターの澤田義寛氏をゲスト解説者に迎えて「希観SP原盤によるアグスティン・バルディ作品集」、第2部は鈴木克比古さんによる「京谷弘司+小松亮太」タンゴ・デュオの紹介と、丹羽 宏さんによるフィンランドの作曲家ウント・モノネン（Unto Mononen）のタンゴ作品の紹介でした。第3部は「島田由美子（会員）とフェリス・タンゴ」トリオによるライブ演奏による10曲を楽しみました。出席者は会員9名、ビジター22名の計31名で、会場は満杯でした。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」34号が7月に発行されました。

● 副機関誌「タンゴランディア」29号が10月に発行されました。

● 会員動静 会員総数186名

新入会者：ファン・リオス（東京都）、池田達則（横浜市）

退会者：大橋英夫（逝去）

● 理事会・役員会

- \* 7月29日（火）：事務局より新入会者1名（Juan Rios氏）と退会者1名（大橋英夫氏・逝去）がありましたが、会員数は185名と変動はないとの報告がありました。更に、会計入出金状況の報告に続いて機関誌の編集進行状況の報告がありました。今回は特にTangueando en Japón誌の印刷費用構造と印刷費用の目標管理、及び編集作業の外注化の可能性について突っ込んだ議論がありました。Tangolandia誌についても記事数についての目標設定の意向が示されました。また、タンゴセミナーとミロンガパーティーの計画、2015年の「NTA全国会員の集い」の開催場所の選定について議論しました。
- \* 9月2日（火）：編集作業のサポートのために、役員ではありませんが、笠井正史氏、池永博威氏、鈴木啓子氏の3人が今回から役員会に出席することになったとの紹介がありました。事務局より前回以降新入・退会者はなく、会員数は185名と変動はないとの報告がありました。会計入出金状況に関してはTangueando en Japón誌34号の発行費用が増加したため、財政的に厳しい状況になりそうであるとの報告がありました。これに関して編集部から次号のTangueando en Japón誌は頁数を抑えて、発行費用の平準化を図りたいという意向が表明されました。続いて、東京リンコン、タンゴセミナー、ミロンガパーティーの計画の進行状況を議論しました。最後に日本タンゴ・アカデミーと日本アルゼンチンタンゴ連盟との関係について意見交換がなされました。
- \* 10月7日（火）：今回は冒頭に招待出席者の海江田禎二氏から氏が提唱するタンゴ・アーカイブの構想について説明を頂き、続いて質疑応答を行いました。定例の議事については、新たな会員の入退会は無し、財政状況が厳しいこと、機関誌の発行状況、東京リンコン・デ・タンゴの詳細の報告がありました。又、ミロンガパーティーの実行に関して役員の役割分担の詳細を決定しました。更に2015年2月28日（土）開催予定の「全国会員の集い」でのゲスト出演楽団の選定について討議しました。

- \* 11月6日（木）：事務局より新入会者が1名あり、会員数は186名になったこと、更に会計担当から前回に引き続き財政状況が厳しいことの報告がありました。又、機関誌編集部より執筆者の居住地表示について統一的方式の提案があり、承認されました。更に、12月14日のセミナーの担当者を決定し、11月8日のミロンガパーティーについての最終的詰めを行い、来年2月28日の「全国会員の集い」でのセミナー担当者を決定しました。最後に、前々回より編集作業のサポートのために、加わっていただいた笠井正史氏、池永博威氏、鈴木啓子氏の3人を新年度より編集担当実行委員に加えることを決議しました。

## ● 編集会議

- \* 7月29日（火）：役員会に先だって同じ場所で機関誌編集会議を開き、編集進行状況について議論すると共に、Tangueando en Japón誌の印刷費用構造と印刷費用の目標管理、及び編集作業の外注化の可能性について議論しました。
- \* 9月2日（火）：役員会に先だって、同じ場所で新規参加の笠井正史氏、池永博威氏、鈴木啓子氏の3人を交えて、機関誌編集会議を開き、編集進行状況を議論しました。
- \* 9月19日（金）：神田錦町の学士会館談話室において15:00から17:00まで、新規参加の笠井正史氏、池永博威氏、鈴木啓子氏の3人に向けての編集業務の臨時の説明会を開きました。編集部側出席者は大澤、弓田、宮本、齋藤の4人でした。
- \* 10月7日（火）：役員会に先だって、同じ場所で新規参加の笠井正史氏、池永博威氏、鈴木啓子氏の3人を交えて、機関誌編集会議を開き、編集進行状況と新たな編集企画案について議論しました。
- \* 11月6日（木）：役員会に先だって同じ場所で編集会議を開き、機関誌編集進行状況を討議し、また機関誌執筆者の居住地表示について統一的方式について討議しました。

## ● 役員人事

新任実行委員：池永博威（編集補佐）、笠井正史（編集補佐）、鈴木啓子（編集補佐）

退任：丹羽 宏（自己都合により理事退任）

### <編集部からのお願い：別刷りの有償追加分の請求について>

本誌34号から始めました寄稿者への別刷りの配布について、無償分の20部を超える部数を必要とされる方は編集部の方にその旨ご連絡ください。それに従って編集部の方から印刷会社に追加印刷と発送の手配をいたします。なお、追加印刷分は有償ですので、印刷会社から請求書に従って各自でお支払いください。

・・・「2015年度NTA全国会員の集い」が開かれます・・・

日 時：2月28日（土） 午前10時受付開始 午前10時30分開場

会 場：「メルパルク東京」（一昨年と同じ会場です。ご注意ください）

〒105-8582 東京都港区芝公園2-5-20 TEL：03-3433-7212

第1部：第81回タンゴ・セミナー（クラセ・デ・タンゴ）

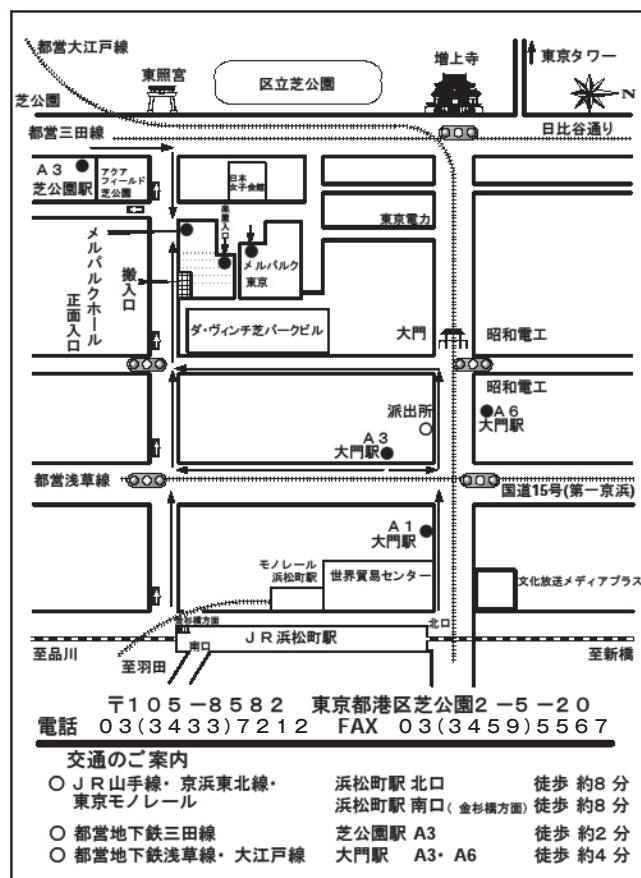
テーマ：1940年代のフランシスコ・カナロ楽団

コメンテーター：齋藤富士郎

第2部：懇親パーティー（会長挨拶、事業報告、決算・予算報告、懇談）

アトラクション出演楽団：小松真知子とタンゴクリスタル

## メルパルクホール 案内図





## 第4回 ミロンガパーティー報告

杉山 滋一

日本タンゴ・アカデミー（以下NTA）が2012年10月に企画・開催を始めたミロンガパーティーも回を重ねて今年は第4回となり、2014年11月8日（土）前回と同じ千代田区麴町「いきいきプラザ一番町」カスケードホールでとり行われた。

会場は東京都千代田区が関係している社会福祉法人の施設の為、千代田区在住の区民などが優先して使用できるシステムとなっていて、その他千代田区民以外の場合には会場取得に困難を伴うが今回は宮本理事の尽力・協力により、土曜日の夜18時から22時までの時間帯を確保できたことに謝意を表しておかねばならないであろう。

出演楽団：メンターオ・トリオ + 2

ダンス・デモ：タンゴ・プラネット 「利幸&舞子」

司会進行：宮本政樹（NTA行事企画担当理事）

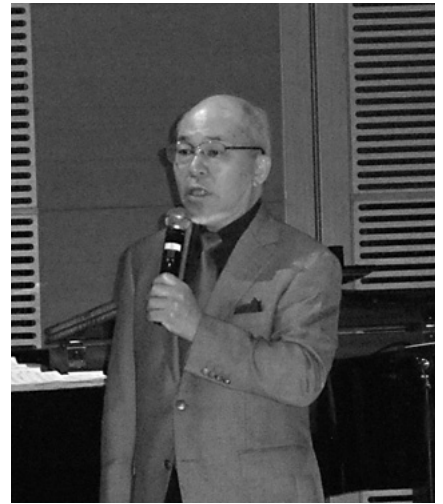
CD使用ダンスタイム、飯塚久夫会長挨拶、ライブ演奏（第1部）、CDダンスタイム、ダンス・デモ、ライブ演奏（第2部）、CDダンスタイムというプログラム構成で18時30分よりスタートした。

当夜は曇りがちで降雨が心配されたがそれもなく18時過ぎ頃から三々五々会員がロビーに集まり始める。特に女性方はダンスシューズに艶やかなドレスに身をつつんで18時30分の開場を今や遅しと待ちわびている様子であった。定刻に開場しCDタイムが始まると広いフロアーはすぐに待ちかねていたかのようなペアーがステップを踏む姿で埋まってくる。今回のCDは日頃よりダンスを楽しんでいる4人の女性会員（町田静子、鈴木啓子、宇都宮知子、寺本千栄子の各氏）に選りすぐりのダンスナンバーをそれぞれ8曲ずつ選曲していただいている。御馴染の名曲の数々や、ミロンガ、ワルツ、歌入りの楽団演奏など、ダンスはもちろん聴いても充分楽しめる曲目がバラエティーに富んだ配列になっているようだ。これも今回のミロンガパーティーの全体構成を担った宮本理事の意向が良く分かる選曲であると感じた。1930年頃から40年代までのR. ビアジ楽団、M. カロー楽団、R. タントゥーリ楽団などが目についたし、いわゆる第2黄金期（1945年～50年代）のO. プグリエーセ、J. ダリエンソ、C. ディサルリ楽団などが顔をそろえている。面白いと思ったのは意外にもタンゴ王のF. カナロが一曲しか選ばれていないことであった。これも選曲者の好みなのであろう。毎回参加してくれる顔なじみの年配者のペアーなどの皆さんは踊りやすいフロアーで、リラックスして気持ちがゆったりした表情であると御見受けした。踊り疲れた方々はロビーの飲み物コーナーで一息ついている。そこでは久しぶりの出会いで歓談の輪が出来て話の花が咲いている。

### ライブ演奏

今回のライブ演奏は前掲のとおりメンターオ+ 2の五重奏団である。トリオを主宰するバンドネオ

ン池田達則（当会会員）は数度の渡亜経験の後、つい一カ月ほど前までBsAsに滞在してコロールタンゴのマエストロ、R. アルバレスのもとで研鑽を積んできた期待の若手奏者である。ヴァイオリンの専光秀紀、コントラバス大熊慧の2人も渡亜してタンゴの現場の空気にひたって勉強してきている。この3人にプラスしてヴァイオリン宮越建政、ピアノ松永祐平がゲストプレイヤーとして加わった五重奏団が熱のこもったプレイを繰りひろげる。間近に聴く人のための席が設けられている。言ってみればさしずめ「カブリツキ席」で聴くことになり、その迫力たるや想像に難くない。この2人は日頃からオルケスタYOKOHAMAで演奏活動を同じくしているので息はピッタリである。



演奏に先立ってNTA飯塚久夫会長より「踊る人も聴く人も共に楽しめるミロンガパーティー」をコンセプトにしている今宵を充分満喫して欲しいとの挨拶に続いてメンターオのライブが開始された。



出だしの曲「ボルドネオ900」が始まると、その力強いリズムに乗って大勢のペアが軽やかなステップを踏み出す。ワルツ「心の底から」や「パタ・アンチャ」「盲目の雄鶏」などのブグリーエセススタイル、「我が命の君」「お話し

しょう」のソフトな演奏などの10曲が楽団演奏第1部として進められた。前に述べたようにR・アルバレスに師事した池田達則のバンドネオンがリードする五重奏団の演奏で踊れる人々は充実した時間であったろう。また聴く事を中心としている愛好者にとっても単なる有名曲の羅列に止まらないプログラムは従前と比べても変化があって聞き応えがあったことだろう。10曲約30分余りの第1部の演奏が終わる。

## ダンス・デモンストレーション

2回目のCDタイムのあと、20時15分からタンゴ・プラネット「利幸&舞子」によるダンス・デモが行われた。通常はテンポやアクセントが取りやすいCDが使われることが多いようだが今回はメンターオの生演奏に乗って披露された。1曲目は「解放」、2曲目に「バイア・ブランカ」がそれぞれ異なったスタイルでデモされた。BsAsで一年間のダンス留学をして本場仕込みの利幸（当会会員）のリードで舞子との



息もピッタリと合って華やかな、そして激しい動きの中で時にはしっとりとした静かさの表現を示していた。観衆の拍手に応えて予定の外にアンコールのワルツ「心の底から」がエレガントな雰囲気です踊

られた。

ダンス・デモに引き続き楽団演奏第2部が進行された。ここではリーダー池田達則の師匠R. アルバレスの作品「マイパ」「チャカブケアンド」、プグリエーセ楽団のレペルトリオ「スム」「エネ・エネ」「マランドゥラカ」「想い出」、それに名曲「フェリシア」「バンドネオンの嘆き」など彩り豊かに10曲が演奏されてフロアーは踊る人々でいっぱいになった。鳴りやまない拍手とアンコールの声に応じて「ラ・マリポーサ」と「ラ・クンパルシータ」の2曲が演奏され万雷の拍手のうちに予定時間をオーバーして終了した。



ライブが済んで3回目のCDタイムに入りそれぞれが最後のダンスを楽しむかのように踊りの波は止まる事がない。会場の閉館時刻21時30分となり名残を惜しみながら散会となった。

## 終りに

過去3回の開催経験を踏まえた上での今回の運営では、関係者も手慣れた部分もあって比較的スムーズに事が運んでいたようだ。しかし18時から22時までの夜間4時間の制約もあってバタバタしたことも否定できない。ロビーに於ける来場者の受付処理・誘導整理、飲み物コーナーの設営と補給運営などであろう。コンセプトである「踊る人も聴く人も共に楽しめる集い」という点になるとまだまだ問題がありそうだ。聴くだけの人は演奏に集中して聴きたいと思っても側でチラチラと踊る人の動きが気になるという声も一部にはあるようだ。それと裏腹に踊る人はダンスフロアの中に聴く人の席が場所を占めていることによる圧迫感があるという。異なる意識をどう調和させて楽しみの共有化を図るかに知恵を出してクリアする必要があるだろう。

さらに言えば、年配者や遠方・地方からの参加会員に対しての考慮で出来るだけ昼間の開催が望ましい（会場確保の上での制約・難しさがあるけれど）。ちなみに今回の参加者数は前回に比べて20名減少の130名であった。

最後にミロンガ実施にあたり事前の準備、当日の運営を担当した役員スタッフの方々のご苦勞に対して深く謝意を述べる次第です。



## ＜リンコン・デ・タンゴ特集＞

— リンコン・デ・タンゴ（2014年1月21日） —



ビジターの神保貞之さん



初参加の大石 豊さん



初参加と紹介されたが  
実は2回目の鶴岡忠成さん

— リンコン・デ・タンゴ（2014年3月25日） —



新入会員の阿部和子さん



ビジター参加のオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの  
嵯峨山さん、手塚さん、高橋さん

アカデミー行事アルバム



Fume compadre, fume y charlemos...



CD, LP, ビデオ大抽選会の様子

— リンコン・デ・タンゴ (2014年5月20日) —



フェルナンド・テル・トリオに河内敏昭さんが参加されていたことを紹介する中村尚文さんと思い出を語る河内敏昭さん



お仕事の合間を見て参加された広島市の三好清隆さん



新入会員で初参加の荒田孝宏さん



— リンコン・デ・タンゴ (2014年7月22日) —



今回の会場となった山の上ホテル  
(東京・御茶ノ水)



会場内風景



挨拶をする池田みさ子さん



池田みさ子とロス・アミーゴスの演奏風景

— リンコン・デ・タンゴ (2014年9月9日) —



新入会員で初参加のJuan Ríosさん



Siempre llevan fumando...

— リンコン・デ・タンゴ (2014年11月4日) —



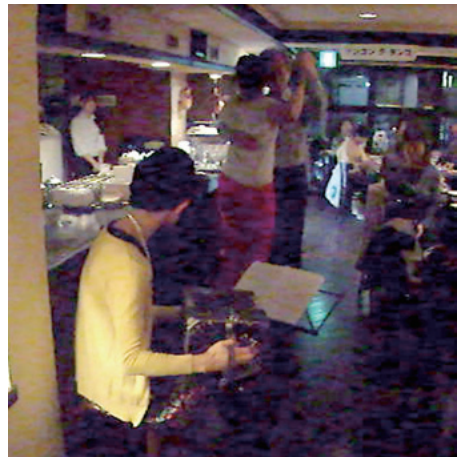
新潟県村上市から遠路参加の相馬康廣さん



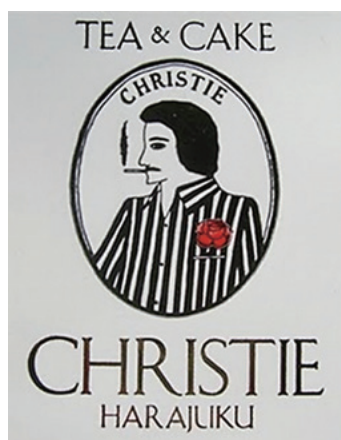
フランスから来日中のSilviaさん



アルゼンチンから来日中のEduardo Garcíaさん



小川紀美代さんのバンドネオンに合わせて踊る2人





## タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

# Clase de Tango

第87回タンゴ・セミナー

2014年9月14日

東医健保会館

### ピアソラを語る ～何故ピアソラもタンゴか !?～

鈴木 一哉 テーマ：サルガン「とろ火で」がピアソラに及ぼした影響をめぐって

1. **A fuego lento** (Horacio Salgán)

**HORACIO SALGÁN** y su orquesta

t.k. S-5354 A [78] → Euro Records EU 13006 [CD]

2. **A fuego lento** (Horacio Salgán)

**OCTETO BUENOS AIRES** “TANGO MODERNO”

DISC JOCKEY DIS 15001 [LP] → Euro Records EU 14014 [CD]

3. **Iracundo** (Ástor Piazzolla)

**ÁSTOR PIAZZOLLA** y su QUINTETO “NUEVO TANGO”  
“TANGO PARA UNA CIUDAD”

CBS 8392 [LP] → EPIC RECORDS ESCA 7400 [CD]

4. **Zum** (Ástor Piazzolla)

**ÁSTOR PIAZZOLLA** y su **CONJUNTO 9**

“MÚSICA POPULAR CONTEMPORANEA DE LA CIUDAD  
DE BUENOS AIRES VOLUMEN 1”

RCA VÍCTOR AVS-4069 [LP] → BMG JAPAN BVCM-37003 ~ 04 [2CD]

5. **Bandoneón arrabalero** (Juan Deambroggio (Bachicha) - Pascual Contursi)

**ÁSTOR PIAZZOLLA** y su **QUINTETO** (Canta: **Nelly Vázquez**)  
“¿PIAZZOLLA...O NO?”

RCA VÍCTOR AVL-3340 [LP] → BMG JAPAN BVCM-37001 ~ 02 [2CD]

6. **Che tango che** (Ástor Piazzolla - Ángela Tarenzi - Jean-Claude Carrière)

**MILVA & ÁSTOR PIAZZOLLA** “Live in Tokyo 1988”

B.J.L.DDCB-13012/13 [2CD]

7. **Tango III Allegretto molto marcato** (de Tres tangos para bandoneón solista,

orquesta de cuerdas piano-arpa-percusión) (Ástor Piazzolla)

**ÁSTOR PIAZZOLLA** with the Athens Colours Orchestra

Conducted by **MANOS HADJIDAKIS** “BANDONEÓN SINFÓNICO”

MILAN LATINO 74321 34268-2 [CD]





## 吉村 俊司

### 1. Nonino (Ástor Piazzolla)

Ástor Piazzolla, su Bandoneón y su Orquesta de Cuerdas (1955)

原盤 EP, Barclay 72006

CD "Piazzolla Para Coleccionistas" Universal POCP-1714

### 2. Adiós Nonino (Ástor Piazzolla)

Ástor Piazzolla y su Quinteto (1961)

原盤 "Piazzolla Interpreta a Piazzolla" RCA Víctor AVL-3383

CD "Piazzolla Interpreta a Piazzolla + Piazzolla... O No?" RCA BVCM-37001 ~ 02

### 3. Adiós Nonino (Ástor Piazzolla)

Ástor Piazzolla y su Quinteto (1969)

原盤 "Adiós Nonino" Trova TLS-5027

CD "Adiós Nonino" Alfa AFCD-13

### 4. Adiós Nonino (Ástor Piazzolla)

Ástor Piazzolla y su Conjunto 9 (1972)

En vivo en el Teatro Colón, versión inédita

<https://www.youtube.com/watch?v=y3SvKCUpKUA>

### 5. Adiós Nonino (Ástor Piazzolla)

Ástor Piazzolla y su Conjunto Electrónico (1977)

原盤 "Olympia 77" Polydor 2393 161

CD "Los Desafíos de Astor Piazzolla" Carosello KICP 876 ~ 7



## 飯塚 久夫

<バンドネオンの歴史とピアソラ>

ヘリオトロープ **HERIOTROPE** (P. Maffia)

ペドロ・マフィア **Pedro Maffia** (1966)

私の隠れ家 **MI REFUGIO** (J. C. Cobián)

アストル・ピアソラ **Ástor Piazzolla** (1966)

<ピアソラ・キンテートとタンゴ>

孤独 **SOLEDA** (A. Piazzolla)

ピアソラ八重奏団 **Octeto Piazzolla** @ブエノス・アイレス (1976)

ブエノスアイレスの冬 **INVIERNO PORTEÑO** (A. Piazzolla)

ピアソラ五重奏団 **Quinteto Piazzolla** @ハンブルグ (スタジオ) (1981)

<ピアソラのリズムについて>

ノブレサ・デ・アラバル **NOBREZA DE ARRABAL** (F. Canaro)

フランシスコ・カナロ **Francisco Canaro** (1927)

南国の太陽 **SOL TROPICAL** (T. Tucci-A. Le Pera) + a

テリグ・トゥッチ **Terig Tucci** (1934) + a

<ピアソラとプグリエーセ>

ノニーノ **NONINO** (A. Piazzolla)

オスバルド・プグリエーセ **Osvaldo Pugliese** (1961)

ラ・ジュンバ **LA YUMBA** (O. Pugliese)

オスバルド・プグリエーセ と アストル・ピアソラ **O. Pugliese & A. Piazzolla**

@アムステルダム/カレー劇場 (ライブ) (1989)

<ピアソラが語る！>

ピアソラへのインタビュー **Entrevista a Piazzolla**

ブエノスアイレスの夏 **VERANO PORTEÑO** (A. Piazzolla)

@ユトレヒト/フレーデンプルク音楽センター (ライブ) (1984.10)



第87回 タンゴ・セミナー資料 (鈴木一哉)

① A fuego lent

② Adiós Nonino

③ Iracundo

④ Zum

⑤ Operacion Tango

⑥ A fuego lent

⑦ Allegro molto marcato (de Tres TANGOS)

⑧ Verano Porteño (60年代)

⑨ Verano Porteño (80年代)







第88回 タンゴ・セミナー

— (Clase de Tango) —

SPで訪ねる

ラ・クンパルシータの軌跡

【戦中・戦後編】

♪ とき 2014.11.23(日) pm.1.30~

♪ ところ 東医健保会館(信濃町)

♪ とく 島崎長次郎(名誉会長)



—主催 日本タンゴ・アカデミー—

## SPで訪ねる

## 「LA CUMPARSITA」の軌跡 &lt;戦中・戦後編&gt;

◆ 新たな命を吹き込んだ個性派楽団

使用音源 録音年

- |  |             |        |
|--|-------------|--------|
| 1) ロドルフォ ビアジ楽団 RODOLFO BIAGI           | Ode.5634    | G:1942 |
| 2) アルフレド・デ・アンジェリス楽団 ALFLEDO DE ANGELIS | Ode.3775    | G:1944 |
| 3) アンヘル・ダゴスティーノ=バルガス D'AGOSTINO=VARGAS | Vic.60-1538 | G:1945 |
| 4) ロベルト・カロー楽団 ROBERTO CALO             | Orf.3002    | G:1952 |
| 5) フランチャーニ=ポンティエル楽団 FRANCINI=PONTIER   | Vic.60-1155 | G:1946 |

◆ 歌の世界にも広がる新たな解釈

- |                             |             |        |
|-----------------------------|-------------|--------|
| 6) チャルロ CHARLO              | Ode.55720   | G:1951 |
| 7) フリオ・ソーサ JULIO SOSA       | Col.70381   | G:1961 |
| 8) エドムンド・リベロ EDMUNDO RIVERO | Vic.63-0019 | G:1950 |

◆ 戦後の日本に流れた演奏と歌

- |                 |           |        |
|-----------------|-----------|--------|
| 9) 原 孝太郎と東京6重奏団 | 日Col.A329 | G:1947 |
| 10) 黒木 曜子(歌)    | 日Col.JL 6 | G:1953 |

◆ コンフントの活躍が目立った1950年代

- |  |             |        |
|--|-------------|--------|
| 11) フアン・カンバレリー4重奏団 JUAN CAMBARERI            | Pam.PS5002  | G:1950 |
| 12) トロイロ=グレラ4重奏団 TROILO=GRELA                | TK.SF30007  | G:1955 |
| 13) アルゼンチン・ギター・トリオ TRES GUITARRAS ARGENTINAS | Vic.68-2188 | G:1955 |
| 14) ニコラス・ダレッサンドロ6重奏団 NICOLAS D'ALESSANDRO    | Vic.60-2379 | G:1952 |

◆ 1950年代を飾った名流楽団の遺産

- |                                    |              |        |
|------------------------------------|--------------|--------|
| 15) エンリケ・ロドリゲス楽団 ENRIQUE RODRIGUEZ | 日Ang.OH-9045 | G:1953 |
| 16) エクトル・バレラ楽団 HECTOR VARELA       | Col.15087    | G:1954 |
| 17) アストル・ピアソラ楽団 ASTOR PIAZZOLLA    | TK.S5036     | G:1951 |
| 18) アニバル・トロイロ楽団 ANIBAL TROILO      | TK.S5054     | G:1951 |
| 19) フアン・ダリエンソ楽団 JUAN D'ARIENZO     | Vic.1A-0444  | G:1951 |
| 20) カルロス・ディ・サルリ楽団 CARLOS DI SARLI  | Vic.1A-0459  | G:1955 |

◇ 作曲者Gerardo H. Matos Rodriguez (1897~1948)の出身地ウルグアイの代表

- |                                    |             |        |
|------------------------------------|-------------|--------|
| 21) ドナート・ラシアッティ楽団 DONATO RACCIATTI | Sondor.5457 | G:1953 |
|------------------------------------|-------------|--------|



## 各レコードの演奏パターン(プログラム関連/下記楽譜参照)

## ◆ 新たな命を吹き込んだ個性派楽団

- 1) A-B-A-C-A-A-A
- 2) A-B-A-C-A-A-A
- 3) A-B-A-C-A-A
- 4) A-B-A-C-A-A
- 5) \*A-B-A-C-A-A-A

## ◆ 歌の世界にも広がる新たな解釈

- 6) \*A-B-A-C-A
- 7) \*A-B-A-C-A
- 8) \*C-A-B-C-A

## ◆ 戦後の日本に流れた演奏と歌

- 9) A-B-A-C-A
- 10) \*A-B-A-C-A

## ◆ コンフントの活躍が目立つ1950年代

- 11) A-B-A-C-A-A-A-A
- 12) A-B-A-C-A
- 13) \*A-B-A-C-A-A-A
- 14) A-B-A-C-A-A

## ◆ 1950年代を飾った名流楽団の遺産

- 15) A-B-A-C-A-A
- 16) A-B-A-C-A-A
- 17) A-B-C-A-A-A
- 18) A-B-A-C-A
- 19) A-B-A-C-A-A-A-A
- 20) A-B-A-C-A-A

◇ A-B-Å-C-A-A-A

\*=イントロ(導入)

## LA CUMPARSITA

ラ・タンパルシータ  
TANGOLetra y Música de  
G.H. MATOS RODRIGUEZ

(A)

primero

La Cum-par-sa Demi-se ria sin fin Des-fi-la. En tor-no de-a-quel ser En-fer-mo.

Arco 2a vez (4cuerda)  
Violin la vez Pizz.

Piano

(B)

segundo

Aban-do-nó su vi-e-ji-ta. Que-que-don-de-sam-pa-ra-da Y lo-co de pa-sión Cic-gon-de-a-mor

*ff* *mf*

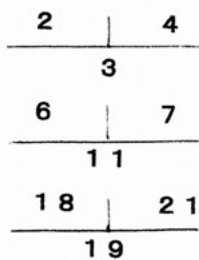
(C)

trio

Hoy ya so-ló-a-ban-do-na-do. A lo tris-te de su suer-te An-sin-sos-pe-ra lo

*f*

## — 各種レーベル —





## 「LA CUMPARSITA」の魅力の源泉

前回のセミナーでも曲の構成とその魅力にふれたが…、この名作の魅力の源泉を、もう一度おさらいしておこう。

- (1) 短音階（マイナー）で書かれた3つの主題が、おのおの起伏に富んだ独自のメロディーを持ち、それが全体に見事なバランスを保っている。
- (2) 曲のスタート部分（第1主題）が、明快な4ビートのマーチ風なメロディーを持ち、聴衆へのアピール度が極めて高い。
- (3) とくに、その魅力が最も隠されているのが、第1主題の和音（コード）の動きで「属7の和音（ドミナントセブン）」でのスタートにあるといえよう。この和音の持つ特性＝つねに主和音（トニック）に進もうとする性格が強烈であるため、不安定感が漂い、そこに一種独特な妖しい魅力が潜んでいて、これが主和音と2小節ごとにリレーしながら展開していくところに、この作品の言い知れぬ味わいが潜んでいるといえよう。

多くの演奏家が、こぞってこの第1主題に立ち向かい、副旋律や変奏など、あらゆる創意と工夫を重ね、己の夢をかけて挑戦しつづけるのは、シンプルな中でも、演奏者にとって限りなく編曲意欲を掻き立てる要素、つまり絶妙な楽想を持つこの主題があるからにほかならない、といえよう。

### 《参 考》

#### 和 音（コード）について

「和 音（コード）」とは、高さの異なる二つ以上の音が、同時に響くときの合成音で、3度の間隔で積み重なったものをいう。以下は主要3和音。

- 主和音（トニック＝曲の中心になる和音で、安定感をそなえ、多くの場合曲の始めと終わりには、この主和音が一般的。
- 7の和音（ドミナントセブン）＝主和音につねに進もうとする強い性格をもち、全体に不安定（妖しい）感が漂う。
- 下属和音（サブドミナント）＝情緒感、開放感を感じさせる和音

註：「属7の和音」始まるタンゴ例。～アディオス・アルヘンティーナ、エル・パニョエリート、コム・イル・フォ、エル・アコモード、エル・アマネセール、ラ・ジュンバ、デスデ・エル・アルマ（V）、ア・ラ・グラン・ムニェーカなど（前回のプログラムに、「妖しい魅力のドミナントセブンで始まるタンゴ《例》として楽譜の冒頭部を掲載済み」）



## 「LA CUMPARSITA」が世界的な名曲となった背景

1916年録音のロベルト・フィルボ楽団を筆頭に、3～4の楽団に取り上げられたとはいえ、発表当初はそれほどでなかった「ラ・クンパルシータ」が、なぜこれほどまでに多くのアーティストにとりあげられ、不朽の名作として世界中でもてはやされるようになったのか、もちろん、それは作品自体が秘めた魅力があるからに違いないが、さらにこれを巡るいくつかの事件や、ヨーロッパを中心にしたダンス・ブームなど、音楽環境の変化を伴う時代背景も、また人気を押し上げる大きなファクターになったといえよう。

- 1924年、パスクアル・コントゥルシとエンリケ・マロニが、音楽劇用にこれを作者に無断で使って問題になったとはいえ、第1主題のメロディーを改作、歌詞をつけ歌の作品としての新たな魅力を加味し、ガルデルの歌を筆頭に注目度を高めた。
- これを作曲者のG. H. マトス・ロドリゲスが知って激怒し、著作権を巡って長年にわたる係争で話題をさらったが、その一方で、作者自身も1926年に独自の歌詞を書き、珍しくも二つの歌詞が並存する形になり、結果的に歌の競演を促す結果になった。
- 1925年、大成功をおさめたフランシスコ・カナロのパリ公演では、当時ある新聞社の特派員としてパリに駐在していた作曲者のマトスと親交をあたため、夜毎日毎にこれを繰り返して演奏したため、ヨーロッパでも評判をとり、ここを発信基地として、「ラ・クンパルシータ」は一挙に広くその名を世界に拡散させていった。
- こうした事件や出来事が、レコードの一大革命ともいふべき電気録音の採用や、ラジオ放送の本格的な普及の時期とあいまって、1926年以降、急速に楽団や歌手のレパートリーに採用されるようになり、世界的に知名度を急加速させていった。
- 多くのアーティストがこれをこぞってとりあげるようになると、いきおい競争が激化し、差別化が課題となり、それぞれにアレンジやプレーに独自の創意と工夫が求められる結果、天下の大傑作「ラ・クンパルシータ」は、千変万化の表情に満ち、永遠にその名を輝かせていくのだといえよう。





## ラ・クンパルシータをめぐる2つの詞

## LA CUMPARSITA

ラ・クンパルシータ  
TANGO

作曲: ハラルド・エルナン・マトス・ロドリゲス

Letra y Música de  
G.H. MATOS RODRIGUEZ

## (その1) E. マロニとP. コントゥールシの合作の詞 (1924年)



①君は知っているだろうが 私がまだ心の中に抱いたあの愛情を守っていることを  
私が君を片時も忘れないでいることを…  
でも君が過去を振り返るとき きつと私のことも思い出すことだろう

②友達はもう尋ねて来ないし 逢っても挨拶をしようもしない  
嘆き悲しむ私を慰めてくれる人なんてどこにもいない  
君が去った日からは 私の胸は痛み続けたままだ  
さあ…女よ… 教えてくれ 君は私の哀れな心になにをしたというのだ

③見捨てられた部屋は もう朝の太陽も君がいたときのように窓から覗いてくれない  
あの仲良しだった犬は 君がいなくなった日からも食はず  
ある日ひとりぼっちの私を見ると そのまま私を棄てて行ってしまった

—— ( ①の繰り返し、略 )

## (その2) G. H. マトス・ロドリゲスの 作詞 (1926年)



①惨めさが行列をなして 悶え苦しみ死のうとしている病める男のまわりを  
いつまでも巡っている…  
自分を苛む過去を思い出し 男はベットで哭いている

②彼は寄る辺のない母親を見棄て 情熱のままに恋に盲目となり  
惚れた女の後を追って行った 女は美しい魅力に富んだみだらな花だった  
女は彼をだまし続け 飽きると彼を棄て…新しい男と行ってしまった

③いまはただひとり 運命の冷酷さのなかに見捨てられ  
真近に迫る死を 不安に怯えながら待っている  
ゆっくりと心に忍び込む 悲しみの悪寒のなかで  
男はその悪行ゆえの辛い思いを味わっていた

—— ( ①の繰り返し、略 )





## POR QUÉ CANTO ASÍ

— 《俺の歌が悲しい理由》 —

Porque cuando pibe, me acunaba en tangos  
La canción materna pa' llamar el sueño,  
Y escuché el rezongo de los bandoneones  
Bajo el emparrado de algún patio viejo.

Porque vi el desfile de las inclemencias  
Con mis pobres ojos llorosos y abiertos,  
Y en la pobre pieza de mis buenos viejos  
Cantó la pobreza su canción de invierno.

Y yo me hice en tangos  
Me fui modelando en odio, en tristeza...  
En las amarguras que da la pobreza...  
En llantos de madres,  
En las rebeldías del que es fuerte y tiene  
Que cruzar los brazos cuando el hambre viene...  
Y yo me hice en tangos  
Porque es bravo, fuerte, tiene algo de vida  
Tiene algo de muerte...

Porque anduve a ciegas buscando la dicha  
Y pasé la vida engarzando ensueños.  
Porque soy un árbol que nunca dio flores  
Porque soy un perro que no tiene dueño.

Porque tengo odios que nunca los digo  
Porque cuando quiero me desangro en besos...  
Porque quise mucho y no me han querido...  
¡Por eso yo canto tan triste... por eso!

Letra : Celedonio Esteban Flores  
Música : José Razzano

Grabado en recitado por Julio Sosa con el acompañamiento  
de la orquesta de Leopoldo Federico, con fondo musical  
del tango "La Cumparsita". (18-08-1961)



「¿Por qué canto así?」（俺がこう歌う理由）

Letra : Celedonio Esteban Flores

Música : José Razzano

ガキの時分の俺には タンゴが子守り歌だったからさ  
俺を眠りつかせるための 母親の歌だった  
そして 何処かの旧い中庭の葡萄棚の下では  
バンドネオンがつぶやくのを聴いたからさ

泣き出しそうな 見開いた 哀れな俺の眼で  
世間の無慈悲さの行列を見たからさ  
そして 俺の優しい親たちの貧しい部屋では  
貧しさが 冬の歌を歌ったからさ

そう 俺はタンゴの中で育ったのさ  
憎しみと 悲しみと 貧しさから来る苦しみと  
母親たちの泪と 腹が減ったら  
じっと腕を組んでいなければならない  
強い男の意地で 大人になって行ったものさ  
そう 俺はタンゴの中で育ったのさ  
タンゴは 遅くて 強くて なにか人生みたいなのを  
なにか死ぬことみたいなのを 持っているからさ

俺は 幸運を求めてめくら減法に歩き廻って  
夢を繋ぎ合せて 人生を送ったからさ  
俺は 決して花を咲かせない木だからさ  
俺は 飼い主のいない犬だからさ

俺には 口には出さない憎しみがあるからさ  
愛する時には 唇付けに血を流すからさ  
俺は懸命に愛したのに 誰も俺を愛してくれなかったからさ  
だから 俺の歌はこんなに悲しいんだ! だから...!

邦訳 : 大澤 寛



島崎名誉会長による手書きのタイトル



島崎名誉会長による  
「ラ・クンパルシータ」特別講義



SP盤は取り扱いも大変



SP盤は飯塚会長自らが「皿回し」



熱心に聴き入る出席者の方々



## タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

# Clase de Tango

第89回タンゴ・セミナー

2014年12月14日

東医健保会館

### 「今年聴いたタンゴから」

La FM2x4より

高場 将美

1. **Pa'que bailen los muchachos** みんなが踊るように (Aníbal Troilo)  
ラウル・ガレーロ (バンドネオン) + アルフレード・サディ (ギター)  
Raúl Garelo - Alfredo Sadi

2. **Balada para un loco** ロコへのバラード (Horacio Ferrer - Ástor Piazzolla)  
オラーシオ・フェレール (語り、歌) + ラ・ベルテーロ・ビッグ・バンド  
Horacio Ferrer - La Bertero Big Band

3. **La cantina** ラ・カンティーナ (イタリア食堂) (Cátulo Castillo - Aníbal Troilo)

4. **La última curda** 最後の酔い (Aníbal Troilo)  
アニバル・トロイロ (バンドネオン、歌) + ロベルト・グレーラ (ギター)  
Aníbal Troilo - Roberto Grela (1954)

5. **Discepolín** ディセポリーン (Homero Manzi - Aníbal Troilo)  
トロイロ (話) ~ トロイロ楽団 + ラウル・ベローン (歌)  
Aníbal Troilo y su orquesta típica, canta Raúl Berón (1951)

(<http://www.buenosaires.gob.ar/la2x4>)



今年聴いたタンゴから

山本 幸洋

1. **L'Atelier / Robustango**  
/ Néstor Marconi Quinteto / NMP NM1542

2. **Pedro Navaja / Tangos**  
/ Rubén Blades / Sunnyside SSC 138



**3. A la Pista / A Toda Orquesta**  
/ Bernardo Monk / Sitemusic STM 171

**4. Danzarín / Tangos para Piano**  
/ Pablo Estigarribia / Epsa 1709-2

**5. Sábado Inglés / Una Noche En La Milonga**  
/ Orquesta Típica Misteriosa Buenos Aires / PAT306-218

## 今年聴いたタンゴから 笠井正史

**1. Amor y celos (M: Miguel Padula) G: 1936**  
\* 2014年11月8日開催のミロンガで鈴木啓子DJが選曲されたワルツ  
Juan D'Arienzo y su Orquesta Típica  
ファン・ダリエンソ楽団  
\* 1900年12月14日ファン・ダリエンソの生誕を祝して

**2. Victorioso (M: Pablo Estigarribia) G: 2013**  
V́ctor Laballén y su Orquesta Típica  
ビクトル・ラバジェン楽団  
Bn: V́ctor Lavallén, Alejandro Bruschini  
Pf: Pablo Estigarribia Vo: Hernán Lucero  
Cb: Silvio Acosta Tc: Germán Martínez  
Vn: Washington Williman, Leonardo Williman



**3. Bajotangueando (M: Néstor Marconi & Eduardo Lettera) G: 2013**  
Néstor Marconi Quinteto  
ネストル・マルコーニ五重奏団  
Bn: Néstor Marconi Vn: Pablo Agri  
Pf: Leonardo Marconi Cb: Juan Pablo Navarro  
Gt: Esteban Falabella

**4. Chacabukeando (M: Roberto Álvarez) G: 2013**  
Mentao (Trío) con Mariana Diez (Pf)  
メンターオ三重奏団+ピアノ: マリアナ・ディエス  
Bn: 池田達則 Vn: 専光秀紀  
Cb: 大熊慧 Pf: マリアナ・ディエス

**5. Osvaldo y Osvaldo (M: Daniel Ruggiero) G: 2012**  
Quasimodo Trío (クワシモド・トリオ)  
Bn: Daniel Ruggiero (オスバルド・ルジェロの子息)  
Pf: Adrián Mastocola Cb: Cristián Basto

**6. A Francisco Canaro (M & L: Walter M. Bonfiglio) G: 2001**  
Bn & Vo: Walter M. Bonfiglio (ワルテル・ボンフィリョ)  
\* 1964年12月14日フランシスコ・カナロの逝去を偲んで



“生誕100年に聴いたトロイロ” Aníbal Troilo (1914-75)  
—— Troiloの作曲作品とその作詞家たち・歌手たち ——

担当：大澤 寛

(番号と曲名を太字で印刷したものが今日取り上げる曲)

(歌手の経歴はTroilo 楽団と関係していた時期のみを記載した)

Enrique Cadícamo (1900-99)

① 「**Garúa**」 (CD RCA BMG 74321-56613-2 歌 Francisco Fiorentino)

「Pa'que bailen los muchachos」 「Naípe」

F.Fiorentino (1905-55)

1937年Troiloが自身の楽団結成。Fiorentino はその頃から1944年Orlando Goñi楽団に移るまで在籍しTroilo楽団で60曲録音。

「Barrio de tango」 「Malena」 「A bailar」 「De barro」 「Corazón no le hagas caso」 「El bulín de la Calle Ayacucho」 「En esta tarde gris」 「Gricel」 「Papá Baltazar」 「Pa'que bailen los muchachos」 「Tinta roja」 「Mano brava」 「Toda mi vida」 など。



Cátulo Castillo (1906-75)

② 「**Una canción**」 (CD MH-0074 歌 Jorge Casal)

「A Homero」 「Y a mí qué」 「Desencuentro」 「El último farol」 「La cantina」 「La última curda」 「María」 「Milonga del Mayoral」 「Patio mío」 「Vuelve la serenata」

J.Casal (1924-96)

1949年末にTroilo 楽団へ。「Ché, bandoneón」 「Amigazo」 「Del suburbio」 「Araca corazón」などを録音。1953年にCátulo Castillo 作・音楽A.Troilo (4重奏団で出演)の音楽劇「Patio de la Morocha」に出演。1956年solistaになる。

Homero Manzi (1907-51)

③ 「**Sur**」 (CD EBCD-302 歌 Edmundo Rivero)

「Barrio de tango」 「Che, bandoneón」 「Discepolín」 「Romance de barrio」

E.Rivero (1911-86)

Alberto Marino の後任として1947年Troilo 楽団へ。同年「Yira, yira」を録音。1950年にsolista となるまでの3年間に20曲ほどの録音。

「El último organito」 「La viajera perdida」 「Yo te bendigo」 「Cafetín de Buenos Aires」 「Confesión」 「Sur」 など。この間Florencia Ruiz やAldo Calderónとのduo もある。

José María Contursi (1911-72)

④ 「**Toda mi vida**」 (LP RCA AVS 34085 歌 Roberto Goyeneche)

「Garras」 「Mi tango triste」

R.Goyeneche (1926-95)

Jorge Casal の後任としてTroilo 楽団へ。「Pa'lo que te va a durar」 「Tinta roja」 「La última curda」 「A Homero」 「El bulín de la Calle Ayacucho」 「En esta tarde gris」などを録音。1964年にsolista となる。

Homero Expósito (1918-87)

⑤ 「**Te llaman malevo**」 (LP ODEON OLP-060 歌 Ángel Cárdenas)

A.Cárdenas (1927-2005)

1956年Troilo 楽団へ。Carlos Olmedo の後任として入団。ほぼ同時期に Pablo Lozano の後任として R.Goyeneche が入団。この二人のduo で「Te llaman malevo」 「Chuzas」 「Callejón」などを録音。1960年Troilo楽団を去る。後任は既にsolistaになっていたJorge Casalが短期間務める。

◎Expósito の書いた詞も多い\*の다가Troilo 自身が作曲したのはこの「Te llaman malevo」1曲だけか？

\* 「Percal」 「Afiches」 「Ese muchacho Troilo」 「Tristezas de la calle Corrientes」 「Naranja en flor」 「Trenzas」 「Maquillaje」 「Pedacito de cielo」

◎Expósito の詞をGoyeneche が歌っているものは多い。

LP RCA ARIOLA TLP-50363 “R.Goyeneche interpreta a H.Expósito” にはTroiloの伴奏で「Trenzas」が入っている。

## ⑥ 「Nocturno a mi barrio」 CD “RCA VÍCTOR 100 AÑOS ANÍBAL TROILO”

作詞・作曲・語り A.Troilo 演奏Troilo 4重奏団

参考にした資料

Todotango

Horacio Salas 「El tango, una guía definitiva」

Oscar del Priore 「El tango y sus letras」

☆ ★ ☆ ★ ☆

**Nocturno a mi barrio (1968) (わが町に捧げるノクターン)**

作詞・作曲・語り・バンドネオン：Anibal Troilo (CD：RCA VÍCTOR 100 AÑOSから)

*Mi barrio era así, así,... así.**Es decir,**¿qué sé yo?**Sí, era así.**¡Pero yo me lo acuerdo así!**Con Giacumín, del carbuña de la esquina, que tenía las hornallas llenas de hollín,**y que jugó siempre de “jas” izquierdo al lado mío, ¡siempre! ¡siempre!**Tal vez pa' estar más cerca de mi corazón.**Alguien dijo una vez que yo me fui de mi barrio.**¿Cuándo?**Pero, ¿Cuándo?**¡Si siempre estoy llegando!**Y si una vez me olvidé, las estrellas de la esquina de la casa de mi vieja, titilando como si fueran manos amigas, me dijeron:**¡Gordo!**¡Gordo!**Quédate aquí, quédate aquí.*

注：jas は英語のhalf (因みにoffside はorsái) MFを指して言ったもの

注：carbuña = carbonero = 炭屋

注：hornalla = nariz = 鼻

俺が住んでいた町はなあ こんな風だったよ  
 こんな つまり 何と言ったらいいか こんな風だったんだ  
 俺が覚えている町は  
 ジャクミンの野郎 角の炭屋の 鼻を煤で真っ黒にして  
 いつも俺の左側で球を蹴りやがった いつも いつも！  
 奴はきっと 俺の心に一番近いところに居たかったんだ  
 誰かに一度言われたことがある 俺がこの町を捨てたと  
 何時だ？ 何時のことだ？ 俺はいつも戻って来ているのに！  
 何時のことだったか忘れたけど 一度 お袋\*の家のある街角で  
 優しい女の手のようにちらちらと瞬いている星に言われたよ  
 “Gordo, Gordo\*\*, ここに居て ここに居てよ” って

\*vieja は“恋人”“隠している愛人”“母親”などと解釈は別れる

\*\*gordo は太った人への愛称 “太っちょ” “デブちゃん”

聞き取り・邦訳：大澤 寛

# 「東京ハンコン・デ・タンゴ」



レポート：福川 靖彦

## 第77回 2014年7月22日 特別納涼大会 於 御茶ノ水「山の上ホテル」

出席者 109名

昨年大変好評をいただいたのに勇気付けられて第2回目を企画しましたが、昨年の会場が使用できず出足でつまずきました。そこで思いついたのが駿河台の「山の上ホテル」です。オーナーの森泊夫さんは大のタンゴファンで、MTC（三田タンゴ倶楽部）のメンバーであったというよしみで会場提供をお願いしたところ、快くメインの宴会場を使わせてもらえることになりました。

この「山の上ホテル」は数多くの文豪が定宿にしていたことでも有名で、モーツァルトルームや池波正太郎の部屋などもある、小規模ながら由緒あるホテルです。会場は84名収容できる結婚式の宴会場で、大きなシャンデリアが下がった白い綺麗な部屋です。費用の関係もあるので出来るだけ多くの参加を希望しておりましたが、事前の宣伝が功を奏したためか当日は超満員、用意した椅子が20数席オーバーしてしまいました。立ち見のお客様には大変ご不便をお掛けしてしまいましたが、何と言ってもリンコン史上初めての100名を超えるお客様で熱気ムンムンでした。

内訳は、メンバー 56名、ビジター 53名でしたが、特筆すべきは会員以外のお客様が多かったことです。ほとんどの方が、もっとこのような機会を作ってほしい、と希望されていたので、私達プロモーション側もいろいろ考えさせられた会でした。

### 第1部

#### テーマ：私の「これがタンゴだ」

各地のタンゴクラブ、愛好会の方々に、夫々ご自分にとっての推薦曲「これがタンゴだ」を語っていただきました。何と言っても今日のコメンテーターはタンゴ界の超ベテラン揃い、どんな曲が飛び出すか大変興味深いことでしたが、比較的新しい(?)録音も多くて意外な感じがしました。

#### 曲目リスト：

宮本政樹	LA TRAICIÓN (裏切り) フランシスコ ロムート楽団	1929年録音
吉岡達郎	SIN VUELTA DE HOJA (最後の手紙) アルフレッド ゴビ楽団	1956年録音
藤木立夫	QUEJAS DE BANDONEÓN (バンドネオンの嘆き)	
	アニバル トロイロ楽団	1958年録音
グロリア米山	CUANDO ESTEMOS VIEJOS (歳老いしとき) ホルヘ ファルコン (唄)	
黒木皆夫	UNA NOCHE EN LA MILONGA (ミロンガの一夜) スエニョス楽団	2007年録音



齋藤富士郎	LA CUMPARSITA (ラ・クンパルシータ) フランシスコ カナロ楽団	1961年ライブ録音
清水 裕	MAS ALLÁ...BANDONEÓN (バンドネオンよ あの頃は) アニバル トロイロ楽団	1967年録音
星野陸郎	SI SOS BRUJO (お前が魔法使いなら) オスバルド プグリエーセ楽団	1952年録音
弓田綾子	ADIÓS ARGENTINA (さらばアルゼンチン) オルケスタ ティビカ ビクトル	1930年録音
小林謙一	CICATRICES (傷あと) カルロス ディ サルリ楽団 唄：サンティアゴ デビンセンシ	1930年録音
島崎長次郎	POR ESA MUJER DE CARNAVAL フランシスコ カナロ楽団	1933年録音

## 第2部

### 納涼大会演奏会： 池田みさ子とロス・アミーゴス

昨年同様今日のために特別編成されたメンバー（クアルテート・リンコン？）が出演してくれました。メンバーの皆さんも会場の熱気に押されたか予定を2曲もオーバーする熱演でした。

#### 演奏プログラム：

ダリエンソ メドレー

花火 FUEGOS ARTIFICIALES

降る星のごとく LLUVIA DE ESTRELLAS

命くれない

たそがれのオルガニート ORGANITO DE LA TARDE

軍靴の響き（ミロンガ） TAQUITO MILITAR

二人だけの夜

バンドネオンの嘆き QUEJAS DE BANDONEÓN

リベルタンゴ LIBERTANGO

最後にこの誌上をお借りして、「山の上ホテル」のご協力に深く感謝いたします。



池田みさ子とロス・アミーゴス

## 第78回 2014年9月9日 於 原宿「クリスティー」

出席者50名

前回の「山の上ホテル」で開催した納涼大会は100名を超えるお客様で大盛況でしたが、原宿クリスティーに戻っての通常開催です。前回の反動でちょっと心配がありましたが、それも杞憂に終わり50名のお客様で満員でした。タンゴ愛好家の熱心さには頭が下がります。



### 第1部

コメンテーター：寺本千栄子

テーマ：タンゴストーリー「彼女が僕に教えてくれたこと、それは・・・」

- |   |         |
|---|---------|
| 1 曲目：カリシマス（愛撫）フランシスコ・ロムート               | 1937年録音 |
| 2 曲目：ニド・デ・アモール（愛の住み家）ミノット・ディ・チコ         | 1931年録音 |
| 3 曲目：ミ・ノーチェ・トリステ（我が悲しみの夜）トリオ・シリアコ・オルティス | 1936年録音 |
| 4 曲目：トルメンタ（嵐）カルロス・ディ・サルリ                | 1954年録音 |
| 5 曲目：ウン・ディレマ（あるジレンマ）フリオ・デ・カロ            | 1942年録音 |
| 6 曲目：レランパゴ・デ・グローリア（歓喜の稲妻）フランシスコ・カナロ     | 1934年録音 |

寺本さんの解説はとてもユニークで、ただ名曲名演を並べるだけでなく、その曲にそって一つのストーリーを作り上げていることです。ご自分ではまだ発展途上だと謙遜なさっていますが、とてもよくタンゴを勉強されているのが分かります。次の機会にはどんな物語を聞かせてくださるか楽しみです。

### 第2部

コメンテーター：池永博威

テーマ：自作自演



- |                                       |                               |       |
|---------------------------------------|-------------------------------|-------|
| 1 Parece Que Tu Ayer                  | アントニオ・スレーダ三重奏団                | 1938年 |
| 2 Música En Tu Corazón（君が心の調べ）        | ガブリエル・クラウシ楽団<br>（唄：リカルド・ルイス）  | 1945年 |
| 3 Con Alma Y Vida (m)                 | カルロス・ディ・サルリ楽団<br>（唄：ホルヘ・ドゥラン） | 1945年 |
| 4 Mienras Lloro Tu Ausencia           | （唄：ロサウラ・シルベストレ）               | 1995年 |
| 5 A Pascual Contursi（パスクアル・コントゥルシに捧ぐ） | ダンテ・プリチューリ楽団                  | ？年    |
| 6 Princesa（王女）(v)                     | フアン・マグリオ・パチョ楽団                | 1931年 |
| 7 1937                                | フリオ・デ・カロ楽団<br>（唄：ルイス・ディアス）    | 1938年 |

池永さんはベテランのタンゴファンであり、ネリマラテン・タンゴ倶楽部の重鎮です。今日のテーマは、表題のように自作の曲を自身の演奏による録音を集めました。池永さんの説によると、タンゴ

は勿論のこと音楽はすべて短調（マイナー）でなければならないそうです。ジャズも軍歌もマイナーなものがお好きとか。典型的な日本人なのでしょう。

### 第3部

#### 名曲5人選 「ラ・クンパルシータ」 その2

名曲5人選の3回目。世界の名曲「ラ・クンパルシータ」のことだけに、どのような名演が飛び出すかととても楽しみです。ダレッサンドロだけが前回と重複しましたが、やはり人気演奏には仕方のないところです。

- |          |                |
|----------|----------------|
| 1 石濱洋さん  | ホセ・バッソ         |
| 2 大澤寛さん  | オスバルド・プグリエーセ   |
| 3 佐藤進さん  | ニコラス・ダレッサンドロ   |
| 4 福川靖彦さん | ファン・ダリエンソ 43年盤 |
| 5 山本嘉子さん | ビアンコ・バチーチャ     |

## 第79回 2014年11月4日 於 原宿「クリスティー」

出席者43名

### 第1部

コメンテーター：高橋研二

テーマ：ビッグ バンドがタンゴを演奏したとき



- |                                |                    |                    |
|--------------------------------|--------------------|--------------------|
| 1 EL CHOCLO エル チョクロ            | スタン ケントン楽団         | Stan Kenton 1941   |
| 2 ADIÓS PAMPA MÍA アディオス パンパ ミア | ザビア クガート楽団         | Xavier Cugat 1963  |
| 3 EL AMANECER 夜明け              | 見砂直照と東京キューバンボーイズ   | 1964               |
| 4 OLÉ GUAPA オレ グアパ             | 原信夫とシャープス アンド フラッツ | 1965頃              |
| 5 UNO ウノ                       | ペレス プラード楽団         | Pérez Prado 1963   |
| 6 CUMPARSITA MAMBO クンパルシータ マンボ | ルイス アルカラス楽団        | Luis Arcaras 1956頃 |

高橋さんはラテン音楽全般の研究家で大コレクターですが、タンゴにも造詣が深く、タンゴとラテン音楽の関わりについてのお話はいつも楽しく聴かせていただいています。今回はいつも聴いている名曲ばかりですが、ラテンバンドが演奏すると新しい録音を聴いたようでかえって新鮮な気がしました。クンパルシータ マンボだけはアルゼンチンのタンゴ楽団では演奏したことがないでしょう。



## 第2部

コメンテーター：宮本政樹

テーマ：今一度、蘇れ！あの時代の忘れ難き旋律の響き



- |   |  |        |
|---|--|--------|
| 1 | NO VOLVERÁS A TU BARRIO (F. Pracánico) 下町には帰らない<br>フランシスコ・プラカニコ楽団                | 1928年  |
| 2 | CLUER DOLOR (R. Ventura) 過酷な苦しみ<br>ホセ・セルビデオ楽団                                    | 1928年  |
| 3 | GRINGA (L.E. Oliveras Viera) 異国の女<br>フリオ・ポジェーロ楽団                                 | 1927年  |
| 4 | LA ÚLTIMA CARTA (A. Magaldi-P. Noda-C. Pesce) 最後の手紙<br>歌) アグスティン・マガルディ           | 1932年  |
| 5 | LA LINDA PEBETA (B. R. Atelia) 麗しのペベータ<br>エドガルド・ドナート楽団                           | 1931年  |
| 6 | BOHEMIO (A. Geraci-I. Sabatini) ボエミオ<br>オルケスタ・カステジャーノス                           | 1930年頃 |
| 7 | PA'QUE TE FUISTE (A. Buglione-De Paulis) どうして君は行ってしまった<br>ミノット・ディ・チコ楽団 歌) ブグリオーネ | 1930年  |

タンゴ・クラブ「ノチェーロ・ソイ」の主催者でタンゴダンスの名手として知る人ぞ知る宮本さんですが、聴く方のタンゴとなるとガチガチのオールドファンであることが分かります。しかも今日のプログラムのように凝った選曲で私達を驚かせてくれます。

## 第3部

### 小川紀美代 バンドネオン ソロ演奏

小川さんはリンコン初出演、なぜもっと早く出ただけなかったのか不思議ですが、普段はソロ、デュオ、トリオなどで大活躍、女性とは思えないダイナミックな弾き方に全員大喝采でした。予定を2曲オーバーしての大サービス、時間切れにならなければいつまでも弾いてくれそうなノリの良さでした。また近いうちにもう一度登場してもらいたいプレーヤーです。

- 1 EL CHOCLO
- 2 POR UNA CABEZA
- 3 PALOMITA BLANCA
- 4 EL DÍA QUE ME QUIERAS
- 5 EL CÓNDOR PASA

Otras

LIBERTANGO

ふるさと - VOLVER



## 第24回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 鈴木 忠夫 —

去る11月9日（日）に第24回「関西リンコン・デ・タンゴ」が神戸三宮の「サロン・ド・あいり」に於いて催された。通りから階段を上がった二階に「サロン・ド・あいり」はあるが階段の途中から今日のライブの「タンゴ・コケータ」のリハーサルの音が聞こえてきた。いつもならトリを務めるライブが、今日は後に別の仕事が控えているので皮切りの登場だとか。忙しいのは結構なことだ。

昼食をとって一休み後いよいよ開演。「タンゴ・コケータ」はピアニストの吉岡凜さんをリーダーとするトリオで、オルケスタ・アストロリコのメンバーのビオリン外蘭美穂さん、バンドネオン星野俊路さんの3人で構成。吉岡さんはアストロリコのメンバーではないがアストロリコの平花舞依さんにピアノを師事したので無縁ではない。今日は外蘭美穂さんに代わって、いつもはアストロリコでビオラを担当している木村直子さんがビオリンを受け持ち、更にファンからの強い要望によってコントラバスの大塚功さんがゲスト参加され、特別バージョンのクアルテートによる演奏だ。

「エル・チョクロ」によって演奏が開始された。メンバーが少し変わっているがいつもの活気に満ちた演奏で、ビオリンの木村さんは日頃アストロリコではビオラという縁の下での力持ち的なあまり前面に出ない楽器を弾いているが、今日のビオリンは自由奔放水を得た魚のようだ。コントラバスが加わったことで音楽に厚みが増し、トリオでは演奏できない「コントラバヘアンド」も取り上げられた。「コントラバヘアンド」に続いてプグリエーセの名演でおなじみの「ジュンタ・デ・オロ」が演奏されたがクアルテートにとってかなり荷の重い曲に取り組む気概を買おう。此の演奏ではバンドネオンの星野俊路さんが力演した。彼は相変わらず寡黙だが彼のバンドネオンは最近とみに表情が豊かになり良く歌うようになったと思う。古典曲から現代曲まで、タンゴ、ヴァルス、ミロンガと多彩なプログラムで楽しいライブだった。

続いて第2部は姫路在住の二名、井上潤さんと鈴木忠昌さんのレココンによるプログラムだ。先ず井上さんのプログラムは名曲「インスピレーション」を5楽団で聴き比べようという趣向で今回は3回目になる。井上さんの選楽団？はよく考えられていて各楽団がそれぞれ個性的で多彩なので同一曲でも全くだれることはなかった。聴き比べて改めてプグリエーセの偉大さを痛感した。

続いて鈴木忠昌さんのプログラムはこれまた聴き比べには違いないが、本旨はマトス・ロドリゲスが行進曲として作った「ラ・クンパルシータ」の発端からロベルト・フィルボが第3部を付けてタンゴとして完成させた経緯や年代、それにまつわるエピソード等あまり知られていないクンパル史を話された。更にここに登場した5楽団のマエストロ全員が、ロドリゲスが行進曲としてこの曲を作った1914年の生まれで、曲とマエストロ達が揃って同い年という凝った構成になっている。しかし生年を揃えるのに楽団の選定は苦労したのではと思った。内容的には興味深いものだった。

小休止の後第3部が開始された。第3部は日本タンゴ・アカデミー（NTA）会長の飯塚久夫さんの登場だ。「映像で見るタンゴの魅力」と題して珍しいビデオを持って態々東京からおいで下された。

プログラムは四部構成で①は＜来年はダリエンソ・スタイルで＞と題してファン・ダリエンソ楽団とその後継楽団で構成されている。と思ったがよく見るとヘンなのが入っている。プグリエーセの後

継者コロール・タンゴだ。どう考えてもダリエンソとは対極の存在と思うが飯塚さんの言ではコロール・タンゴが唯一のダリエンソ・スタイル？だそうだ。曲は「エステ・エス・エル・レイ」で音だけ聞けば少々荒っぽいがまさしくダリエンソだ。流石コロール・タンゴと感心。演奏だけでなくダリエンソの偽物がダリエンソの指揮を誇張した身振りで指揮をするのには笑ってしまった。映像の力は大い。来春の民音タンゴはカルロス・ラサリの甥のファクンド・ラサリの楽団が来るそうで、これにかこつけた飯塚会長のサービスだ。最後は本物のダリエンソで締めくくった。

続いて②<タンゴ黄金時代は続いている>だが、本題に入る前にタンゴダンスの長年の怨敵の風俗営業法に対するNTAの取り組みについて報告があった。飯塚会長は警察庁に50回ぐらい行きタンゴダンスの何たるかを説き、実物も見せ、国際的な認識からいかに見当違いの法の適用であるかを説いて、やっと風営法からダンスホールを外す改正案が国会に上程されるに至った経緯を話された。

ご苦勞様でした。ここで本来のプログラムに入って第2のタンゴ黄金時代の曲、演奏を聴く。今は世界的にタンゴダンスが大流行中で、流されるタンゴはこの時代のものが主流だとのことだ。当然。

続いて③<来日したタンゴを象徴するマエストロたち>何とも懐かしい顔ぶればかりだ。マエストロは勿論メンバーたちにしても存命者は数えるほどだろう。我が身にしてもあの頃はまだまだ働き盛りの壮年だった。誰かが言っていましたナ、あれから四十年！

最後④<締めは何と言ってもプグリエーセ>タンゴは様々の才能が結集されて成り立っていると思うが、楽団指揮者だけに絞るとその頂点に、プグリエーセを据えるタンゴファンは多いのではないか、コロール・タンゴはリディア未亡人からプグリエーセの後継者のお墨付きを頂いているが編成の弱小もあってかスケールの小ささは否めない。かつてのプグリエーセの怒涛のような圧倒感はどう望めないのだろうか。

飯塚会長は視野の広い内容を歯切れのよい東京弁でユーモアを交えて話され、楽しいひと時だった。恒例吉澤義郎さんの集合写真撮影後懇親会に移り歓談に時の経つのも忘れた。

当日は雨天で出席率が悪く残念だった。出席者 NTA会員11名、会員外10名



出席者集合写真

(写真撮影：吉澤義郎)





演奏するTANGO COQUETA



井上潤さん



鈴木忠昌さん



飯塚NTA会長



懇親会風景



(写真撮影：吉澤義郎)

## &lt;プログラム&gt;

## \*\*\*\*\* 第 1 部 \*\*\*\*\*

## TANGO COQUETA の演奏を楽しむ

- |    |  |                          |
|----|--|--------------------------|
| 1  | EL CHOCLO<br>エル チョクロ                   | (A. Villoldo)            |
| 2  | INSPIRACIÓN<br>インスピレーション               | (P. Paulos)              |
| 3  | LÁGRIMAS Y SONRISAS<br>涙と笑い            | (P. de Gullo)            |
| 4  | CONTRABAJEANDO<br>コントラバヘアンド            | (A. Troilo A. Piazzolla) |
| 5  | YUNTA DE ORO<br>ジュンタ デ オロ              | (O. Ruggiero)            |
| 6  | I KISS YOUR HANDO MADAME<br>奥様お手をどうぞ   | (F. Rutter R. Erwin)     |
| 7  | EL TORITO<br>仔牛                        | (A. Villoldo)            |
| 8  | LOCA<br>狂女                             | (M. Jovés)               |
| 9  | A EVARISTO CARRIEGO<br>エバリスト カリエーゴ に捧ぐ | (E. Rovira)              |
| 10 | LA CUMPARSITA<br>ラ クンパルシータ             | (G. H. Matos Rodríguez)  |
| 11 | TANGUERA<br>タンゴ好きのお嬢さん                 | (M. Mores)               |

ピアノ 吉岡 凛 大阪音楽大学 短期大学部 卒  
2002年よりタンゴピアノをアストロリコのピアニスト平花舞依氏に師事、2005、2008年渡  
亜、ホセ・コランジェロ等に師事、現地でのコンサート等に出演し好評を博す。「タンゴ・  
コケータ」のリーダー。

バンドネオン 星野 俊路 19歳の時バンドネオンを始め、元O. T. トーキョーの岡本昭氏にタンゴの基礎を習う。  
24歳で京都に転居、アストロリコの門奈紀生氏に師事、アストロリコのメンバーとして活躍、  
「タンゴ・コケータ」他上田裕司の「タンゴ・ガルーファ」バンドネオン3台のアンサンブル  
「タンゴ・エン・ピア」の他ギターとのデュオ「タンゴ・グレリオ」など、様々な形態でのタ  
ンゴを発信。

バイオリン 木村 直子 京都市立芸術大学 卒 ウィーン市立音楽院留学 テレビ西日本賞受賞  
京都フィルハーモニー室内合奏団コンサートミストレスを経て音楽企画集団  
「音登夢」(おととむ) 主宰、アストロリコのメンバー。

コントラバス 大塚 功 大阪音楽大学 器楽学科 卒  
 西出昌弘氏、幣一両氏に師事、ホテル等で演奏。1995年よりアストロリコで演奏、2000  
 年第5回タンゴサミット・ロサリオ大会に招聘され日亜親善交流に貢献。現地の日本人か  
 ら感謝状を贈られる。

\*\*\*\*\* 第 2 部 \*\*\*\*\*

「 靈感 」 ききくらべ・・・パートⅢ

007 井上 潤（姫路）

INSPIRACIÓN（靈感） P, パウロス 曲 L. ルビンスティン 詞

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 1 マヌエル・ピサロ 楽団     | 1931年 |
| 2 オスマル・マデルナ 楽団    | 1950年 |
| 3 セサル・サニョーリ トリオ   | 1958年 |
| 4 フアン・カナロ 楽団      | 1960年 |
| 5 オスバルド・プグリエーセ 楽団 | 1962年 |

LA CUMPARSITA 作詞 P. コントウルシ E. マロニ  
 (ラ・クンパルシータ) 作曲 G. H. マトス・ロドリゲス

215 鈴木 忠昌（姫路）

- |                                     |              |            |          |
|-------------------------------------|--------------|------------|----------|
| 1 カルロス・ガルシア 楽団                      | 1914年4月21日生れ | 1970年代     | O D      |
| 2 アルベルト・カスティージョ<br>伴奏 オルケスタ         | 1914年12月7日生れ | 1950年代     | O D      |
| 3 オルケスタ・ティピカ東京<br>指揮：早川真平<br>歌：藤沢嵐子 | 1914年2月11日生れ | 1968年（日）   | CBS SONY |
| 4 エクトル・バレラ 楽団                       | 1914年1月29日生れ | 1960年代     | O D      |
| 5 アニバル・トロイロ 楽団                      | 1914年7月11日生れ | 1963年4月25日 | V I C    |



## \*\*\*\*\* 第 3 部 \*\*\*\*\*

## 映像で見るタンゴの魅力

NTA会長 001 飯塚久夫（東京）

## &lt;来年はダリエンソ・スタイルで&gt;

- |   |  |                            |
|---|--|----------------------------|
| 1 | ロカ LOCA<br>カルロス・ラサリ Carlos Lázzari                         | (M. Jovés)                 |
| 2 | これが王様だ ESTE ES EL REY<br>コロールタンゴ COLORTANGO                | (M. Caballero)             |
| 3 | ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA<br>オスバルド・フェリ Osvaldo Ferri         | (G. H. Matos Rodríguez)    |
| 4 | 忍耐 PACIENCIA<br>フアン・ダリエンソ Juan D'Arienzo (Alberto Echagüe) | (J. D'Arienzo-F. Gorrindo) |

## &lt;タンゴ黄金時代は続いている&gt;

- |   |  |                           |
|---|--|---------------------------|
| 5 | 心のときめき AL COMPÁS DEL CORAZÓN<br>ミゲル・カロー Miguel Caló (Raúl Berón)               | (D. Federico-H. Expósito) |
| 6 | バンドネオンの嘆き QUEJAS DE BANDONEÓN<br>アニバル・トロイロ Aníbal Troilo                       | (J.de Dios Filiberto)     |
| 7 | 日々つのる想い CADA DÍA TE EXTRAÑO MÁS<br>レオポルド・フェデリコ Leopoldo Federico (Carlos Gari) | (A. Pontier-C. Bahr)      |
| 8 | ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA<br>マトス・ロドリゲス楽団 Orq. Matos Rodríguez                    | (G. H. Matos Rodríguez)   |

## &lt;来日したタンゴを象徴するマエストロたち&gt;

- |    |   |                |
|----|---|----------------|
| 9  | アディオス・ノニーノ ADIÓS NONINO<br>アストル・ピアソラ Ástor Piazzolla              | (A. Piazzolla) |
| 10 | とろ火で A FUEGO LENTO<br>キンテート・リアル Quinteto Real                     | (H. Salgán)    |
| 11 | 靈感 INSPIRACIÓN<br>フロリンド・サッソーネ Florindo Sassone (Eduardo y Gloria) | (P. Paulos)    |
| 12 | タンゲーラ TANGUERA<br>フランチャーニ=ポンティエル Francini=Pontier                 | (M. Mores)     |

## &lt;締めは何と言ってもプグリエーセ&gt;

- |    |   |                  |
|----|---|------------------|
| 13 | チャカブケアンド CHACABUQUEANDO<br>コロールタンゴ COLORTANGO | (R. Álvarez)     |
| 14 | チケ CHIQUÉ<br>オスバルド・プグリエーセ Osvaldo Pugliese    | (R. L. Brignolo) |

# 第14回 「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

西村 秀人

第14回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以下、中部リンコンと略記）は6月29日（日）13時より、私・西村のプログラムに、コントラバスとピアノによるDuo Refre（デュオ・リフレ）をゲスト演奏に迎えて、愛知県・名古屋市の喫茶店「喫茶ロイヤル」を会場として行われた。天候もよく、東京・大阪など遠隔地からの参加者もあり、会場収容数の上限である40名以上の参加者が集まった。

久々の名古屋での開催ということもあり、集客の点で心配もあったが、各方面のご協力もあり、近隣地域からの参加も多く、当初の予定を上回る参加者数となった。進行は丹羽宏理事がつとめ、プログラムについては私・西村が昨年から本年にかけて行ったタンゴ日本渡来100周年記念講演をベースに、音源と映像を分けて2部構成とし、中部リンコン向けに使用音源・映像を差し替えたプログラムとした。

## 第1部 音で聴く日本のタンゴ100年史（担当：西村秀人理事）

前半はパワーポイントによる写真等の資料掲示を伴いつつ、1914年のアメリカ人ダンスペアの日本来訪から、1960年代の戦後タンゴブームの様相までを駆け足で紹介、それぞれの時代を象徴する音源を途中紹介していった。武蔵野管弦楽団による「ラ・ベラ・アルゼンチナ」（La bella argentina）は少なくとも1921年以前の録音で、日本人によるタンゴ演奏の初期の例である。続くは巴里ムーランルージュ楽員の名演「ラ・クンパルシータ」。さらに日本で最初のオルケスタ・ティピカ編成の楽団、高橋孝太郎指揮オルケスタ・ロサの唯一のレコード「S.O.S.」と続き、ご当地ものということで、名古屋のローカル・レーベル「センター・レコード」のスタジオ・オケによる「カミニート」を紹介した。これは最近CD復刻されたものだが、原盤表記はJuego limpio。おそらくはF.カナロ作 Juego limpioの綴り間違いだと思うが、どうしてそれが録音時に「カミニート」と混同されたのか不思議である。戦前の「ジャズソング」としてのタンゴも1曲取りあげた。「ボエマ」の戦前のレコーディングは淡谷のり子、ディック・ミネ、マリー・イボンヌなど多数あるが、ここでは松竹歌劇団のスター、水の江瀧子の歌。当時人気絶頂の水の江、決して歌はうまいとは言いが、堂々たる語りの部分は往時の人気を髣髴とさせる。

戦争で大きな断絶を経験した日本のタンゴは戦後、民放ラジオの開局により大きく進展する。各局ともタンゴ楽団を専属にしたので、折から増えていた日本人向けのキャバレー、ダンスホールと共にタンゴ楽団の重要な仕事場となった。今回は「平和生命提供ポルテナ音楽」の放送テープより、坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテナ演奏の「ドン・ファン」（高山正彦の解説入り）、藤沢嵐子が早川真平と刀根研二の伴奏で歌う「テ・キエロ」を取りあげた。その後1950年代末から実演喫茶が隆盛を極めるが、1958年に当時のタンゴ喫茶でライブ録音されたアルバム「タンゴ・エン・トウキョウ」より、新進気鋭の小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテスの「ラ・ビルータ」をとりあげた。

1950年代はアルゼンチンからのアーティストの来日が始まった時期でもある。ファン・カナロ楽団の1曲は1954年東京宝塚劇場でのライブ録音である。第1部最後は1961年に来日、2年半ほど滞在して日本の演奏家・歌手に大きな影響を残したバンドネオン奏者フェルナンド・テルのトリオによる演奏「バンドネオンの嘆き」。スタジオ録音もあるが、ここではお別れ演奏会となったヤマハホールでのライブ録音から選んだ。

## 第2部 日本のタンゴ史を飾るアーティスト/来日楽団の映像集（担当：西村秀人理事）

ここからは、戦後の日本のタンゴ・アーティストと、1960～70年代の来日時に収録されたアルゼンチンのアーティストの映像を時代の流れでまとめてみた。まずは1955年の映画「月に飛ぶ雁」から、日本に9カ月滞在したバンドネオン奏者ホルヘ・カルダーラ、藤沢嵐子と早川真平とオルケスタ・ティピカ東京の演奏シーン、その後早川真平とオルケスタ・ティピカ東京が1964年にアルゼンチン公演を行った際に出演した映画「夏の夜の旅」から、演奏と藤沢嵐子の歌。さらに1966～67年の坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤと阿保郁夫が世界ツアーの途中で出演したテレビ映像「灰色の午後」。ツアー後ニューヨークにとどまった岩見和雄の姿ははっきり写っているが、リーダーの坂本政一がほとんど映っていないのは気の毒。

その後は来日楽団のTV出演の映像で、1964年のキンテート・レアルは映像はよくないが、きわめて貴重なものということでプログラムに含めた。その後1971年エクトル・バレラ楽団、1972年フロリンド・サッソーネ楽団、1973年フランチーニ＝ポンティエル楽団、1979年オスバルド・プグリエーセ楽団と続けてご覧いただいた。この頃は来日公演の宣伝で朝のモーニングショウに出ることが多く、普段から深夜の演奏に慣れているアルゼンチンのアーティストに朝の生演奏は厳しいものだっただろう。プグリエーセ楽団の「想い出」は放送時間の都合なのか、途中の部分を抜いてわずか1分30秒の短縮アレンジ版になっており、別な意味で貴重なものかもしれない。

その後本年6月3日に逝去した歌手ビルヒニア・ルーケ追悼の意味をこめ、1987年初来日時に出演した東京ローカルの番組から「ラ・クンパルシータ」を選んだ。最後の2つは現代を代表して、戦後タンゴ・ブーム期からずっと活動しているほぼ唯一のオルケスタ、西塔裕三とオルケスタ・ティピカ・パンパのステージ映像（1993年「軽音楽大全集」より）、さらに私も監修として関わった、ヒストリーチャンネルの2011年の番組「昭和タンゴ～小松亮太がたどるその歴史～」より、小松亮太が志賀清、家野洋一、松波常雄、森川俱志らのベテラン勢と演奏したアストル・ピアソラ作品「チャウ・パリ」をご覧いただいた。タンゴ・ブーム期と空白期を経て登場した新世代とベテランの競演、さらにタンゴ再評価の起爆剤となったピアソラ作品の演奏ということで象徴的な映像である。最後におまけとして、オランダのタンゴ楽団マランドの市販DVDから、ボーナス映像に映りこんでいた故・高橋忠雄氏の姿をご覧いただいた。なお、今回第1部と第2部の一部には故・石川浩司氏のコレクションから西村が受け継いだものを使用したことを付記しておく。

## 第3部 Duo Refre（デュオ・リフレ）ミニ・コンサート

第3部は、名古屋を中心に活躍する丹治清貴（コントラバス）、長井美香（ピアノ）のコンビによるデュオ・リフレのミニ・ライブである。すでに中部リンコン・デ・タンゴにはバンドネオンの島田由美子らとの共演で登場していたが、今回はデュオ・リフレ単独での登場となった。コントラバスとピアノのデュオという編成自体も珍しいが、コントラバスをアレンジのメインに置くという、おそらく日本でもアルゼンチンでも他に例を見ないユニークなデュオである。タンゴだけでプログラムを構成した単独のライブはほぼ初めてということで、一層力の入った演奏となった。

演奏は早めのテンポで押し切る「フェリシア」に始まり、「ラ・クンパルシータ」「想いのとどく日」、ヨーロッパタンゴから「奥様お手をどうぞ」「碧空」、再びアルゼンチンに戻って「パリのカナロ」、アムレット・グレコのカデンツァをアレンジした前奏をつけた「コントラバヘアンド」、コントラバスソロたっぷりの「キチョ」と熱演が続き、ピアノのカデンツァを伴った「アディオス・ノニーノ」、さらにスピーディな「リベルタンゴ」と後半はピアソラ作品でまとめた。アンコールは「エル・チョクロ」。コントラバスによるメロディー演奏、打楽器奏法、指と弓両方で刻むリズム、と実に多彩なスタイルでデュオとは思えないバラエティに富んだサウンドを聞かせてくれた。会場の都合もあり、電子ピアノでの演奏となったが、いずれももう少し大きな場所でグランドピアノで聞きたいと思わせる広がりを持ったデュオである。





司会の丹羽 宏さん



コメンテーターの西村秀人さん



会場前景



会場風景



出席者全員集合写真

(写真撮影：吉澤義郎)

RINCÓN DE TANGO EN NAGOYA 29 de junio de 2014

\*\*\*\*\*PROGRAMA\*\*\*\*\*

第1部 音で聴く日本のタンゴ100年史 (担当: 西村秀人)

1. ラ・ベラ・アルゼンチナ La bella argentina (Carlos Roberto)  
／武蔵野管弦楽団 (1921年以前) TOKYO RECORD 3193-B
2. ラ・クンパルシータ La cumparsita (G.H.Matos Rodríguez-デュフォール編曲)  
／巴里ムウラン・ルージュ楽員 (1932-33) REGAL 67270
3. S.O.S. (エセ・オ・エセ) (Francisco Pracánico-Enrique S.Discépolo-坂口新編曲)  
／オルケスタ・ロサ 指揮: 高橋孝太郎 (1935) TEICHIKU 1059
4. 悲しみの後に Juego limpio <=カミニート (Juan De Dios Filiberto) >  
／センター・ダンス・オーケストラ CENTER C110-B
5. ポエマ Poema (Eduardo Bianco曲-田賀甫・詞-仁木多喜雄・編曲)  
／水の江瀧子 (歌) コロムビア・タンゴ・バンド伴奏 COLUMBIA 28549-A
6. ドン・フアン Don Juan (Ernesto Ponzio)  
／坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤ 1955年6月ラジオ放送
7. テ・キエロ (君を愛す) (Francisco Canaro)  
／藤沢嵐子 (歌) 早川真平 (バンド・ネオン) =刀根研二 (ピアノ) 伴奏 1954年5月ラジオ放送
8. ラ・ビルータ La viruta (Vicente Greco)  
／小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス 1958年渋谷プリンスでのライブ録音
9. エントレリオスの人 El entrerriano (Rosendo Mendizábal)  
／フアン・カナロ楽団 1954年東京・宝塚劇場でのライブ録音
10. バンドネオンの嘆き (Juan De Dios Filiberto)  
／フェルナンド・テル・トリオ 1963年ヤマハホールでのライブ録音

## 第2部 日本のタンゴ史を飾るアーティスト/来日楽団の映像集 (担当：西村秀人)

1. 白い小鳩～ママ私恋人が欲しいの <1955年日本映画「月に飛ぶ雁」>  
Palomita blanca (A.Aieta) ～ Mama yo quiero un novio (R.Collazo-R.Fontaina)  
／ホルヘ・カルダーラ (バンドネン)、藤沢嵐子 (歌)、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京
2. パリのカナロ～海に向かって <1965年垂映画“Viaje de una noche de verano”>  
Canaro en París (A.Scarpino-J.Caldarella) ～ Frente al mar (M.Mores-R.Taboada)  
／早川真平とオルケスタ・ティピカ東京、藤沢嵐子 (歌)
3. 灰色の午後 En esta tarde gris (Mariano Mores-José María Contursi)  
／阿保郁夫 (歌)、坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニャ <1968年7月エトリコ?>
4. ラ・プニャラーダ La puñalada (Pintín Castellanos)  
／キンテート・レアル <1964年来日時のTV番組「夜のコンサート」より>
5. 大きな人形 A la gran muñeca (Jesús Ventura-Manuel Oses)  
／エクトル・バレーラ楽団 <1971年来日時のTV番組より>
6. さらば草原よ Adiós pampa mía (Mariano Mores-Francisco Canaro)  
／フロリンド・サッソーネ楽団 <1972年来日時のTV番組より>
7. タンゲーラ Tanguera (Mariano Mores)  
／フランチャーニ＝ボンティエル楽団 <1973年来日時のTV番組より>
8. 思い出 (レクエルド) Recuerdo (Osvaldo Pugliese)  
／オスバルド・プグリエーセ楽団 <1979年来日時のTV番組より>
9. ラ・クンパルシータ La cumparsita (G.H.Matos Rodríguez-E.Maróni-P.Contursi)  
／ビルヒニア・ルーケ (歌)、リベルトリオ伴奏 <1987年来日時のTV番組より>
10. エル・チョコロ El choclo (Ángel Villoldo)  
／西塔裕三とオルケスタ・ティピカ・パンパ <1993年TV番組「軽音楽大全集」より>
11. チャウ・パリス Chau París (Ástor Piazzolla)  
／小松亮太、志賀清、家野洋一、松波常雄他 <2011年TV番組より>



### 第3部 Duo Refre (デュオ・リフレ) ミニ・コンサート

コントラバス：丹治清貴 ピアノ：長井美香

1. フェリシア Felicia (Enrique Saborido)
2. ラ・クンパルシータ La cumparsita (G.H.Matos Rodríguez)
3. 想いのとどく日 El día que me quieras (Carlos Gardel-Alfredo Le Pera)
4. 奥様お手をどうぞ Ich küsse Ihre Hand, Madame (Ralph Erwin)
5. 碧空 Blauel Himmel (Josef Rixner)
6. パリのカナロ Canaro en París (Alejandro Scarpino-Juan Caldarella)
7. コントラバヘアンド Contrabajando (Ástor Piazzolla-Aníbal Troilo)
8. キチヨ Kicho (Ástor Piazzolla)
9. アディオス・ノニーノ Adiós Nonino (Ástor Piazzolla)
10. リベルタンゴ Libertango (Ástor Piazzolla)



デュオ・リフレ (丹治清貴、長井美香)

(写真撮影：吉澤義郎)

# 第15回 「中部リンコン・デ・タンゴ」 レポート

丹羽 宏

第15回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以降、中部リンコンと略記）は11月30日（日）13時より、場所を三重県に移し、四日市市内のライブ・ハウス「ジャズ・テーク・ゼロ」を借り切って開催した。会場席数の関係もあったが、大阪、静岡、愛知など遠隔地からの来会の方を含め、満杯の31名（会員 9名、ビジター 22名）となった。日頃から交流を深めているジャズ・ファンの参加もあった。開会后、教務で多用な中を、ご夫妻で参加頂いた西村秀人理事から、日本タンゴ・アカデミーの事業内容や近況を含めた挨拶を頂いた。

プログラムのテーマについては、SP、LP、CD、生演奏のバランスをとることに留意したこともあり、タンゴに広い観点から接することが出来、タンゴ経歴に係わらず満足頂けたようである。

又、ライブ・ハウスの生命線である凝った音響システムと杉系・檜系の板張り内装とが相俟って醸し出す雰囲気とサウンドを楽しむことが出来た。「フェリス・タンゴ」の生演奏では効果が如実に現れて、レコード演奏共々好評を博した。

## 【第1部】 SPレコード演奏

ゲスト解説者 澤田義寛

### 希観原盤による「アグスティン・バルディ（1884-1941）」作品集

「地域で活躍するタンゴ・ファン」をゲストに招いて、定型的なSPタンゴ解説からブレイク・スルーした話を披露して頂くため、三重県・名張市のSPレコードコレクター、澤田義寛氏に三度目の登場をお願いした。既に昨年来、二度に亘りタンゴ古典時代の人気作曲家を取り上げて、その作品による選曲プログラムを組んで貰ってきた経緯がある。「フランシスコ・プラカニコ（1898-1971）」と「ロドルフォ・シアマレーラ（1902-1973）」である。

今回はブエノスアイレス～モンテビデオといった、所謂ラ・プラタ・タンゴ圏の演奏家に人気があり、我が国でも取り上げられることが多くなった「アグスティン・バルディ（1884-1941）」の作品から10曲が選曲された。中部リンコン実行委員会からの要請曲も考慮された、拘りの選曲といえよう。

プログラムに入る前に、「アグスティン・バルディ」の処女作（1911年）とされるVicentito（ビセンティート）を献呈された「ヴィセンテ・グレコ」がオルケスタ・クリオージャで残したアコ録音を聴いた。

まずは「バルディ」作品のウォーミング・アップと言ったところ。

プログラムの1曲目と2曲目は誰もが認める名唱で、1930年録音になる「リベルタ・ラマルケ」のNunca tuvo novio（恋人なんか居なかった）と1933年録音「メルセデス・シモーネ」のLa última cita（最後の逢引き）。両女性歌手の人生にスポットを当てながら、歌い方の変化をとくと説明。

ここからは「バルディ」の作品らしい格調の高い器楽演奏が続く。La Guiñada（ウインク）といえ、余りにも「ファン・ダリエソ楽団」（1973）のイメージが強いが、数少ない音源の中から1932年の「アドルフォ・カラベリ楽団」を選んだのは当を得た選曲といえよう。Tierrita（土埃、沃土）で採り上げられた「セサル・サニョーリ・トリオ」の1959年の演奏はトリオの機能を最大限に活かした完成度の高いもので、La bordona との表裏でAntar-Telefunken SP盤に入っている。

続いては、30年代末から主として40年代の名演奏が並ぶ。Gallo ciego（盲目の雄鶏）は選定に困るほどの

録音が残されているが、ここでは「スピタルニク」、「ボナーノ」達と「アンヘル・ダゴスティーノ楽団」のバンドネオン陣を支えた、「アルフレッド・アタディア」率いる楽団が順当に選ばれた。

この後は「アニバル・トロイロ楽団」のTinta verde（緑のインキ）、「アルフレッド・ゴビ楽団」のIndependiente club（独立クラブ）、「オスバルド・プグリエーセ楽団」のEl paladín（勇士）等の名演が並んだ。解説抜きで聴いて居るだけでも満足感が得られるのは曲の持つ強みだろうか。

最後の2曲は、1956年「カルロス・ディ・サルリ楽団」から独立直後の「ロス・セニョーレス・デル・タンゴ」によるLa racha（疾風）と御本家の最後の収録となったEl abrojo（薊）の2曲を、ピアノ演奏の比較も絡ませて、1時間余のタンゴ講談をしめられた。

## 【第2部】 会員によるレコードとCD演奏

### パートⅠ 稀少LP盤《バンドネオン・リサイタル'80》タンゴ100年・ブエノスアイレス400年記念 「京谷 弘司+小松 勝」タンゴ・ドウオ 愛知県長久手市 鈴木 克比古

2005年開催の第6回「中部リンコン・デ・タンゴ」において、'70年代から'80年代にかけて日本のタンゴ界に一石を投じたアマチュア・タンゴ楽団、「エスペランサ・グループ」の活動を再評価するために、テーマとして大々的に採り上げられたことは記憶に新しい。

1975年制作の処女アルバムから、1982年のブエノスアイレス訪問時にテアトロ・サン・マルティンでライブ収録された第4集アルバムまでは、既に選曲・解説されて好評を頂いた。これらのアルバムの中で、第3集「バンドネオン・リサイタル'80」にはゲスト招聘参加したグループのライブ収録演奏が採用編集された。「京谷 弘司」（バンドネオン）と「小松 勝」（ギター）による2重奏である。

僅か4曲ではあるが、今後の両者による演奏は実現の可能性が少ないと思われるので、解説者の鈴木 克比古氏が今回のプログラムに取り上げて話されることになった。

3曲目のヴァルス、「ロマンセ・デ・パリオ」だけは「京谷 弘司」によるバンドネオン・ソロである。この当時における彼のバンドネオンの息吹がよく伝わってくる演奏として貴重といえよう。

50年代のタンゴ、「ダンサリン」や20年代の「エル・モティボ」、「ケハス・デ・バンドネオン」の2重奏では、イニシアティブをとるバンドネオンにコード進行で和していくアコスティック・ギターが聴き所であった。「エスペランサ」のLPアルバムB面に針を落として聴く機会は少ないだけに、コントラバス奏者として各種の「エスペランサ」に在籍していた鈴木解説者が、「エスペランサ」への思い入れ一杯の話と併せてLP音源を楽しむことが出来た。初めて聴く参加者も居られて良かったです。

### パートⅡ SUOMI TANGO《芬蘭タンゴ》特集 日本-芬蘭 外交関係樹立95周年記念 夭逝の音楽家 UNTO MONONEN (ウト・モノネン) 四日市市 丹羽 宏

今年は、1919年に当時の大国、ロシアから独立を果たした芬蘭国を我が国が承認し、アジア域で最初に外交関係を樹立した年。つまり、95年前に日本-芬蘭修交が結ばれた（フィンランド大使館HP）。直近の話では、今年11月にはアルゼンチンの音楽ドキュメンタリー映画『白夜のタンゴ』の上映が都内を嚆矢として始まった。来年6月には映画のストーリー追跡を目的とした芬蘭ツアーも決定している。

このツアーの訪問行事の一つに、第二次大戦後の芬蘭タンゴの大ブレイクに貢献した夭折の音楽家「ウント・モノネン」ゆかりの地を訪問するスケジュールがある。これに因んで「ウント・モノネン」の作品特集をパートⅡとして企画し、その概括部分だけでも理解頂けるように選曲した。

先ず、1曲目は芬蘭タンゴの歴史が半端でないことを、示唆する意味から第一次大戦勃発後（1915）と第



二次大戦直前（1939）の音源に触りだけ聴いた。既に個性的なタンゴの前触れが感じられる。1930年生まれの「ウント・モノネン」は当初「ツルク大学」で教会音楽を修めていたが、中止して作曲の道に入った。20歳あたりからは作曲とギター演奏・指揮に専念して、1950年には最初に出したワルツの歌唱曲が好評を博した。1955年に作詞・作曲した歌のタンゴ、Satumaa, サツマア（お伽の国）が幾多の歌手に取り上げられ大ヒットした。「ウント・モノネン」も一気に芬蘭タンゴを牽引する音楽家としての高い評価を受けることになった。その後は20種になんなんとするタンゴを世に出し、'60年代半ば迄のタンゴ・ブームを支えたが、残念ながら'68年に37歳で亡くなった。

2曲目と6曲目のSatumaaでは、1962年に最初にヒットさせた男性歌手「レイヨ・タイパレ」とオペラの世界的なバス歌手「マッティ・サルミネン」の名唱をウッディーな会場で堪能した。なお、「ウント・モノネン」と拮抗してタンゴを作った歌手「オラビ・ビルタ」（芬蘭タンゴの王様と呼称される）の歌は、曲数の関係で割愛した。3曲目のSateen tango（雨の中のタンゴ）を1963年に歌った女性歌手「ピルヨ・エイトマキ」は、その後も活躍している。4曲目のOnnen maa（幸福の国）は「モノネン」の特徴である哀愁感と情感に満ちた曲想が素晴らしい。5曲目の器楽曲、Kangastus（妄想）は歌無しでも飛びつきり聴き応えのある曲であり演奏なので、プログラムに敢えて加えた。以上、駆け足での解説だったが、芬蘭タンゴに興味を持たれた方は、音楽ドキュメンタリー映画『白夜のタンゴ』を鑑賞し、ツアーに参加されては如何でしょう。

### 【第3部】 生演奏 中部で活躍する「島田由美子（会員）とフェリス・タンゴ」 島田 由美子〜バンド・材料、小松田 和代〜ピアノ、伊藤 実知子〜バイオリン

中部域のタンゴ同好会には、バンドネオン奏者の島田由美子会員が主宰する「フェリス・タンゴ」のライブ演奏を要請する声が多い。急な出演依頼だったこともあって、ウッドベースを抜いた基本構成のフェリス・タンゴ・トリオで出演してもらった。

この判断の裏には、主宰者を会場に事前案内した際、場内残響に接してマイクレスとベースレスの演奏にも確信が持てたためだろうと推察している。

プログラムは「フェリス・タンゴ」がイニシアティブをとって選曲するが、曲順については今回も実行委員会へのお任せとなった。前回設定した曲順には、演奏者側から丁寧なクレームが付いたので、地元でしか採り上げないレベルトリオ・プロピオの「Pancho's bar」と「Tigre viejo」を前・後に振ってみた。聴く側にも好評だったので、今はホッとしているところである。

1曲目の「Pancho's Bar」は、当地で人気がありFMラジオの前振りテーマ曲にもなっている。3人のエネルギー的な演奏もあって冒頭から場内は盛り上がった。2曲目のCelosと3曲目のロマ系音楽Csardasはバイオリン奏者、伊藤さんの超得意とするダイナミックな演奏に大歓声が上った。中盤には、古典曲の「Comme il faut」、「Derecho viejo」を並べると場内は安心感が漂っていた。

次の曲群はファンも多くなった「ピアソラ・タンゴ」の3曲。低音楽器が不在とは言え、タンゴ演奏に賭けるピアノ奏者、小松田さんの左手が見事に低音をカバーしていた。特に「Contratiempo」のトリオ演奏は秀逸だった。今回のような女性タンゴ・トリオに対して、後日寄せられた評判が予想外に良く、今後とも出場の機会を模索して行きたいものだ。当地でのYokkaichi Jazz Festivalに参入する日も夢ではないように思う。

### 【リンコン懇親会】

リンコン終了後は「居酒屋レストラン」の特別ルームを借り切った懇親会となった。光廣会員、吉澤会員、海津会員、島田会員、澤田氏はじめ、10余人が参集して余韻を楽しんだ。



ゲスト解説者の澤田義寛さん



稀少LP盤を紹介する鈴木克比古さん



フィンランド・タンゴを紹介する丹羽 宏さん



演奏するフェリス・タンゴ・トリオ



出席者全員集合写真

(写真撮影：吉澤義郎)

<プログラム>

**【第1部】SPレコード演奏**

**13:10-14:10**

希少原盤による「アグスティン・バルディ」作品集<1884～1941>

**SPタンゴ蒐集家**

**三重県名張市 澤田義寛**

1. NUNCA TUVO NOVIO、恋人なんか居なかった <録音1930年>  
LIBERTAD LAMARQUE CON ORQUESTA <V́ctor-47524>  
(歌:リベルタ・ラマルケと楽団)
2. LA ÚLTIMA CITA、最後の逢引き <録音1933年>  
CANTA: MERCEDES SIMONE <V́ctor-37350>  
(歌:メルセデス・シモーネ)
3. LA GUIÑADA、ラ・ギニャーダ、“ウインク” <録音1932年>  
ADOLFO CARABELLI Y SU ORQUESTA TÍPICA <V́ctor-37302>  
(アドルフォ・カラベリ楽団)
4. TIERRITA、沃土 <録音1959年>  
CÉSAR ZAGNOLI Y SU TRÍO <Antar P-6085>  
(セサル・サニョーリ・トリオ)
5. GALLO CIEGO、盲目の雄鶏 <録音1948年>  
ALFREDO ATTADIA Y SU ORQUESTA TÍPICA <Ódeon -30702>  
(アルフレッド・アタディア楽団)
6. TINTA VERDE、緑のインキ <録音1938年>  
ANÍBAL TROILO Y SU ORQUESTA TÍPICA <Ódeon-7160>  
(アニバル・トロイロ楽団)
7. INDEPENDIENTE CLUB、独立クラブ <録音1948年>  
ALFREDO GOBBI Y SU ORQUESTA TÍPICA <V́ctor-1667>  
(アルフレッド・ゴビ楽団)
8. EL PALADÍN、勇士 <録音1945年>  
OSVALDO PUGLIESE Y SU ORQUESTA TÍPICA <Ódeon-7672>  
(オスバルド・プグリエーセ楽団)
9. LA RACHA、疾風 <録音1956年>  
LOS SEÑORES DEL TANGO <Musc Hall-15911>  
(ロス・セニョーレス・デル・タンゴ)
10. EL ABROJO、薊 <録音1958年>  
CARLOS DI SARLI Y SU ORQUESTA TÍPICA <Philips P-42053>  
(カルロス・ディ・サルリ楽団)



Agustín Bardi (アグスティン・バルディ)  
<Todotangoより>



**【第2部】 会員によるレコード&CD演奏 2題**

**14:20-15:30**

パートⅠ 希観LP盤《バンドネオン・リサイタル'80》タコ 100年・ブエノスアイレス400年記念より

**「京谷 弘司+小松 勝」タンゴ・ドゥオ 愛知県長久手市 鈴木 克比古**

1. DANZARÍN、踊り子 (Julián Plaza)
2. EL MOTIVO、動機 (Juan Carlos Cobián)
3. ROMANCE DE BARRIO、(下町のロマンス) (Aníbal Troilo)、京谷弘司 バンドネオン・ソロ
4. QUEJAS DE BANDONEÓN、バンドネオンの嘆き (Juan de Dios Filiberto)
5. ÁSTOR PIAZZOLLA MEDLEY、アストル・ピアソラ、メドレー集 (Ástor Piazzolla)

パートⅡ SUOMI TANGO 《フィンランド・タンゴ》特集

**三重県四日市市 丹羽 宏**

1. ① Tanko laulu、タンゴの歌、 歌：イイヴァリ カイヌライネン、<録1915>  
 ② Tahtikuvioita、星座 (曲：Paavo Raivonen)、 演奏：ダラペ楽団、<録1939>
2. SATUMAA、お伽の国 (曲・詞：Unto Mononen、国民的音楽家)、  
 歌：レイヨ タイパレ、<録1962>
3. SATEEN TANGO、雨の中のタンゴ (曲・詞：Unto Mononen)、  
 歌：ピルヨ・エイトマキ、<録1963>
4. ONNEN MAA、幸福の国 (曲・詞：Unto Mononen)、 歌：レイヨ タイパレ、<録1971>
5. KANGASTUS、妄想 (曲・詞：Unto Mononen)、  
 演奏：ネオルスティカレス・タンゴ 楽団、<録2002>
6. SATUMAA、お伽の国 (曲・詞：Unto Mononen)、  
 歌 (バス)：マッティ・サルミネン、<録1999>  
 —————ステージ整備&懇親・休憩 約20分間—————

**【第3部】 生演奏：島田由美子<会員>とフェリス・タンゴ 15:50-17:00**

**島田 由美子~指揮・バンドネン**

**小松田 和代~ピアノ**

**伊藤 実知子~バイオリン**

《演奏者の都合により曲目は変更する場合があります》

1. PANCHO'S BAR、パンチョス・バー (Raúl Luiz Moreno)
2. JALOUSIE (CELOS)、ジェラシー (Jacob Gade)
3. CSARDAS、チャルダッシュ (Vittorio Monti)
4. COMME IL FAUT、きっちりと (Eduardo Arolas)
5. DERECHO VIEJO、わき目もふらずに、頑固親爺 (Eduardo Arolas)
6. CONTRATIEMPO、災厄 (Ástor Piazzolla)
7. LO QUE VENDRÁ、来るべきもの (Ástor Piazzolla)
8. MICHELÁNGELO 70、ミケランジェロ・セネタ、70年のタンゴ・リーア・ミケランジェロ (Ástor Piazzolla)
9. TIGRE VIEJO、老いた虎 (Salvador Grupillo)
10. 君といつまでも (曲：弾 厚作、詞：岩谷 時子)



ヘルシンキ市内の<国民音楽作曲家シベリウス>  
顕彰公園にある頭像



タンゴ作詞作曲者：ウント・モノネン  
(1930年～1968年)



ヘルシンキ市内の中古レコード店内。タンゴ盤は奥部屋に在庫  
(第2部パート1 関連写真)



第15回中部リンコン会場<ジャズ・テーク・ゼロ>の入口

♪ 今回の開催会場貸切りを承諾して頂いた伊藤典夫オーナーに感謝。

## 愛好家インタビュー

## 伊藤 修作 (豊島区) さん

～タンゴ・ライブスポット「エル・チョクロ」～

聞き手 宮本 政樹

## 1.&lt;はじめに&gt;

NTAの機関誌でも何度か取り上げておりますが、豊島区雑司が谷のタンゴバー「エル・チョクロ」を経営している伊藤修作さんにインタビューとして初めてお話をお伺い致しました。「エル・チョクロ」は今や東京のタンゴ・ライブスポットとして、毎月多数の演奏家や歌手が盛んに活躍をしている場所であります。たまに東京にやってくる人も、ついでに「エル・チョクロ」に寄ってタンゴを聴いて行こうという人もおり、今や有名なタンゴライブのお店です。その伊藤修作さんにタンゴ観やお店の営業などの話をお聞きしました。

年前に出身の慶応大学のOB組織「東京三田倶楽部」が主催するイベントに、小林太平さん&江口祐子さんが出演されたのがダンスを



左から、Alejandro Schaikis, Nicolás Capsitzki, 伊藤修作さん  
Andrés Linetzky (2014年5月9日来店時)

## 2.&lt;音楽とダンスの関わり&gt;

**宮本** 伊藤さんがタンゴの世界に入ってきたのはいつ頃のことですか？

**伊藤** 本格的にタンゴに関わったのは27年前のタンゴ・アルゼンチーノです。バンドネオンの音色とタンゴダンスの素晴らしさに魅了されました。それからは、仕事の関係で海外の駐在、留学、海外プロジェクト業務に忙殺されタンゴとは無縁になっていました。12、3

始めるきっかけになり、銀座の教室とミロンガに通い始めました。そこでは年配の方々を含め、普通のスーツとシックなドレスの男女が大人の雰囲気です踊っておられ、今までのダンスへのイメージが一変し、「カッコいいなあ!」「これならやってみたい」と思いました。それから毎日のようにどこかのレッスンか、ミロンガに通うというダンス三昧。自然にタンゴの音楽への興味も強くなり、セステ



ート・マジョールやコロール・タンゴ以外の古い演奏を好んで聴くようになり、タンゴ・ライブにも通うようになりました。5年前頃から、「ノチェーロ・ソイ」や「タンゴ・すいよう会」のレコード・コンサートにも参加させていただき、他所では聴けない古典タンゴに接するようになりました。

**宮本** 初めてのレコード・コンサートの印象はいかがでしたか？

**伊藤** レココンはある意味、非常に新鮮な世界でした。昔ジャズ喫茶などで経験した、紫煙の中で静かに一人でレコードに聴きいるのとは違い、同好の皆さんと、タンゴを聴く喜びを分かち合いながら過ごすひと時の幸福感は格別です。そして、長年タンゴを愛してこられた方々のお話を肉声で聴かせていただくと、40～50年前のタンゴと共に過ごされた青春時代の情景と熱い想いが伝わって来て、タンゴを聴く楽しみも倍増します。

### 3.<タンゴ・バーの構想>

**宮本** 永年の仕事を辞めてまでタンゴの店の経営へと駆り立てたものは何ですか？

**伊藤** 日本の会社に10年務めた後に欧米の投資銀行等に永年勤め、転職も数回しておりますので、一般のサラリーマンの方のように第二の人生として、始めたのとは違います。50代半ばで次の仕事を考えている時、父母が老人ホームに入り、豊島区雑司が谷（現町名は南池袋）の築70年になる実家が空き家になりました。以前から「街場のバー」というか、繁華街でない所で、大人が気楽に立ち寄れて良質な音楽を楽しめる場所を作りたい、これまでの会社対会社の中の関係でない、個人対個人でお客様と接する仕事がしたいと思っていました。そんな中、不思議な巡り合わせでタ

ンゴを柱にしたライブ・ハウス兼カフェ&バーを2010年から始めることになりました。

**宮本** 30年近く前にバブルがはじけてこの10年近くまでに、東京にあった有名なタンゴのライブ・スポットの「コンソート」「ノスタルヒアス」「カンデラリア」「エル・パティオ」等の10ぐらいのタンゴの店がことごとく閉鎖してしまった状況で、よくタンゴだけの店を始めようと決心しましたね。これは大変な賭けだったと思いますが。

**伊藤** 店を始める頃は多くの友人、知人、飲食業専門家から、そして中西環江さんからも「タンゴだけでやっていくのは絶対やめなさい！」と言われました（笑い）。傾いて内装の傷みの酷かった古屋を不思議な和洋折衷空間に変えて下さった設計家と工務店、長年愛用されたグランド・ピアノを譲って下さったダンス仲間を始め多くの特別な方々との出会いと親身なサポート無しには今日はありません。そして、何の実績もない当店に気持ちよくご出演いただいた多くのタンゴ奏者の方々のお陰です。

**宮本** タンゴファンの絶対人口が少ないですからね。ジャズハウスやシャンソニエでタンゴを月一度ぐらい演奏するのはわかりますが、タンゴだけではお客様の集客力がないですよ。

**伊藤** ほんの一瞬ですが、ジャズ&タンゴにしようかと迷った事もありました。しかし、それではいかんと。まず何のためにやるのか、それでは特色がないと、タンゴ一本で行くことに決めました。正直、ジャズがメインで月一回ぐらいタンゴ演奏が聴ける店を何軒か回ってみました、あんまりインパクトを感じませんでしたし、確信があったわけではありませんが、タンゴ一つに絞った方が、時間は

かかって効果的だと考えました。新参者のライブ・ハウスとして、間口を広げて多数の中に埋没することは自滅行為とも思いました。

**宮本** 神田神保町のミロンガのように繁華街の中心ならば、タンゴ以外のお客さんも良く来てくれますが、ここは閑静な住宅地ですから、それほどの集客は期待出来なかったんじゃないですか？

**伊藤** とにかく、古い実家を利用して、雑司が谷という昔ながらの街の中で、パリにある古屋の「シャンソニエ」のような「タンゴ小屋」を作りたいと思いました。こんなに多くの素晴らしい演奏者にご出演いただき、お客様がこんなに来て下さるとは思ってもみませんでした。

**宮本** このお店は日本家屋を利用して作られた音楽を聴くための「癒しの空間」という雰囲気があるんですが、こんなお店を良く建築しましたね。

**伊藤** 何事も人との出会いの賜物かと思いますが、開業準備中に、都内でも何十軒もの古屋を改装してバーやレストランを作られた、設計家の石川純夫さん（故人）にお会いでき設計施工監督をお願いできたことが全てです。30年来、古民家改築を共に手がけてこられた工務店さんとの息の合った仕事振りには感動しました。

**宮本** 店に入ったとたんに「いやー、すごいな！違うな！」という印象で、和と洋がうまく調和されて音楽を聴くのに心が落ち着きますね。タンゴ喫茶でもいいですね、儲からないけど。

**伊藤** いやー、嬉しいです。手前味噌ですが、時々店で一人ポツンと飲めない酒を飲みなが

ら古いタンゴを聴いていますと「あー、いい時間だなあー」なんて思います（笑い）。ライブの時は多くのお客様との対応に追われバタバタしておりますが、カフェ&バー営業時は、こんな空気感の中でゆっくりと時間を忘れていただければ幸いです。



エル・チョクロの店内

**宮本** しかし、和洋折衷のこのような落ち着いた感じのあるお店によく仕上がりましたね。

**伊藤** 石川さんは本当に気持ちを入れて造ってくれました。正に職人気質の方で、私の懐も考えていただき、天井とか欄間などは元のままですし、建具や椅子も独自のアンティーク・ネットワークで探してくれました。アンティークは値段があって無きが如しですから、コストの面からも石川さんとのご縁は当店を作れた最大の要因でした。演奏者もこの木質空間の響きを喜んでくれているようで嬉しい限りです。

#### 4.<エル・チョクロの企画と営業方針>

**宮本** エル・チョクロのプログラムではこれほど沢山の楽団や歌手を呼んで出演させているというのは他にも例がないような企画である

と思いますが、今や東京におけるタンゴのメッカですね。エル・チョクロにタンゴで出ることが一つのステータスになっている。ここでやっとデビューしたと言う人もいます。出演の売り込みに来る人もいます。

**伊藤** 僕は良い音楽家を心から敬慕しています。技量はもちろんですが、真摯で気持ちのこもった演奏を聴けた時の喜びに勝るものはありません。僕は特に耳が良いとは思いませんが、お金をいただいてライブを開催する以上、自分自身が聴いて感動した音楽家に出演して欲しいと思っています。お陰様で、この頃は演奏家の方からも出演申し込みをいただくようになりましたが、これからも続けて行きたいのは、初めてご出演いただく前には、先ずその方の演奏を僕自身が聴きに向くことです。これは、どんな商売でも一番大事な「仕入れ」だと思っています。また、そんな素晴らしい演奏を一人でも多くの方に聴いていただきたく、まだまだ知名度の低い当店ですので、ライブ・チラシは出演者にも協力していただきライブ毎に力を入れて作っています。そんなチラシを置いてくださるカフェやバー等への「檀家さん回り」も続けています。ただ、困ったことに、酒に弱いもので、三軒回るとベロンベロンになってしまうんです(笑い)。奇麗事を言うようですが、ご出演をお願いした以上、集客は一義的に当店の責任だと思っています。もちろん、ご出演者のファンが来てくださるのはとても有り難いことですし、店と出演者が50/50で集客できることが理想だと思っています。いつか、エル・チョクロに行けば“必ず”“誰かの”上質なタンゴの生演奏が聴ける、とお客様が覚えてくださるような店になりたいものです。

**宮本** ベテラン演奏家の京谷さんや、タンゴ・

クリスタル以外にも、今後期待されている若手の演奏家や歌手の方々も数多く出演しているし、本場の演奏家のパブロ・シーグレル等も4日間もここで呼べるというのはすごい事ですね。

**伊藤** 本当に光栄で、正に望外の喜びと思っています。シーグレルさんは当店が招聘した訳ではありませんが、ご都合が合えば喜んで出演していただきます。何故かこの店を気に入ってくださっているようで嬉しい限りです。

**宮本** それに若い有望な人達を呼んでますよね。若い人達に活躍の機会を与え、育てるという意味でもタンゴの普及に貢献していると思いますね。

**伊藤** 育てるなどというおこがましい思いはありません。ベテランの方々にも、シーグレルさんにも、喜んで気持ちよく出ていただけるからこそお願いしていますので、若い演奏者の方々にも同じスタンスでご出演をお願いしています。僕の演奏家についての情報量は限られていますので、いろいろアンテナを張り、新しい方々の演奏を聴きに行っています。いつも同じ顔ぶれで安易に回してしまうことは避けたく、今年からタンゴ100%ではなく、7割~8割をタンゴ、あとはタンゴ奏者が他のジャンルの方と組まれるユニットやクラシック、ラテン、シャンソン、ジャズ等の“タンゴ周辺”の当店と相性のいいアコースティックなユニットにご出演いただくようになりました。

**宮本** 若い人は新しい試みも必要ですね、他の楽器なども入れてチャレンジをするという。タンゴも変わっていくだろうし、音楽家は先の事を考えて、自分のオリジナリティも作りたいし。

**伊藤** 音楽好きのタンゴを知らない人に、兎に



角、一度タンゴを聴いて貰う事が、店の経営的にも大変大事なことだと思います。若い方に限らずベテランそして本格的なタンゴ奏者達が、他のジャンルやこれまでと異なる楽器の演奏家を加えて、新しいユニットを組んでくれることは大歓迎です。カフェ&バー営業時のお客様に「一度でいいので、バンドネオンの生音を聴いてみてください」と繰り返しています。音楽好きの方が、この小空間でプロの弾くタンゴを聴いて心震えないのなら、何をしてもだめ、、しょうがない。映画「カフェ・デ・ロス・マエストロス」の中でカルロス・ガルシアが言っていることの繰り返しですが、上質なタンゴ演奏は全ての人の心に響くと信じています。タンゴを聴いたことのない方こそ、当店に気軽に立ち寄りいただきたいものです。何の商売でも新規開拓こそ命ですから。

**宮本** 日本タンゴ・アカデミーもマーケット・リサーチをして、新規開拓をしないとイケないですね。

**伊藤** それは本当にそうだと思います。タンゴって、聴いた事がない人というか、聴いたことがないと思っている人が非常に多いのが現実でしょう。音楽ファンの集まりでもなかなか話題に上りません。来店される“一般の”お客様は、僕の“押し売り”で、古典タンゴのバラエティーに接し、「タンゴって凄い!」、「こんなにバラエティーがあるとは!」と驚かれる方がほとんどです。

## 5.<レココン派と生演奏派>

**宮本** 昔から日本のタンゴの世界ではレココンでタンゴを聴いて楽しんでいる人と生演奏で楽しむ人がいて、両方に行く人は今でもそれほど多くはないですね。タンゴのレココン

の世界も日本独特の文化であり、ポピュラーの分野でもラテンを除いて例がないですね。このような現象をどう思いますか?

**伊藤** 昔からのタンゴ愛好家の方々はブグリエーセやディ・サルリ等の往年の名演奏を何度も、それこそレコードが擦り切れるほど聴いておられますので、今の演奏家の演奏では満足されないのも分かります。ただ、僕は音楽は生が一番と思っておりまして、演奏家は厳しい聴き手がいてこそ育っていくと信じておりますので、タンゴ通の方々がもっとライブにお出かけいただけるのを願っています。

**宮本** レココンだけでタンゴを聴いている楽しみ方をどう思いますか?

**伊藤** ある意味非常に新鮮であり、その手軽さがとても心地良くもあります。堅苦しさもなく、“タンゴ初心者”にも分かりやすく、しかも深く丁寧に解説されるスタンスは、レココンならではの妙味と思っています。願わくば、レココンが、いろいろなバリエーションで開催され、タンゴを全く知らない若い方々でも、もっと気軽に立ち寄れ、タンゴを聴くことの喜びとそのお洒落さに気付かされる機会が増えていけばと思います。当店へお出での“一般の”お客様は、かなりの割合で「タンゴは勉強してないから」という極めて“日本人的”なことをおっしゃいます。そんな、知識で音楽を聴こうとする思い込みをひっくり返すような、愉快で型破りなレココンがあっていいと思います。

## 6.<日本タンゴ・アカデミーの課題>

**宮本** 日本タンゴ・アカデミーも若い人達が入って来なければいずれは消滅してしまうであろうという存亡の危機に瀕しています。それをみんなで考えなければいけないと思います

が。

**伊藤** 今の時代、会員組織に加わり何らかの拘束を課されることを必要以上に避けていく傾向があります。始めに組織ありきのスタンスで新しいメンバーを集めることは、タンゴ関係に限らずとても難しいことと思います。多くのことが、ある程度まではネット上で容易く“分かって”しまうことも、情報収集のためにわざわざ集まることの意味を希薄化しています。一方、我々は人との交流と対話からでしか得られない情緒に富んだ示唆を求めています。タンゴという人生そのものの音楽は正に情緒の塊です。年齢、性別、その他の属性差を超えて、タンゴを愛する人たちが気軽に集い、タンゴへの思いを分かち合うことの喜びは決して変わっていないはずです。いい音楽を聴いた時に誰かとその喜びを語り合いたいという素朴な気持ちに添っていく、口コミレベルの活動も大切だと思います。

**宮本** NTAの機関誌についてはどう思われますか？

**伊藤** 会員に対してのものはその専門性も素晴らしい、後世に残す貴重な資料だと思います。ただ、“一般人”にも読みやすい、簡易なタ

ンゴ啓蒙誌のようなものが出来たら面白いと思います。音楽好きがちょっと手に取って、「タンゴって面白いかも、」と思ってくれば成功です。今はユーチューブでかなりのタンゴの名演が聴ける時代ですが、人は怠惰ですので検索のお手伝いは必要です。ちょっとしたガイダンスをしてあげることで、巷に“タンゴ既聴者”の数が倍増すると思います。一人でも多くの人にタンゴを聴いてもらわなければ、何も始まりません。新規開拓には、ユーザー・フレンドリーな営業ツールが必要でしょう。

**宮本** 大変長い間、貴重なお話ありがとうございました。これからも「エル・チョクロ」のますますの発展を願っております。





## ニューヨークにおけるタンゴ (1925-1937)

カルロス G. グロッパ (Carlos G. Groppa)

訳：弓田 綾子

監修・写真提供：島崎長次郎

### <序文>

#### アメリカは本当に“タンゴ不毛の地”なのか

島崎 長次郎

アメリカ（北米）は、かねて“タンゴ不毛の地”といわれ、愛好家からは軽く見られてきた傾向がある。あまりにも強大なジャズの陰に隠れてしまっているせいもあるからだろうが…、しかし、かつてはアメリカきっての映画スターのルドルフ・ヴァレンティノ（イタリア系）が、「黙示録の四騎士」などで見せたタンゴ・ダンスで一世を風靡するなど、当初のアメリカは、タンゴの普及推進に少なからぬ役割を果たしたことは認識しておく必要がある。ことに見落とせないのがわが国のタンゴ・レコード史の最初期（昭和2年～およそ10年間）におけるリリース状況だ。名曲のいくつもの貴重な初紹介盤を含め、ヨーロッパものに伍してなかなかの善戦を演じ、一部の愛好家間ではあるものの、これらはひそかに注目されてきたのも事実だ。

たとえば「ラ・クンパルシータ」では、昭和5年リリースのフリアン・ウアルテ楽団（Parlophon E-5125）が、この名曲のわが国への誇るべきデビュー盤になる（後の昭和9年コロムビアから再発 J-1961）し、「エル・チョコロ（邦題＝上靴）」はインターナショナル・ノベルティ楽団（指揮：N.シルクレット／Victor 21393）で初紹介。Matos Rodríguezのもうひとつの傑作「アディオス・アルヘンティーナ Lucky 5021」もドン・アルベルト楽団で初めて紹介されるなど、ともかくわが国へのタンゴの本格的な上陸に、アメリカ発信のタンゴはとくに初期において少なからぬ役割を果たしたといえる。演奏者ではほかに「ラ・クンパルシータ」の印象深い演奏を残したエバ・ボールや、人気のザ・カスティリアンズ（ルイス・カッツマン指揮＝コロムビア盤）の存在も忘れることはできないほか、オルケスタ・ティピカ・ビクトルの日本デビュー盤「DUCK（家鴨）＝PATO／OLD MAID（老嬢）＝SOLTERONA」Victor 20740や、「ラ・クンパルシータ」のビクター・タンゴ・オーケストラ Victor JA-208（事実上カジェタノ・プグリッシ楽団）などもアメリカ経由のため英語の表記でわが国に紹介されたのだった。

このような実態があるにもかかわらず、今まであまり話題にもならず、重視されてこなかったのは、アメリカにおける演奏者の素性や経歴、それに録音年などに関する資料が極端に乏しかったからだといえよう。レコードこそあれ、その実態を知るすべがなく、まさに隔靴搔痒の感が否めないまま、これまでは故人となってしまうわが国・タンゴの研究家、大森 茂氏などの独自の調査に頼る以外になかったのが実情だった。

そんな折のつい最近のこと、芝野史郎氏の遺品を整理していたところ、次のようなアメリカ発の好個のレ





ポートが出てきた。内容的には、もうひとつのところもあるが、今までの不明な点を含め、貴重な内容が散見されるので、弓田綾子理事の手を煩わせ、参考までに以下、その概要を紹介することにした。

タイトルは「ニューヨークにおけるタンゴ」。著者はカルロス・ゴンサーレス・グロッパCarlos González Groppa（2005年2月のレポート）。

## ＜本文＞

もし、重要なタンゴのオルケスタが出現せず、アメリカでダンスのフロアが盛んにならなかったら、タンゴはニューヨークの録音スタジオだけで生きていたであろう。

アメリカでのタンゴは、1930年代の後半、そのダンスフロアは消えかかっている状態だった。スウィング（swing）の出現、ベニー・グッドマン（Benny Goodman）、カウント・ベイシー（Count Basie）、ウディ・ハーマン（Woody Herman）らのオーケストラが華やかに活動し出し、一方ルンバが急成長する前で、タンゴは足場を失ったのである。北米音楽界でタンゴを育て、生き続けさせる、しっかりした人物がいないままに、その状況は次の10年間に連なっていくのである。

しかしながらその反面、1930年代は、その華やかさに惹かれ、アルゼンチンの音楽家たちを、ニューヨークに最も引き付けた時代であった。

しかしながら、才能に恵まれたオスバルド・フレセド（Osvaldo Fresedo）の帰米も、フアン・カルロス・コビアン（Juan Carlos Cobián）の再来訪も、アスセナ・マイサニ（Azucena Maizani）やアグスティン・イルスタ（Agustín Irusta）の出演も、さらに、カルロス・ガルデル（Carlos Gardel）の長期滞在までも、北米の大衆には大きな影響を及ぼすことはなかった。また、さほど重要ではないが、無数の優れたアーティストたちの、際立った出演・演奏も、それと変わりはない。つまり、有名であろうと無名であろうと、すべてが同様に無視されたのである。この状況をみると、「それらの音楽家たちは、そうならないために何をしたのであるか？」と、問いたくたくなる。契約の上でレコーディングのために来たか、あるいはニューヨークのショーの世界への出演を望み、はるばる来たかはともかく、現実には、彼らのアーティストとしての、または個人的な活動は、いつも想像以上に厳しかったのである。彼らの大多数がどこで出演していたのか、それらの仕事はどう放送されたかわからないのである。レコーディングしたその動機についても不明で、それらの録音盤のその後についても、不明なのである。「アメリカ合衆国のヒスパニック社会のマーケットで販売するために、レコーディングされたのであろうか？」、「アルゼンチンに送るためなのか？」、「アーティストの虚栄心を満足させるためなのか？」。最も決定的な質問は、「北米のマーケットで販売するだけだったのであろうか？」ということである。コレクターたち、現在それらのレコードを唯一所有している可能性のある人たち、そしてこれらの問いに唯一答えられるであろう人たちも、レコードから先のことは何も知らないのである。

## ■1930年以前のタンゴ歌手たち

アメリカにフランシスコ・カナロ（Francisco Canaro）が到着する以前に、マリアーニ・タンゴオーケストラ（Mariani Tango Orchestra）－オルケスタ・クリオージャ・デ・マリアーニ（Orquesta Criolla de Mariani）としても知られるが、1925年1月27日から1927年11月までの間に、ニューヨークで25曲のタンゴを、2、3曲のフォックストロットをまじえてレコーディングした。

これらのレコードのラベルには、彼のフルネームが印刷されていないが、恐らくこのグループは、ウルグアイの音楽家で、ニューヨークのNBC放送局のためにオルケスタを指揮していた、ウーゴ・マリアーニ（Hugo

Mariani) の楽団で、彼は約10年後に同じ放送局と契約を交わして、カルロス・ガルデルの番組を担当することになったのである。

カナロがニューヨークを去ってから数ヵ月後、エバ・ボール (Eva Bohr) とそのオルケスタ・クリオージャ・アルヘンティーナ (Orquesta Criolla Argentina) が、1927年1月に、その同じニューヨークで、コロンビア社 (Columbia) のために19曲をレコーディングした。それらの曲は、極めてクラシックなタンゴ、「A media luz (淡き光に)」 「Don Goyo (ドン・ゴージョ)」 「La cumparsita (ラ・クンパルシータ)」 「Re-fa-si (レ・ファ・シ)」 や、彼女の兄ホセ・ボール (José Bohr) の歌で「Cascabelito (カスカベリート)」 「Por el camino (その道を通って)」 「Medias de seda (絹の靴下)」 などであった。

そして、ニューヨークでレコーディングしたもう一人の女性歌手は、これもコロンビア・レーベルのためのもので、コンスエロ・N・デ・グスマン (Consuelo N. De Guzmán) であった。1928年11月から1929年11月の間に27曲を登録した。これらのうち17曲はクラシックなタンゴで「La muchacha del circo (サーカスの少女)」 「La última copa (最後の杯)」 「Cuando llora la milonga (ミロンガがむせび泣くとき)」 等々、その他はスペイン語のポピュラーソング、あるいはタンゴのテンポで演奏される、ゆっくりしたフォックストロットであった。コロンビア社 (Columbia) のための、ボール (Bohr) とグスマン (Guzmán) のレコーディングの日取りが、同じレーベルの経営者の要請で、フアン・カルロス・コビアン (Juan Carlos Cobián) がレコーディングをした日付を照らし合わせてみると、そのレーベルのレコーディング会社が、北米マーケットでスペイン語の音楽を販売するという、強い意向があったと言えようか？ 三人のアーティストの間にコネがあったかどうかは、まったくわからないが、少なくともコビアンにタンゴをレコーディングさせたことから、そのように思われてしまうのである。

それと並行して、11月22日に、フリアン・ウアルテ (Julián Huarte) とそのオルケスタ・ティピカが、オーケー (Okeh) レコード社で、ラ・クンパルシータと、ほかにタンゴのリズムで演奏されたタンゴではない3曲を録音した。

ギタリスト、作曲家、歌手であるヘナロ・ベイガ (Genaro Veiga) もまたニューヨークでレコーディングした。彼は1926年から1928年まで、ロセンド・ペソーア (Rosendo Pesoa) と共にアグスティン・マガルディ (Agustín Magaldi) の伴奏者の一人であった。「アルゼンチン・バンド」 “Argentine-Band” と共に1923年にニューヨークへ演奏旅行した後、マガルディに合流するためにブエノスアイレスに帰った。マガルディと別れてから、ベイガはアメリカに戻った。ベイガは「El Cholo (メスティーソ)」 や「El cholo Viejoホ (老メスティーソ)」 の曲で知られている。ニューヨークではWOR 放送局で演奏し、伴奏はビンセント・ロペス (Vincent López)、オスバルド・フレセド (Osvaldo Fresedo)、ザ・カスティリアンズ (The Castillians) 等のオルケスタであった。この最後のオルケスタは、ブランズウィック (Brunswick) レーベルとデッカ (Decca) レーベルが編成したレコーディング用のオルケスタで、指揮者はルイス・カツマン (Louis Katzman)、あまり知られていない音楽家だが、楽器演奏によるタンゴのレコードを多数残した。

ベイガのアーティスト活動については、色々と見解の相違がある。もしアメリカへ「アルゼンチン・バンド」と共に演奏旅行を行ったのが確かならば、フアン・カルロス・コビアンとそれを行ったはずなのである。コビアンがニューヨークのホテル・マッカルピン (Hotel McAlpin) のバーで、デビューしたときの楽団の名称が「アルゼンチン・バンド」であったからである。しかし誰もがこの事実には言及していないのである。何故なら その時期のコビアンのレコーディング目録に彼の名が載っていないのである。さらにエンリケ・カディカモ (Enrique Cadícamo) が書いたコビアンについての伝記にも出てこないのである。しかしながら、ニューヨークでベイガがコビアンとレコーディングしたと証言するコレクターたちがいるが、ベイガのレコ



アメリカ発（録音）のタンゴ



Eva Bohr  
(La Cumparsita)



Carlos Cobián  
(Pinta Brava)



International Novelty  
(Loca)



Orquesta Internacional  
(El Taita Del Arrabal)



International Novelty  
(La Copa Del Olvido)

# Columbia RECORD

**TWELVE CHOICE COLUMBIA RECORDS**  
every Music Lover should have

1. AMONG WITH ME (No. 1311) Chorus by Trio
2. ADIOS, FIDELITY (O Come, All Ye Faithful) (No. 1411) Chorus by Trio
3. BAMBOLÉ DE NOVELLE (Largo Al Finito) (No. 1311) Chorus by Trio
4. SPENDING SOON (No. 1311) Chorus by Trio
5. THE MESSIAH (No. 1411) Chorus by Trio
6. CHORUS OF THE VOLGA BOATMEN (No. 1411) Chorus by Trio
7. BROKEN MELODY (No. 1411) Chorus by Trio
8. PARTED (No. 1411) Chorus by Trio
9. IN A MONASTERY (No. 1411) Chorus by Trio
10. HUNGARIAN (No. 1411) Chorus by Trio
11. SONG OF THE VOLGA BOATMEN (No. 1411) Chorus by Trio
12. L'ETERNELLE MISTY (The Angel's Heart) (No. 1411) Chorus by Trio

**ASK TO HEAR THE NEW COLUMBIA GRAFTONOLA**

SUR HENRY J. WOOD says—"I consider the greatest contribution to the advancement of music since the original invention of the gramophone."

DAME CLARA BUTT says—"This invention really places the Gramola several years in advance of any other known gramophone."

THE PHONOGRAPH ADVANCE OF THE CENTURY.

For Best Results use only **COLUMBIA NEEDLES**



Lacalles's Tango Orchestra  
(Chuzazos)



ーディング目録にはコビアンの名前はないのである。

はっきりしているのは、1928年9月5日から1931年4月27日の間に、ベイガはブランズウィック・レーベルのために、タンゴを59曲、マーキュリー (Mercury)・レーベルのために、6曲、コロンビア・レーベルのために、2曲、を録音していることである。それらのすべてのレコードの中で、ベイガは、どのオルケスタとははっきりしないが、ドン・アルベルト (Don Alberto) 指揮のオルケスタ・ロス・アルヘンティーノス (Orquesta Los Argentinos)、エンリケ・マドゥリゲラ (Enrique Madriguera) のオルケスタ・ティピカ、その時期にニューヨークで演奏していた、オスバルド・フレセド (Osvaldo Fresedo) のオルケスタ等をバックに歌っていた。またベイガは、いくつかのレコードのなかで、アグスティン・A・コルネッホ (Agustín A. Cornejo (1899-1965)) やマヌエル・ベラスケス (Manuel Velázquez) らの歌手と交互に、デュオで歌っている。

興味深いことに、コルネッホはギタリストで作曲家のアルゼンチン人歌手で、1932年にニューヨークのレストラン「エル・ガウチョ (El Gaucho)」に出演していたのである。そこはアルゼンチン人がよく出入りしていた人気の店で、アストル・ピアソラ (Ástor Piazzolla) の父親が息子と毎日のように来て、バンドネオンで歌手の伴奏をし、時々彼をその楽器に慣れさせるようにしていた、その店だったのである。

コルネッホは、ブランズウィック・レーベルと契約して、レコード録音のためニューヨークに来ており、さらに、カルロス・ガルデルがそこで撮影した映画2本に俳優として出演し、「エル・タンゴ・エン・ブロードウェイ (El tango en Broadway)」では、彼自身の作曲になる「Chinita (チニータ)」と「¡Qué importa! (ケ・インポルタ! =かまうものか!)」を歌うという傑出した仕事をしている。

ベイガとデュオで歌ったもう一人の歌手マヌエル・ベラスケスは、その後ソリストとして1933年8月15日から1938年3月10日までの間に37曲をレコーディングし、そのほとんどはタンゴで、あとはワルツやフォルクロレであった。

1920年代の中ごろから、やはりニューヨークで多くの異なる国籍のアーティストがタンゴのレコーディングをした。最も有名なのはスペインの俳優フォルトゥーニオ・ボナノバ (Fortunio Bonanova (1896-1969)) であった。ハリウッド映画での長いキャリアで知られ、彼は言語を直ぐに理解する能力があったおかげで、国際的な重要人物を演じることで有名だった。1925-35年の期間に活発にレコーディングを行い、30曲以上のタンゴ録音の登録を残した。そのうちの二つは、1930年3月にオスバルド・フレセドのオルケスタで録音した「Flor de un día (ある日の花)」と「Prisionero (虜)」であった。

オルケスタ・ティピカ・アルヘンティーナ (Orquesta Típica Argentina) も1926年にレコーディングした。2年後、1928年に、トリオ・ロス・アルヘンティーノス (Trío Los Argentinos) が、ドン・アルベルトのオルケスタ、オルケスタ・ビクトル (Orquesta Víctor)、オルケスタ・ビクトル・タンギスタ (Orquesta Víctor Tanguista) のバックで録音することになる。後者の二つのオルケスタは恐らく同じものであろう。これら二つはエドゥアルド・ビヒル・イ・ロブレス (Eduardo Vigil y Robles) の指揮だからである。

アメリカで長い期間出演していたもう一人の歌手は、歌手で作曲家のホセ・ボール (José Bohr) であった。「The Whispering Tenor (El Tenor Susurrante) = ささやくテノール」と言われ、1927年からニューヨークに一時的に住んで、翌年の1月20日に最初のレコーディングをして以来、活動的に1934年12月6日までレコーディングした。そして、ハリウッドでは多くの映画に出演し、そのうちのひとつ「Sombras de gloria (栄光の影 (陰))」(1928) は、アメリカで初めてスペイン語で撮影されたトーキー映画であった。

ニューヨークでレコーディングしたその他の歌手たちは、1927年9月のカルメン・アロンソ (Carmen Alonso) はカナロ (Canaro) と「クラブ・ミラドル (Club Mirador)」で歌った。グレゴリオ・アジャラ (Gregorio Ayala) は1929から1932年まで、ギターのみゲル・カサーレス (Miguel Casares) 伴奏でうたった。

ソリストのアグスティン・A・コルネッホ (Agustín A. Cornejo) は1929年から1937年まで、彼もまたカサールレスのギター伴奏であった。

これらのアーティストたちの多くが主にビクター、オーケー、ブランズウィック、コロンビア等でレコーディングした。

## ■カルロス・スパベンタ (Carlos Spaventa)

フレセド (Fresedo) のニューヨーク滞在が続いて、歌手のカルロス・スパベンタ (Carlos Spaventa) が滞在し、彼は後にカルロス・ガルデルの映画二本に出演することになる。

スペインヘタンゴを持っていったフランシスコ・スパベンタ (Francisco Spaventa) の兄弟で、カルロスがニューヨークに行った動機は分からないのである。多分ガルデルと共に「Cuesta abajo (下り坂)」や「El tango en Broadway (ブロードウェイのタンゴ)」に出演するためか、歌手としての今後の事を考え行っただけであろう。あるいはレコーディングのために行き、ガルデルと兄 (弟) のフランシスコを強い友情で結び付けた絆の影響で、それらの映画が撮影されたときに、たまたまニューヨークでガルデルと出会い、単にガルデルと出演しただけなのかもしれない。

いずれにしても、カルロス・スパベンタとガルデルの日々の交わりが、後になって、「Carlos Gardel en la canción y el recuerdo (歌と思い出の中のカルロス・ガルデル)」というガルデルのエピソードを綴った本を、彼に書かせることになったのである。

それらの映画のほかに、カルロス・スパベンタは、1932年の2月9日から5月17日の間に、ブランズウィックのために15曲を、ギター、ドン・アルベルトやオラシオ・シート (Horacio Zito) のオルケスタ・ティピカのどちらかの伴奏でレコーディングした。その2年後、1934年9月20日から12月6日の間にコロンビアのために10曲をレコーディングし、そのほとんどはガルデルとレ・ペーラ (Le Pera) のものであった。この期間にボレロやカリブの歌も録音した。

決して著名な人物になることなく、兄弟のフランシスコのようにアーティストとしての高い評価を受けることもなく、カルロスは、第二次世界大戦が終わるとアメリカを後にしてギターを携え、音楽活動するためパリに向かった。その後ブエノスアイレスへ帰った。彼の声の状態が衰えたとき、再びアメリカに戻った。ロサンゼルスに住み、もう一度映画のキャリアを継続して活動すべく、わざわざニューヨークに居をかまえたが、残念ながら、1977年12月31日この世を去った。

## ■エドゥアルド・ビアンコ (Eduardo Bianco)

もう一人の重要なアルゼンチン人音楽家は、フランスに定住しながらも、その時代にニューヨークでレコーディングした、バイオリニストのエドゥアルド・ビアンコであった。パリではバンドネオン奏者のフアン・B・デアンブロッジオ「バチーチャ」(Juan B. Deambroggio "Bachicha") とコンビを組んでいたが、1929年に彼と別れ、自分のオルケスタを編成した。「El Embajador del Tango (タンゴの大使)」として知られ、ヨーロッパやアジア地域のほとんど、北部アフリカやアメリカを駆け回った。1920年代において、オルケスタのアルゼンチン人指揮者のうちで、国際的に最も有名であった。これらの前歴とともに、カルロス・ガルデルの滞在与同時期であったことの上に、彼らがフレセドと共に仕事したという事実があるのに、この歌手の伝記を誰も書いていないのだ。さらに、ガルデルとビアンコは、その後フランスで活動している間に友情の絆を結んでおり、ビアンコ自身の語ったところによれば、ガルデルは自作の多くのタンゴを彼のために歌ってくれ、そのほかにもレコーディングしたタンゴがあったが、それらは録音の質の悪さから、決して売り出され

アメリカ録音（一部経由）で  
日本発売になったタンゴ



Julian Huarte



Julian Huarte



Carlos Spaventa

=Don Alberto



Consuelo de Guzman  
(La Última Copa)



Don Alberto

(Adiós Argentina)



Eva Bohr

(Cascabelito)



Victor Tango Orchestra

< Cayetano Puglisi >



ることはなかったということである。

「エドゥアルド・ビアンコとその有名なアルゼンチン・オーケストラ」“Eduardo Bianco Et Son Fameaux Orchestre Argentin” という名称を使って、ビアンコは、1933年12月15日にニューヨークで、リバティー・ミュージック・ショップ (Liberty Music Shop) のために、「Derecho viejo de Arolas (アローラスの古い正義)」と ビアンコ自身の詩をレコード録音した。これらの録音は、レコードのラベルにある表記によれば、ニューヨークのラテン系社会でよく知られる、タンゴ・ダンスカップルのロシータとラモン (Rosita y Ramón) がスポンサーであるとのことである。

その後、翌年1月11日、今度は「エドゥアルド・ビアンコとその有名なオルケスタ・アルヘンティナ」“Eduardo Bianco y Su Famosa Orquesta Argentina” の名称で、ブランズウィック・レーベルのためにタンゴ10曲と、彼の作になる多くの曲「Razón (理由)」、「Evocación (回想)」、「Desengaño (幻滅)」等をレコーディングした。これらの録音の多くはアグスティン・コルネッホ (Agustín Cornejo) とビアンコの兄弟、マヌエル (Manuel) の歌が入っているが、マヌエル・ビアンコが歌っているといっても、これはエドゥアルドが歌うためだけに使う偽名なのである。

恐らくビアンコはアメリカに行ったようで、それはニューヨークのオペラ劇場 (Grand Opera) とボストンのメトロポリタン劇場 (Metropolitan) に出演するためであった。その後機会を得てそれをレコーディングした。

## ■テリグ・トゥッチ (Terig Tucci)

もう一人のアルゼンチン人音楽家、彼もまたアメリカに定住した、テリグ・トゥッチであった。

ブエノスアイレスで1897年に生まれ、ニューヨークで1973年に死去した。出生地ブエノスアイレスでバイオリンと作曲を学び、1923年に船でアメリカに行った。

北米ではオーケストラ用の編曲、作曲、ラテンアメリカ音楽のラジオ局や歌手のための編曲等に専念した。1930年から1941年までNBC放送局で、アンドレ・コステラネッツ (Andre Kostelanetz)、ミッチ・ミラー (Mitch Miller)、パーシー・フェイス (Percy Faith) その他の著名な指揮者の、ラテンアメリカ音楽の顧問として働いた。そして、南北アメリカ放送網 (Cadena de las Américas) のラジオプログラム制作を主宰し、RCAビクター (RCA Victor) のラテンアメリカ局の音楽ディレクターを勤めた。

その他のアーティストとしての活動は、ニューヨークでガルデルが撮影した映画の音楽トーキーを担当した。ガルデルの死後、彼のオルケスタが伴奏して、様々なスペイン語圏の歌手のレコーディングをした。ペドロ・バルガス (Pedro Vargas)、アルフォンソ・オルティス・ティラード (Alfonso Ortiz Tirado)、ロス・パンチョス (Los Panchos)、エバ・ガルサ (Eva Garza) 等であった。面白いことに、タンゴを録音したのは1937年の12月だけのことで、コロンビア人歌手のサリータ・エレラ (Sarita Herrera) のために、彼のオルケスタで伴奏したものであった。

## ■30年代のその他のアーティストたち

1930年代には、その他のアーティストたちもニューヨークでタンゴのレコーディング盤を残した。最初は1930年のインターナショナル・マリンバ・バンド (International Marimba Band) であった。翌年8月にはバイオリニストのオラシオ・シート (Horacio Zito) が続く。彼の本名あるいは「Zito's Tango Orchestra (シートのタンゴ・オーケストラ)」という名で、そのオルケスタでの演奏や、多くの歌手のタンゴの伴奏をし、とりわけ1932年2月には、キューバのソプラノ歌手ピラル・アルコス (Pilar Arcos) の伴奏をした。

ドン・アルベルトとそのオルケスタ・ティピカ (Don Alberto y su Orquesta Típica) は、1932年から1934年の間に、ニューヨークで撮影された映画のために作曲された、ガルデルとレ・ペラ (Gardel-Le Pera) のタンゴのほとんどを、レコーディングした。

ロス・アルヘンティーノス (Los Argentinos) のグループは、1932年と1935年に録音した。ペドロ・バリオス (Pedro Barrios)、器楽グループ「エル・タンゴ・ロマンティコ (El Tango Romántico)」、「ホセ・ラモス・タンゴ・オーケストラ」"José Ramos Tango Orchestra" は1935年にレコーディングした。

最後に、カルロス・ビビアン (Carlos Vivían) (こうレコードのラベルには表記されているが、カルロス・ビバン (Carlos Viván) のことに相違ない) は1937年にレコーディングし、“アーロン・ゴンサーレスと彼のタンゴ・オーケストラ” は、同年ロサンゼルスでレコーディングしている。

## ■むすびに

ご覧のように、1925年から 1930年代末まで、大きなタンゴ活動が、正統であろうとなかろうと、ニューヨークの録音スタジオで展開された。残念なことに、これに参加したアーティストの大多数が、レコーディング目録や、古い回想録の切れ切れの文章にも、また78回転レコードとしても、その痕跡を残していないのである。熱心に、苦勞して、タンゴの収集家達が探し求めるレコードのほかに、それらの登録盤の行方や多くのアーティスト達の生き様についても、ほとんど、あるいはまったく分らないのである。

これらの事実、また、この時期にアルゼンチンや外国のアーティストたちによって、ニューヨークで行われたタンゴのレコーディングされたものが、わずかしこ普及しなかった状況を前にして、いくつかの問いが生じる。同様な質問がすべてのアルゼンチン人音楽家に由来するものであったとしても、もし彼らがニューヨークへただレコーディングするためだけに行ったとして、彼らの滞在中何があったのかも立証することが大切である。

タンゴの歴史は、事実の欠落や答えのない問いに満ちていることは間違いない。多くの人たちがタンゴにとって記録が重要であると思いつつも、誰もそれを資料化しようとしなかったため、残念ながら記録書類が残っていないのである。そしてもし書類化していたとすれば、これらの書類は非常に重要な事で大切に保管されていたかも知れない。恐らくアルゼンチン以外のところにあるはずで、誰が持っているかは残念ながらもう誰にもわからない。



Carlos Gardel



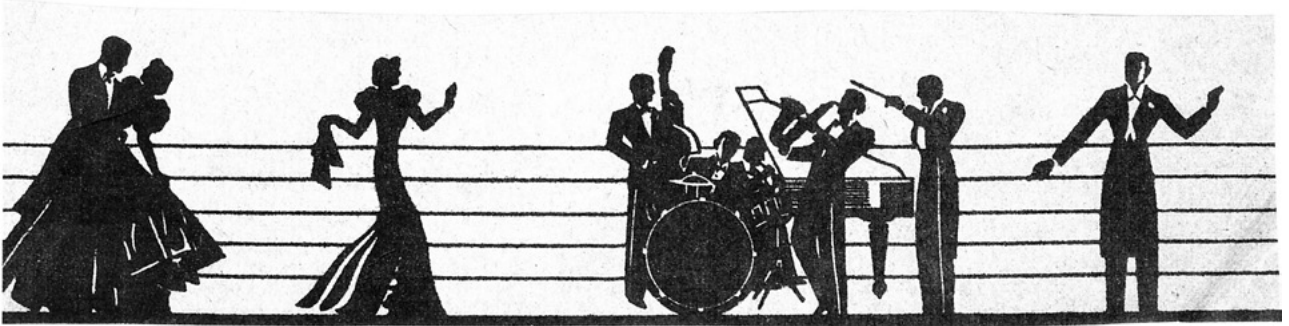
Pilar Arcos



Marimba Pan American

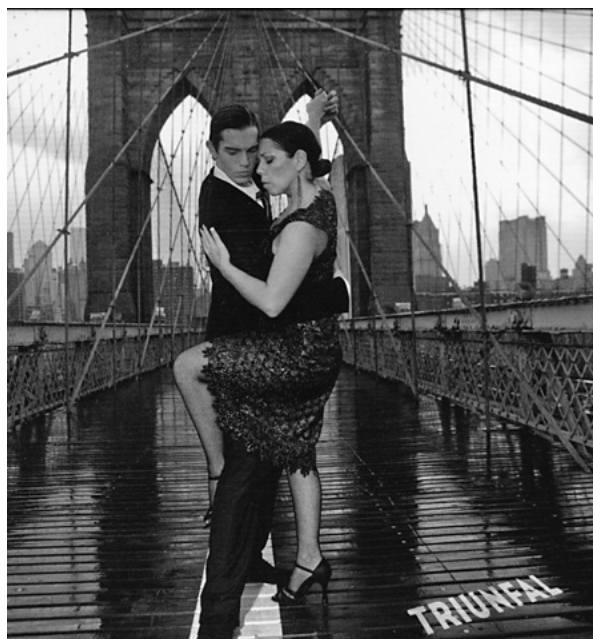


The Castilians



＜著者のプロフィール＞カルロス・ゴンサーレス・グロップ Carlos González Groppa。1931年5月9日、ブエノスアイレス州「Tres Arroyos」で生まれる。青年時代にブエノスアイレスにてデッサン画を学び、1952年に兵役を終えた後、映画やドキュメンタリーの作品に関わりながら、やがて「アニメ国際映画祭」での受賞を経て、国を代表する映画監督となった。1996年以降アメリカに定住し、ロサンゼルスとカリフォルニアを拠点に、タンゴ関係のレポーターなどをしてしながら、雑誌の編集に携わっている。

Carlos González Groppa





Los letristas del tango  
タンゴ作詞家列伝 第6回

E、ディセーオ/R、フォンタイナ/A、タジーニ  
E. Dizeo/R. Fontaina/A. Tagini

高場 将美  
Masami Takaba

## エンリーケ・ディセーオ Enrique Dizeo

このイタリア語の姓は、Di Zeo と書くのが正しいが、彼の場合にかぎり、楽譜など印刷物でも 1 語にしてある（2 語のほうが例外）。本人がどちらでも良かったのだろう。

エンリーケ・ディセーオは、1893年に、ブエノスアイレスで生まれた。イタリア系の貧しい家庭で、小学校しか出ていない。それが普通だった時代であり、社会である。市内南部の貧しい地帯で、3ヶ所くらい引越ししている。定職はなかったようで、それでも、楽しくくらしていたのだから、いい時代で、いい社会だった？

ディセーオは生まれつき、ことばが達者だったようで、カーニバルに街頭で音楽ショーをやるアマチュア・グループのメンバーになって、単純で、人の心をとらえる（すぐ忘れられるが）歌詞をいろいろ作った。そこでできた最初のタンゴ（1920年）が『ロマンティックな貸し部屋 Romántico bulincito』だ。だれが見ても、コントウルシ Pascual Contursi（この記事に前出）の『わが悲しみの夜 Mi noche triste』の真似をした、でも大いに劣る歌詞だけれど、好評で、後年いくつかレコードも出ている。作曲者はアウグスト・ジェンティーレ Augusto Gentile だった（この、イタリアのローマ出身の、楽譜の書けない作曲家は、なかなか興味ぶかい人物）。

1923年には、ディセーオは歌手カルロス・ガルデル Carlos Gardel (1887-1935) に曲を売り込み、録音してもらった。『わたしのお母さん Viejecita mía』——ガルデルは、かわいそうな母親には弱いのである。これで、ディセーオは、ほんものの作詞家の仲間に入ったわけだ。このタンゴの作曲は、有名バンドネオン奏者のカルロス・マルクッチ Carlos Marcucci だった。

そしてディセーオは、ガルデルがほんとうに歌いたかった内容の歌詞を、1925～26年につくった。ルンファルド（ブエノスアイレスの場末独自のことば）に満ちた3曲——題名も標準的スペイン語にないことばだが、説明しているスペースがなくてすみません——、ガルデルの声乐教師ボネッシ Eduardo Bonessi に作曲してもらった、世渡り上手の成金をなじる“Echaste Buena”／有名バンドネオン奏者・指揮者パチョ Juan Maglio «Pacho» 作曲の“Copen la banca”／ギター奏者イズマエール・ゴメス Ismael Gómez 作曲の、成功した遊び人を競馬ウマに例えた“Pan comido”。

2曲めの歌詞の一部を簡単にご紹介しよう（ニュアンスを説明していると長くなるので）。

*“Cadenero de buen porte, garabito a la piu bela, / pinta brava de muchacho con tu jetra shushetín, / académico en el arte de tallar a la alta escuela, / con razón bancás el juego más debute de quiniela / y tirás monte con puerta en lo del viejo Anyulín. // . . . .*

*Embrocás todito el paño que apoliya sobre el mapa. / Zapateaste por el Este, por el Norte y por el Sur. / Te respetan los vivillos y, todavía, de yapa, / no te falta quien te alise, quien te planche la solapa / con halagos amorosos porque valés un Perú. // . . . .*

*Dale gracia a la gambeta que apañaste en la experiencia / y a la astucia de hombre sabio si hoy cargás mucho parné. / Has vivido echando buena en la cancha de la ciencia... / Si hasta el tira, cada tanto, quince días de licencia / te los da para que yires ostentando el pedigree.*

(格好良いヒモ、この上なくいい男、金のかかった服で、めかしこんでいる。虚勢を張る術を大学で講義できるほどだ。だから、いちばん金の集まるキニエーラ（非合法のナンバー籤）の胴元になれるし、アンジュリー親父の店でモンテ（カード・ゲーム）の親をやれる。……あんたは、地図上に眠っている金のありかは全部知っている。東西南北、靴音高くダンスしてきた。頭の切れるやつらにも一目おかれ、さらにおまけが付いて、あんたの背広の襟にアイロンかけて（＝言い寄って）サワリに来る女たちにも事欠かない。あんたは宝物だからね。……経験で得たギャンブルの業に感謝しろ。今は大金持ちのあんた。処世術の馬場でうまく切り抜けてきたもんだね。警官までが、あんたに2週間の仮釈放をくれるので、あんたは血統をひけらかして、悠々と歩きまわってる）。

ガルデールは、こんな歌詞をコミックにせず、芝居気なしで、まるで芸術歌曲みたいに歌っている。ブエノスアイレス独自のことばで、こんな豊かな表現（上の日本語訳は、まったくダメ）ができることを誇示する、使命感を持った録音とさえいえる。おかげで、これらの曲は、ほかの歌手にとっても歌えないと敬遠されて、まったく録音されていない。ファンの大多数が知らない。

ただし、ディセーオは、大ヒットこそないものの、ある程度以上の質のタンゴを作ったことでは、史上もっとも多作な人のひとりで、彼の作品を列挙するスペースはない。いちばん親しまれているのは、女性歌手のための曲『ほかの女と行きなさい Andate con la otra』だろうか？（28年）。作曲は、ヴァイオリン・ピアノ・指揮のC. V. G. フローレス Carlos Vicente Geroni Flores。

1940年代にはタンゴの歌に変革があったけれど、ディセーオは対応して、非常にたくさんの曲がレコードになった。トロイロ Aníbal Troilo作曲『声を限りに Con toda la voz que tengo』や、プグリエーセ Osvaldo Pugliese作曲『エル・エンコパーオ（のんべえ） El encopao』など……。

タンゴ全盛時代が終わった後に、ディセーオは、彼の最大のヒット曲を出した。1953年、バルス・ペルアーノ（ペルーのワルツ）というリズムで、『だれにも、わたしの悩みは教えない Que nadie sepa mi sufrir』——作曲は、ギタリスト・歌手のアンヘル・カブラール Ángel Cabral。この曲は、ラテンアメリカ全体で超ヒットし、今日の若者も知っている（お母さんがいつも歌っていたから）。シャンソン女性歌手エディット・ピアフ Edith Piafは、ブエノスアイレス公演に来て、この曲を知り、帰国後、フランス語歌詞を付けさせて『群集 La foule』として世界的に有名にした。ディセーオの歌詞とは無関係だったが。

ディセーオは、作詞と競馬に生き、定職はもたず、結婚はせず、1980年に亡くなった。



1948年の映画『わたしの3人の息子たち』でのプグリエーセ楽団。この映画で（すでにあった曲だが）『エル・エンコパーオ』が演奏された。

## ロベルト・フォンタイナ Roberto Fontaina

高等教育を受けた——ということは、貧しくはない家庭の出身である——作詞家の登場である。ほんとうを言うと、教育とか経済的な余裕は、作詞に限らず、芸術のすべてにわたって、むしろマイナ

スの要素なのだが。

ロベルト・フォンタイナは、1900年、ウルグアイの首都モンテビデオで生まれた。大学は法科へ行ったと思われる。アルゼンチン＝ウルグアイでは、いや、わたしの好きな国々では（スペイン、ポルトガルも含めて）、勉強ができる青年はみんな法科へいった時代だった。親が、そうさせるのだろうが、法学士・弁護士になるのは、もっとも安定した生活への道だった。

1923年に、フォンタイナと仲間たちは、大学生たちのアマチュア劇団《トゥループ・アテニエンセ（アテネ人の芸能団）Troupe Ateniense》を結成した。正式名称は「アテネ人学生の司法芸能団」といった意味の、わけのわからないもので、アテネは古代ギリシアの学問の都というイメージだろうが、いずれにせよ、ふざけた名前である。この、音楽付きの、寸劇（エスケッチ sketch と呼ばれた）を中心としたショー劇団は、大好評で、1930年代初めまで毎年、モンテビデオで、そしてブエノスアイレスでも、劇場公演した。皮肉とユーモアにあふれた、その舞台は、ちょっとは知的だったろうが、当時の大衆エンターテインメントの最高級のものだったといわれている。

メンバーは、今日もタンゴ・ファンには忘れられない人ばかりだ。大学では法学ではなく建築を学んだそうだが（落ちこぼれ？）、『ラ・クンパルシータ La cumparsita』の作曲家マトス・ロドリゲス Gerardo H. Matos Rodríguez、ピアニスト・作曲家（本式の音楽教育は受けていない。みんなアマチュア）は、フワン・アントーニオとラモーンのコジャース兄弟 Juan Antonio & Ramón Collazo、アドルフォ・モンディーノ Adolfo Mondino、歌手アルベルト・ビラ Alberto Vila。——彼らが、コメディアンも兼任していたわけだ。

台本と作詞は、フォンタイナとソリーニョ。

ビクトル・ソリーニョ Víctor Soliño (1897-1983) については、別に1項もうけるべきだが、ここで簡単にご紹介させていただく。ごめんなさい。

彼はスペインのガリーシア地方で生まれ、14ヶ月で一家はモンテビデオに移民してきた。アテニエンセで活動中にジャーナリスト・演劇人となり、1931年から自身のラジオ局を持って、台本作家・演出家・出演者（おしゃべり）として活躍した。フォンタイナとの合作ではない曲には、劇団仲間のマトス・ロドリゲス作曲『モコシータ（はな垂れ娘さん）Mococita』（26年）、やはり仲間のモンディーノ作曲『マウラ（ひきょう者）Maula』（27年）、モンテビデオでは長いあいだスタンダード曲になっていた、R. コジャース作曲『さようなら、わたしの町 Adiós, mi barrio』などがある。



さて、フォンタイナは、1925年からソリーニョと合作をはじめたそうだが、最初の大ヒットは、27年の『ニーニョ・ビエン（お坊ちゃん）Niño bien』『ガルーファ（らんちきパーティ）Garufa』、ともにフワン・アントーニオ・コジャース作曲である。どちらもモンテビデオの歓楽街の常連である典型的人物をうたう。『ニーニョ・ビエン』のほうをご紹介します。

*Niño bien, pretencioso y engrupido, / que tenés berretín de figurar; / niño bien que llevás dos apellidos / y que usás de escritorio el Petit Bar; / pelandrún que la vas de distinguido / y siempre hablás de la estancia de papá, / mientras tu viejo, pa ganarse el puchero, / todos los días sale a vender faíná.*



*Vos te creés que porque hablás de ti, / fumás tabaco inglés / paseás por Sarandí, / y te cortás las patillas a lo Rodolfo / sos un fifi. / Porque usás la corbata carmén / y allá en el Chantecler / la vas de bailarín, / y te mandás la biaba de gomina, / te creés que sos un rana / y sos un pobre gil.*

(ニーニョ・ビエン、見栄っ張り、ひとりで、とにかく目立ちたがり。苗字がふたつある（＝家柄が良い）のをひけらかし、高級喫茶《プティ・バー》を事務所がわりに使う。名士気取りの間抜け男、いつも「パパの牧場」の話ばかり。あんたのおやじはその日ぐらしのために、ファイナー（中身がたまねぎだけのお好み焼きのようなもの）を毎日売り歩いてるというのに。

あんたは、自分がおしゃれだと思い込んでる——英国タバコをすうから、サランディー遊歩道を散歩するから、もみあげをロドルフォ・ヴァレンティーノの形にするから。真っ赤なネクタイをして、キャバレー《チャンテクレール》でダンサー気取り、髪をチックでベタベタに固めて、かっこいい若者だと思い込んでる。あんたは、ただのバカだよ）。

《チャンテクレール》（旧名ムーラン・ルージュ）のオーナーは、マトス・ロドリゲスの父親だった！（数年後には、つぶれた）

これらの曲は、カルロス・ガルデルが、ものすごく気に入って（彼にピッタリですね）録音しようとしたが、作者たちは許可しなかった。というのは、《トゥループ・アテニエンセ》は、無名のときから、アルゼンチンの女性歌手ロシータ・キローガ Rosita Quiroga に、たいへん愛され、彼女の多大な支援（曲の普及など）を受けていた。だから、自分たちの作品はキローガ以外のプロ歌手には録音させないということで、恩に報いたのだ。ただし、ライブは別だから、ガルデルはどこでも歌い、大好評だった（聴きたかったですねえ!!!!）。すぐ後のフランス公演でも、この2曲は大いに受けたので、パリでも楽譜出版されている（28年）。

フォンタイナ＝ソリーニョのコンビは、すぐつづいて、ラモン・コジャソ作曲で『ママ、わたし恋人が欲しいの Mama, yo quiero un novio』を発表。これらは、アテニエンセのブエノスアイレス公演でアルベルト・ビラが歌い、ラプラタ河兩岸でのヒットとなった。ブエノスアイレス生まれでモンテビデオ育ちのヴァイオリン奏者・指揮者エドガルド・ドナート Edgardo Donato 作曲の『T.B.C.（テベセ＝わたしは、あなたにキスした）』も大ヒット曲（28年）。

フォンタイナの単独作詞には、後にこの列伝でご紹介するロドルフォ・シアマレーラ Rodolfo Schiamarella と合作の『アンダーテ（出て行って） Andate』（33年）がある。

このような楽しいタンゴの数々を作ったロベルト・フォンタイナは、著作権団体AGADU（ウルグアイ作者総合協会）の初代会長となった。そして、ふたつの放送局を持つ会社の社長として（前頁写真）、モンテビデオ文化に貢献した。1963年没。

## アルマンド・タジーニ Armano Tagini

Tagini という姓は、スペイン語発音だとタヒーニ。でも、アルゼンチン＝ウルグアイでは、伝統的に、イタリア系でない人もイタリア語の発音でタジーニと呼んでいる。

アルマンド・タジーニの父ジュゼッペ（スペイン語では「ホセ」）はイタリアのピエモンテ地方からの移民で、スペインのバスク地方からの移民の女性と結婚し、1885年にブエノスアイレスの中心街に、高級輸入雑貨の店 Casa Tagini を開店した。1900年ごろ、当時新築の、市内屈指の建物の1階に店を移した。やがて、コロンビア Columbia レコード社の代理店となって、自社で録音・発売もし

た。1910年からバンドネオン奏者たち、グレコ Vicente Greco、パチョ Juan Maglio «Pacho» のタンゴ楽団、13年には、カルロス・ガルデールの初録音（ギター弾き歌いのfolklore）……アルゼンチン音楽のレコード産業の先駆者なのだ。

アルマンドは、1906年生まれ。長じて、父の店ではなく（もう、つぶれていたと思う）、鉄道会社の事務員になった。職場の仲間には、タンゴ界の有名人たち——ヴァイオリン奏者のラファエル・トゥエゴルス Rafael Tiegols、作詞家のフランシスコ・ガルシーア・ヒメーネス Francisco García Jiménez、ピアノが弾けて作詞作曲するフワン・ホセ・ギチャンドウト Juan José Guichandutがいた。決まった時間オフィスにいれば、夜は自由に好きなことができる。

彼らに誘われて、タジーニは、夜はタンゴ歌手になった。バンドネオン奏者アンセルモ・アイエタ Anselmo Aieta のグループがデビューとのこと。いい声で、歌もうまく、後にはラジオにも出演し、指揮者になる前のリカルド・タントゥリ Ricardo Tanturi がピアノ伴奏した。

子どものころから文学、ことに詩が大好きだったアルマンド・タジーニは、10代で雑誌に詩を投稿、掲載されていたので、当然のように作詞をはじめた。ほとんどの曲は、まずメロディをもらって、それでインスピレーションを得て歌詞を書いたとのこと。

1927年の、ウンベルト・カナロ Humberto Canaro(当時トゥエゴルス楽団のピアノ奏者)作曲『グロリア (栄光) Gloria』が最初のヒット（女性が「わたしの青春は、あなたの背広に飾る花じゃありません」と金持ち男に縁切りを告げる）。

すぐつづいて、トゥエゴルス作曲で（これは歌詞が先にできたはずだ）、ルンファルドに満ち満ちた『ラ・ガジョーラ (牢屋) La gayola』。これは超大作！ 16音節×28行で、牢屋から出てきた男が、昔の女にひと目会いに来て、「心配するな。わたしは遠くへ行くよ。働いて、棺に飾る花代くらいは、かせがなくては……」ルンファルド詩の大傑作のひとつだ。

もう1曲、ギチャンドウト作曲でキャバレーの女性に歌う『女の薫り Perfume de mujer』。

3曲とも、ガルデールが喜んで録音してくれた。翌28年にも、やはりガルデールが歌うヒット曲が2曲。ひとつは、ベース奏者兼歌手の、カルメーロ・ムタレーリ Carmelo Mutarelli 作曲による、場末の娘と彼女を転落させる男のおはなし、『冷酷な手 Mano cruel』。

もうひとつが美しい。他の作詞家にはない、タジーニの心やさしさ、こまやかな感傷の表現がみごとな珠玉作で、ギチャンドウト作曲の『マリオネータ (操り人形) Marioneta』。人形芝居をいっしょに見ていた、同じ町内の幼い女の子を、10数年後に、キャバレーで偶然見かける……タジーニの実体験だそう。『女の薫り』と同じ女性なのだろう。人形芝居を見ている場面の回顧のあたり、わたしはいつ聴いても泣いてしまう。ガルデールの歌がすばらしいのは当然だが、女性歌手 アスセーナ・マイサーニ Azucena Maizani も、この上なく感動的に表現している。

同じくギチャンドウト作曲『11時のミサ Misa de once』（29年）は青春の回顧、

*Entonces tu tenías diez y ocho primaveras, / yo veinte y el tesoro preciado de cantar... / En un colegio adusto vivías prisionera / y sólo los domingos salías a pasear. // Del brazo de la abuela llegabas a la misa, / airosa y deslumbrante de gracia juvenil / y yo te saludaba con mi mejor sonrisa, / que tu correspondías, con ademán gentil.*

*Voces de bronce / llamando a misa de once... / ¡Cuántas promesas galanas / cantaron graves campanas / en las floridas mañanas / de mi dorada ilusión! // Y eché a rodar por el mundo / mi afán de glorias y besos / y sólo traigo, al regreso, / cansancio en el corazón.*

(あのころ、あなたは十八の春、わたしは二十で、歌という大事な宝物をもっていた。規律きびしいカレッジに、あなたは囚人になっていて、日曜日だけ散歩に出てきた。祖母と腕を組んで、あなたはミサにやって来た。はつらつとして、まぶしいほどの若さの魅力は。そしてわたしは、とっておきの笑顔で、あなたに挨拶した。あなたは、ていねいな身ぶりでこたえてくれた。

青銅の声たちが、11時のミサを呼びかける……。どれほどたくさんの恋の約束を、重々しい鐘の音が歌っていたことだろう！ わたしの黄金の青春の、花咲く朝に。そしてわたしは、世界に転がしはじめた、栄光とキスへの熱望を。そして、帰りにもってきたのは疲れ、心のなかに)

1932年には、ジャーナリストで、作詞作曲もした、ベナンシオ・クラウソ Juan Venancio Clauso 作曲で『結婚行進曲 Marcha nupcial』を発表した。そして、その翌年、タジーニは結婚して、芸能生活から足を洗い、普通人になってしまった。

その後も、少しは作詞をしている。わたしが大好きなのは、ヴァイオリン奏者オスカル・アローナ Oscar Arona作曲による『ミント (はっか) とセドローン Menta y cedrón』(45年)。セドローンは、強いレモンの香りがする植木・ハーブで、そんな匂いに満ちた、昔の中庭のダンス・パーティを懐かしみ、「あんなタンゴは、今はなくなった！」と怒る。アンヘル・バルガス Ángel Vargas (ダゴステイーノ Ángel D'Agostino 楽団) と、アルベルト・カスティージョ Alberto Castillo が、それぞれにみごとな表現で歌うレコードが出た。

*... Aquel del patio con el aljibe, /cancel del hierro, /cordial portón, que me brindaba, cuando era pibe, / su aroma criollo: menta y cedrón.*

(あのタンゴがあった中庭には水汲み場があった。鉄格子の大扉、親切に迎えてくれる入り口部屋。それが子どものころのわたしをもてなしてくれた、この土地ならではの、ミントとセドローンの香りで)。

アルマンド・タジーニは、1962年没。孫娘バニーナ・タジーニ Vanina Tagini は、今日、外国公演のショーにも参加、第一線にいるタンゴ女性歌手である。



20世紀の初め、華々しかったころの、ホセ・タジーニの店。この建物は、スイスの建築家クリスティアン・シンドラー設計。アール・ヌーヴォー様式の5階建て。

\*\*\*\*\*

いわき市内のラテン音楽愛好家で作る「いわき中南米音楽同好会」の結成10周年記念パーティー「今日はたっぷりタンゴ三昧」が2014年11月11日、同市泉町下川の小名浜オーシャンホテル & ゴルフクラブで開かれた。当日は島崎NTA名誉会長、飯塚NTA会長をはじめ、首都圏や東北からの参加者も加えて、総勢約100人の盛大な会となった。会は2部からなり、第1部はスエニョス楽団(五重奏団)のライブ演奏、第2部は飯塚会長らの選曲によるCDコンサートで、出席者はダンスや食事をしながら貴重な時間を過ごした。出席者の一部は翌12日、夏井溪谷に足を延ばして紅葉狩りを楽しんだ。

(「夕刊 いわき民報」2014年11月20日号より)



## 現代タンゴ群像(1955～1990) 第6回

## ホセシート・パセ

por 西村秀人

今回取り上げるピアニスト、ホセシート・パセ (Josecito Pace) については、日本盤LPこそ出ているものの、多くのタンゴ・ファンにとっては無名の存在かもしれない。アルゼンチンでも現在彼の名を記憶している人はほとんどいないだろう。それは演奏活動の大半を国外（ペルー）で過ごしたからである。しかしペルーの首都リマのタンゴファンの間では、バンドネオン奏者のドミンゴ・ルージョ (Domingo Rullo) と共に、タンゴシーンを支えてきたアルゼンチンの巨匠として記憶されている。幸い手元にまとまった数の彼のアルバムがあるので、この機会にまとめておくことにしたい。

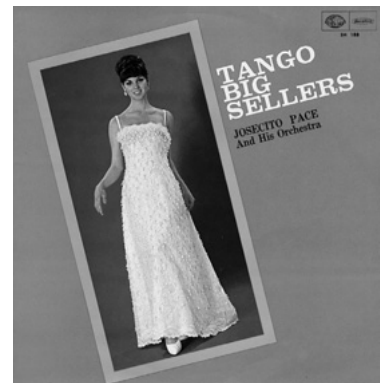
ホセシート・パセは1931年ブエノスアイレス生まれ（1937年生まれという資料もある。これはスペイン語圏の手書き資料によくありがちな1と7の見間違えではないかと思うが、どちらが正しいか判断が難しい）。4歳の時からピアノを習い始め、12歳から人前でタンゴの演奏を開始、14歳でラディオ・ベルグラノーとテレビの7チャンネルに登場、18歳で初めて自己の楽団を結成したというからかなり早熟である。ラジオやナイトクラブに活躍、アルゼンチン国内やウルグアイ、チリにも演奏旅行に行ったという。おそらく当時の録音と思われる4曲入り17センチ盤がディスクジョッキー・レーベルに残されている。

## (1) Disc Jockey DIS206 “Josecito Pace y su cuarteto”

①Canaro en París ②La puñalada ③Ahí va el dulce ④El firulete

このうち①④が日本のキングレコードによるディスクジョッキー原盤第1号のオムニバスLP「タンゴ・ヴァラエティ」に収録され発売されていた。

おそらくアルゼンチンでのレコード実績はこれだけではないかと思う。大きな転機となるのは1964年、ペルーの首都リマへの演奏旅行だった。15日間の契約で現地に向かい、好評につぐ好評で6か月の長きにわたって契約更新を重ね、ついにはそのままりマへの移住を決意したのである。移住後最初のアルバムがどれになるのか非常に判断が難しいが、日本でも1965年に発売された以下のアルバムがおそらく最初ではないかと思う。



## (2) Discofón DIS5002 “Tangos de oro”

①La cumparsita ②Taquito militar ③A media luz ④Caminito ⑤El entrerriano ⑥Lluvia de estrellas ⑦Uno ⑧La puñalada ⑨El choclo ⑩El huracán ⑪El amanecer ⑫Para ti abuelita

若干曲順が異なるが、1965年に発売された日本盤キング SH188「タンゴ・ビッグ・セラーズ」と同一内容。私はペルー原盤は所持していないが、1968年のペルー大手のビレイ (VIRREY) レーベルの総合カタログに載っているので、ビレイの廉価レーベルだろうか。日本盤にペルー・ディスコフォ

ム（Discofón）原盤とあるので、これがオリジナルなのは間違いないと思う。私が所持している同内容のペルー盤は DECIBEL LPD1132 “Tangos de oro” で、これは再発盤ということだろう。（このDecibelレーベルはペルーでアルゼンチン・オデオン原盤のプグリエーセやロベルト・グレラ＝カルロス・ガルシアのLPなどを出していた）。コンフントとなっているが、実際には最初の17センチ盤と同じくピアノ、バンドネオン、バイオリン、コントラバスのクアルテートで、きらきらしたピアノのタッチとともに早めのテンポで歯切れよく名曲が展開される。日本盤ジャケットには他の3人のメンバーの名をアンヘル、マウリシオ、ティトとしているが、このうち「ティト」はペルーにおけるホセシート・パセの長年の相棒だったエクトル・“ティト”・カストロと考えて間違いないだろう。「ティト」カストロは1964年にホセシートと一緒にペルーにツアーに来てそのままとどまったのだが、1998年にリマからニューヨークに活動の場を移し、現在も幅広く活躍を続けている。2004年、2005年には冴木杏奈の伴奏者として日本にも来ている。

おそらくこの次のアルバムと考えられるのがMAGレーベルの2枚である。



### （3）MAG LPN-2132 Mi Buenos Aires querido

- ①El ciruja ②Patotero sentimental ③Milonguita ④Mi Buenos Aires querido ⑤Organito de la tarde ⑥Malevaje ⑦Malena ⑧Al compás del corazón ⑨El once ⑩Re Fa Si ⑪A la gran muñeca ⑫Yira yira

### （4）MAG LPN-2139 Tangos al atardecer

- ①Felicía ②Recuerdo ③Sentimiento gaucho ④Don Juan ⑤Gallo ciego ⑥Quejas de bandoneón ⑦Nueve de julio ⑧Inspiración ⑨Chiqué ⑩Saludos ⑪Adiós muchachos ⑫Adiós pampa mía



（2）で取り上げた有名曲を避けている感じなので、おそらく近い時期に録音されたものであろう（1964～66年頃）。メンバーの記載はないが、前作と同じクアルテート、おそらくメンバーも同一だろう。きらびやかなピアノはもちろん、テンポのいい演奏。深い味わいはないが、ペルーのタンゴファンには喜ばれたことだろう。（4）はメキシコ盤 Discos Rex R511 として同タイトル・同内容でジャケットだけ変更されて発売されている。

この後、ホセシート・パセのアルバムはすべてVIRREYレーベルから出されている。VIRREYはフィリップス系列のレーベルで、日本でもバンドネオン奏者フリオ・ヘンタのオルケスタによるタンゴ

集、ギターのマルティン・トーレスのタンゴ&フォルクローレのアルバムやラテン物などがいくつか発売されていた。1968年のVIRREYの総合カタログにはDiscofómの1枚しか出ていないので、以下のアルバムは1968年以降の発売ということになる。

### (5) VIRREY DVS631 “Josecito Pace y su conjunto”

- ① Ahí va el dulce ② La tablada ③ Organito de la tarde ④ Saludos ⑤ Selección de tangos famosos: La morocha-Tiempos viejos-Viejo rincón-Madreselva ⑥ La cumparsita ⑦ El huracán ⑧ Canaro en París ⑨ Nueve de julio ⑩ Selección de milongas famosas: El esquinazo-El porteño-El llorón-Milonga de mis amores

### (6) VIRREY DVS704 “Derecho viejo” Josecito Pace su piano y su conjunto típico argentino

- ① Derecho viejo ② El choclo ③ Selección de famosos vales argentinos: La pulpera de Santa Lucía-Gota de lluvia-La canción de linyera-Palomita blanca ④ Julián ⑤ Taquito militar ⑥ Quejas de bandoneón ⑦ Inspiración ⑧ Selección de famosos vales argentinos: Tu olvido-Yo no sé qué me han hecho tus ojos-Isabelita-Desde el alma ⑨ El once ⑩ La puñalada



### (7) VIRREY DVS749 “Viejo rincón” Josecito Pace su piano y su conjunto típico argentino

- ① Viejo rincón ② Lonjazos-Cicatrices ③ Cambalache-Esta noche me emborracho ④ Seamos amigos-Malevaje ⑤ Selección de tangos de Carlos Gardel: El día que me quieras-Volver-Mano a mano-Cuesta abajo ⑥ Sentimiento gaucho ⑦ Taconeando-Mocosita ⑧ Malena-Griseta ⑨ Yira yira-Garufa ⑩ Selección de tangos de Mariano Mores: Gricel-Cuartito azul-Uno-Adiós pampa mía





**( 8 ) VIRREY DVS805/806 “A media luz” Josecito Pace y su conjunto típico argentino****Disco 1**

- ①A media luz ②¿Dónde estás corazón? ③Trago amargo ④Tiempos viejos ⑤Percal  
 ⑥Nocturna ⑦El amanecer ⑧Adiós muchachos ⑨Lo han visto con otra ⑩Melodía de arrabal  
 ⑪Fumando espero ⑫Corralera

**Disco 2**

- ①La cumparsita ②Dímelo al oído ③La última copa ④Tengo miedo ⑤Milonguita  
 ⑥La trampera ⑦Sí soy así ⑧Por una cabeza ⑨Patotero sentimental ⑩Churrasca  
 ⑪Portero, suba y diga ⑫El firulete

( 5 ) から ( 8 ) は1968年から71年の3年間に制作されたと思われ、かなりのハイペースだったことになる。有名曲は初期にかなり取りあげたので、インストゥルメンタルでは聴く機会の少ない珍しい歌曲などがレパートリーに含まれているのが面白いし、名曲メドレーもタンゴ・ショウを見ているようで楽しい。相変わらず「コンフント」と称しているが、実際にはピアノ、バンドネオン、バイオリン、ベースのクアルテート。ただ( 8 ) だけベースがコントラバスからエレキベースに変わっており、リズムの感じが少し変わってしまっているのが残念。1960年代には11チャンネルで「ホセシートとの1時間」というアルゼンチン音楽のTV番組も持っていたようで、高い人気を誇っていたことがうかがえる。



このあと、同じくVIRREYレーベルで歌手伴奏のアルバムを2枚出している。

**( 9 ) VIRREY VIR905 “Josecito y sus amigos” Josecito Pace y su conjunto típico argentino**

- ①Lonjazos (canta Andrés Carpena) ②¿Cómo te voy a querer! (Alberto Daniel) ③Tarde (Walter Legrand) ④Percal (José Cómena “Pipo”) ⑤Madame Ivonne (Gilberto Torres) ⑥Tengo miedo (Alberto Daniel) ⑦Ladrillo (Andrés Carpena) ⑧Cambalache (Alberto Daniel)  
 ⑨Padre nuestro (Walter Legrand) ⑩Envidia (José Cómena “Pipo”) ⑪Yo canto tango (Gilberto Torres) ⑫Y todavía te quiero (Alberto Daniel)

**(10) VIRREY VIR-963 “El último café...” Gilberto Torres y el Conjunto de Josecito Pace**

- ①Tú ②Cobardia ③Almagro ④El último café ⑤No te engañes corazón ⑥Y todavía te quiero  
 ⑦Barrio pobre ⑧Cuartito azul ⑨Sin lágrimas ⑩Griseta ⑪Por la vuelta ⑫El día que me quieras

( 9 ) は各面の1曲目がアンドレス・カルペーナの語りで、その後4人の歌手が登場する。カルペーナは長くブエノスアイレスに暮らし、1960年代にペルーに戻り、リマのタンゲリーアで活躍した「語り」の名人で、ペルー随一のガルデル・マニアだそう。アルベルト・ダニエルはホセシート・パセ



の専属歌手。1958年からアルゼンチンのTVなどで活躍した後、チリ公演に行くがプロモーターに逃げられ、やむを得ずそのままボリビアに行くも雨続きで仕事がすべてキャンセル、途方に暮れていたところにホセシート・パセが1968年にペルーに呼び寄せ、そのままとどまったそう。ワルテル・レグランについてはよくわからないが、もともとは水泳選手だったらしい。ヒルベルト・トーレスことヒルベルト・トーレス・モラレスは1928年生まれのペルー人で、サッカー選手としてナショナル・チームに所属したこともある名選手で、引退後はタンゴ歌手として活動した変わり種。2012年に亡くなっている。ピポことホセ・コメナは1940年代に大変人気のあったペルー人のポピュラー歌手で、もともとタンゴもよく歌っていたということだ。

(10) は (9) にも参加していた元ボクサー、ヒルベルト・トーレスのアルバムで、ホセシート・パセが伴奏をつとめているもの。(9) は1974年、(10) は1975年のアルバムである。

ホセシート・パセの録音がCD復刻されたという話は筆者は知らない。ただ、2005年にダウンロードの形だけで20トラック入りのベスト盤が販売されているようだ。

### “Lo mejor de Josecito Pace”

<https://itunes.apple.com/jp/album/lo-mejor-de-josecito-pace/id331733561>

- ① Esta noche me emborracho    ② Selección de tangos de Carlos Gardel: El día que me quieras / Volver / Mano a mano / Cuesta abajo    ③ Sentimiento gaucho    ④ Malena-Griseta    ⑤ Yira Yira-Garufa    ⑥ Selección de tangos de Mariano Mores: Grisel / Cuartito azul / Uno / Adiós pampa mía    ⑦ Derecho Viejo    ⑧ El choclo    ⑨ Julián    ⑩ Taquito militar    ⑪ Inspiración    ⑫ Selección de famosos valeses argentinos: Tu olvido / Yo no sé que me han hecho tus ojos / Isabelita / Desde el alma    ⑬ A media luz    ⑭ ¿Dónde estás corazón?    ⑮ Tiempos viejos    ⑯ Percal    ⑰ Adiós muchachos    ⑱ Lo han visto con otra    ⑲ Melodía de arrabal    ⑳ Fumando espero

曲目で判断する限り、VIRREYレーベルのインストゥルメンタルのアルバムから選んだもののようなのである。

1976年以降のアルバムについては資料がない。ペルーのタンゴ・シーンで充実した活動を10年以上にわたって続けてきたホセシート・パセだったが、1979年12月30日、心臓の病気で急逝してしまう。1931年生まれとすれば48歳、37年生れとすれば42歳、いずれにしても早すぎる死であった。

ホセシート・パセのスタイルはきらびやかで歯切れ良いピアノと、少し早目のテンポで快調に進んでいくリズムに特徴がある。イージーリスニング的な名曲集でもあるのだが、インストゥルメンタルでは珍しい曲も含まれており、なかなか楽しいものがある。

## シリーズ・資料再見(4)

## タンゴの味ひ方

森 潤三郎

〔この資料は故寺田太作氏の遺品中にあったもので、残念ながら資料の出処は特定できなかった(編集部)〕

凡そ藝術のよさと言ふものには二通り存する。例へば歌麿もよく春信もよいとして、前者が何となく已れの才覚の範囲内に存するが如く感ぜられるに對し、後者に至っては全然手が届かないことを観念せしめる。バッハ、ヘンデル共に近世音楽史上の二大高峰であり乍ら、バッハの優秀なる所以は恰も音楽美學的に探究し得るかの如くに思推せらるゝに比し、ヘンデルのそれは到底理論の解析を許容しない。同じくショパンが練習曲のレコードに於いても、コルトーの演奏は常識の想像し得る至上の境地を究極してゐるに對し、デ・パークマンのそれは常人が到底夢想だもなし得ない意外千萬の趣味を呈示する。コルトーが下手なのでなく、パークマンがよ過ぎるのである。

舞踏曲に於いてもこれと同様の事実が存在する。即ちスピンを行って適度の眩暈を覚え、オープン・ターンを利用して床上を滑走すれば、フォックス・ツロットはこの上もなく雲上を快走するが如きダンスである。或は又心身二つ乍らをフロウワーより浮揚せしめ、完全にボストン・エヂタシオンを踊りこなし得れば、ウォールスは羽化登仙的舞踏曲たり得る。然し乍らこの両者舞踏音楽として決して吾人の意表に出づるものではない。ダンス音楽として當然しかあるべきものが當然しかある如く鳴つてゐると言つた感銘である。所がタンゴと来るとその呈示する所は全く奇想天外である。目前現前の事実としてこれを聴取すればこそタンゴなる不可思議舞踏界の實在を承認せざるを得ないのであるが、これに接触する以前、如何に心意を盡すと雖も到底その存在を想定し得やうとは思へない。タンゴを発明したる者が、個人であれ、民族意識であれ、それは正しく一大天才の創造的所産に相違ない。實際タンゴは現代舞踏術の所有する至寶であり、不幸一度びこれに親近したる舞踏人が終生脱却し得ない耽溺の巷であつて、その持つ粘着性の迫力は踏者の心身を馳り立て、殆んど呼吸づく暇を恵まない所一種の残忍性をすら感知せしめる。蓋しタンゴは、かのボードレールがこの世に新しき恐怖を創造せるが如く、舞踏場裏に一つの新らしき蠱惑を生み出させしものと稱すべきものであらう。

タンゴがアルゼンチンの藝術であり、アルゼンチン人の手に依らなければ完全な効果を挙げ得ない事實は今や一個の常識と化した。元來我が國民はラテン系文化に對して特殊の同感性を有する。就中多分に東洋情調の加味せられたイベリヤ文化は特に力強く吾人と共鳴する。これ現今純正アルゼンチン・タンゴが英米に於いてよりも却つて日本に於いてより深刻に評價せられてゐる所以なのである。蓋し今を去る事十年前筆者が初めてこの驚嘆す可き舞踏曲の鳴盤に接し、それが特に我國人の趣味嗜好に適合せるを知り、その普及宣傳の一念を発起したことは必らずしも過誤ではなかつた。蓋し筆者が寡聞の範囲内に於いては、この音楽の録音が南米より舶載せられ、我國レコード界と最初の接触を保ち得たのは故清河海軍中將が輸入せられしに始まる。茲に中將が東郷大將の幕僚として三笠艦上に勇戦せられた武勲を論じる余白もなければ、爾後中將が社交舞踏術を國際場裏に活用せられた外交裏面史を描く余裕の存しないのを悲しむ次第であるが、兎に角中將はさる高貴の御方に扈從して多年欧米に遊び、恒に最上級の社交場に入出た本邦斯道無上の通人であると同時に、目賀田男爵舞踏術の最も有力な支持者であつた。こんな關係でレコードが入荷すると同時に中將は夫人令嬢を伴つて男



爵を訪問せられたのであるが、その御遇然筆者も亦男爵邸サロンの客人たるの光栄を有してゐた。此くの如くにして男爵が令嬢を相手に試みられた数曲のタンゴは筆者に永久に忘却し得ない印象を與へた。絶妙の楽、絶妙の技、嗜味性の極致とは正しくこの一事であらうと覺へ、タンゴ宣傳の決心はこの所に定まった。筆者がタンゴ宣傳の原動力は全く舞踏人としての目賀田男爵の實力に存したのである。男爵の妙技に接しなければ、タンゴの真諦も判らなければ極力これを宣傳しやうとする気持にもなれなかったし、アッサンブレ・清交社その他を結成した一つの團結的運動にもなり得なかったであらう。萬一昭和の世、我國に於て大いにアルゼンチン・タンゴの行はれた事が文化史上何らかの意味を持つものとするれば、それは全く男爵が超越的技術に歸せられなければならないのである。

上述日本に於いて、タンゴが今日の如く盛んになったのは専ら筆者宣傳の結果であるかの如き印象を生じたかも知れないが、この外に玉置真吉氏、池原南氏等の主裁せられた英國流社交ダンスの流行と、タンゴが英國に於て、標準ダンスに指定せられたことが非常に有力に作用した事實が認識せられねばならぬ。但しこの英國流の運動はダンシングとしてのタンゴの隆盛に一大貢獻を果したが、音楽としてのアルゼンチン趣味の廣通には直接関係が些なかった。この派の若い論客の中には英國流のタンゴに不適当なる理由を以て、舞踏曲としてのアルゼンチン・タンゴ排斥の論陣を張った人士さへゐたが、アルゼンチン音楽の真價乃至一般に舞踏上に於ける、ラテン趣味は浸々として一般の認識を得るに至った。それに寄與した力は多々あったであらうが、更に一步を進めて思察すれば、日本に於けるアルゼンチン趣味隆盛の真因は日本人が真によき藝術を理解する能力の保持者である事、ラテン系文化に對して特に力強いアフィニチイを有する事に歸せらるべきものであらう。

舞踏曲中で一番深味のあるタンゴの完全なる理解に到達せんがためには多少の抵抗が経験せられなければならぬ。早い話がアルゼンチンより新版のレコードが入荷した場合、一聴直ちにこれば素適だと感じた曲はその實余り大した代物ではなく、最初一向に平凡だと思った音楽が反覆試聴するに従つて案外その真價を發揮し来ると言つた調子である。茲に於いて初心の方が耳触りのよい場違ひタンゴを好愛せられるのも甚だ御尤千萬の次第であり、レコード店の試聴室で勿卒として撰曲せられることの可成危険操作たる所以が判然し、真實優秀なタンゴ鳴盤の賣れ行きの却つて劣等なる理由も了解出来ると謂ふものである。第一タンゴの如き冥想的なダンス曲は間雑の巷で聴取して見ても真當にその味が判る筈はないので、タンゴの効果はこれに接する環境に左右せられる所が多いものである。そこで如何にすれば明らかにタンゴ曲を評價し得べきであらうかが問題になって来るので、これが今回筆者に課せられた題目であらうと信じる。

此の課題の回答は極めて簡單であり、然もその實行は多少の忍耐を要する。曰く多くを聴き、多くを踊り、正しく聴き、正しく踊る、これである。いくら多くをお聴になつても正しく聴かなければ効果は些い。いくら多くお踊りになつても正しく踊らなければ能率は不良である。正しく聴くと申して別段茲の所を斯く斯くに聴くのが正しく、然らざるものが間違ひであると謂ふのではない。要は純正のタンゴに親近して場違ひ音楽を遠ざけるにある。換言すれば當然多少の苦渋を忍んで専らアルゼンチン物のみを聴取するにある。聴いた耳に安易な英國や獨逸のタンゴを敬遠するにある。

如何にして正しくタンゴを踊るべきか。これ次に接触す可き題目である。然し乍らこれを詳述することは當然本文の範圍を脱出する次第であり、タンゴの踊り方に関する筆者の私見は拙著（朝日書房発行）に叙述してゐるから暫らく仮りにこれを御参照願ふことゝするが、今要点を列記すれば次の三項に要約し得る。

その第一項として、タンゴを楽しむためには、如何にしても多少の踏型を修得する必要がある。即

ちタンゴの如き極めて、獨創的な音楽に對しては、これ又極めて獨創的な踏型を以て對応しなければ充分にその精神を舞踏化することが出来ないので、出鱈目に踏ったのではどうしてもその真諦に徹底し得ない。但し踏型の修得は極めて基礎的なもののみで充分で決して煩雜多岐に亘る必要はない。殊に近来タンゴの新踏型として英國邊りで発表せらるゝものゝ中には音楽の本質と合致し難い踏風の存する事實を警戒せられたい。

踏型並びにこれの舞踏に必要な運動法の修得が終れば、第二項としてこれを正しいリズムに於いて實演することが要求せられる。タンゴの基礎的リズムはスロー・クイック・クイック・スローである。所で中間のクイック・クイックは筆者の所謂ルバト・クイックであつて真正直にクイック・クイックと取ったのでは音楽の強調する粘着性に適合しなくなる。試みにいずれかのダンス・ホールを訪れタンゴを一踏して見ると、ダンシューズの殆ど総べてがこのクイック・クイックを正直に取り過ぎることを発見する。その結果はクイック・クイックに於て腰が浮き、且つ最後のスローが甚だしく間延びして、ダンシングに角が立つと共に、タンゴの骨（もと）める一律動單位中に於ける運動の連続確實性が破壊せられる。然ればルバト・クイックを如何に取る可きかと言ふ段になるとこれだけは到底筆紙で盡し得ない。この点に關して筆者は目賀田男爵を煩はして標準的リズムの取り方のみを示すレコードの發賣せられることを希望する吹笛である。正しい踏型を正しいリズムで舞踏する場合、第三項として全霊全身的の充實力を以て踊って戴くことが希望せられる。その力は所謂臍下丹田より發して足の爪先迄及んでゐることを要する。勿論それは足の關節を硬直せしめる悪る力ではなく、適時適度の弛緩性の自在を抱蔵する力、充實すればする程柔軟性が増加せられ、然も足捌きの切れ込みを判然たらしめ、歩間を少にし乍ら猶且つ足の伸びを充分ならしめる真正の舞踏力でなければならぬ。

タンゴ・レコードは大別して舞踏調と歌謡調の二種とする。前者は本来舞踏用に製作せられたものであるから、間が甚だ嚴格である。これは次に来る可き強奏を目標に足を働かせる舞踏術に於いて、萬一間に狂が生じた場合には甚だ不愉快な印象が惹起せらるゝに至るが故である。これに對して歌謡調には間道楽が存する。従つて舞踏には不適當である。強いてこれを試みても甚だ難渋である。然し乍ら踏りにくい一曲を手際よく踏みこなす所に今迄知らなかった新らしい趣味が発生する。實際アルゼンチン名歌手の歌謡に合して踊る程全我を燃焼せしめるダンシングはない。殆んど我れを忘れ、他人を忘れ、曲終つて恍惚たる事を久しくする。タンゴを聴き込むに従ひ踊り込むに従つてギタラ伴奏の歌謡曲が一番面白くなると申すのが、斯道好事家が結局落ち附く終点であるらしい。

〔この文章は戦前に書かれたものなので、旧仮名遣いが用いられていますが、敢えて新仮名遣いに直さず、そのままにしました。また現在ではあまり使われない用語法や旧漢字もそのままにしました（編集部）〕

# カルロス・ガルデル(4)

*Carlos Gardel* (4)

大澤 寛 (訳)



“CARLOS GARDEL”, Tango de colección 20 (Clarín (2005))

## ガルデル年譜

- 人名・国名・都市名・住所などはカタカナ表記し重要なものには原文を追加した
- 曲名・映画の題名などは原文表記とし「 」に入れた

### (1890)

12月11日フランスのトゥールーズで誕生。出生登記上の名前はシャルル・ロミュアルド・ガルデス (Charles Romuald Gardés)。母親はベルト・ガルデス (Berthe Gardés)。父親はポール・ラッセル (Pual Lasserre) とされるが、ガルデルは決してそのことを認めたことはない。

### (1893)

3月13日母親に連れられてブエノス・アイレス港に到着。フランスのボルドーから客船ドン・ペドロ号で出発したもの。到着後すぐにウルグアイ通り160番地のマンシオン・ラ・ピエダーと言う名の共同住宅の1階に暮らし始める。その共同住宅には後年、名の知られたアーティストたち、例えばティタ・メレーロ、エルサ・オコノール、ピエリーナ・デアレッシヤルイス・サンドリーニなどが住んだ。

### (1897)

7歳。タルカワーン通りのコレヒオ・デ・ニーニャス (Colegio de Niñas) で初等教育を受け始める。

### (1901)

コレヒオ・デ・ロス・セレスィアーノス・ピオIX (Colegio de salesianosサレジオ会の運営する“ピオ9世”校) に入学。この学校は別名ドン・ボスコ校あるいはサン・カルロス校と呼ばれ、手芸などを教える職業学校。同じ学校の仲間にセフェリーノ・ナムンクラ (Ceferino Namuncurá) \*がいた。

\*本誌 第32号 87頁参照

### (1904)

トゥクマン通り2646番地のサン・エスタニスラウ校で初等教育を修了。母親と共にウルグアイ通りの共同住宅を出て、コリエンテス1553番地で借家住まいを始める。

### (1905)

働き始める。ウルグアイのモンテビデオに渡り、そこでの足跡は不明。ブエノス・アイレスに戻ってアバスト地区や都心部の居酒屋で歌い始める。



**(1910)**

母親と共にコリエンテス1714番地に住む。アバストのトラベルサ兄弟が経営するカフェ・オロンデマン\*の常連になる。この時期に芸名をガルデルとする。

\*本誌第34号 90頁参照

**(1911)**

エントレ・リオス通りとモレーノ通りの角のカフェ・デル・ペラード (Café del Pelado) でウルグアイ人歌手のホセー・ラザーノ (José Razzano) と知り合う。アバストでの2人の共通の友人であるヒヘーナの店で唄うためのドゥオ (二重唱) を結成する。

**(1912)**

フランシスコ・マルティーノ (Francisco Martino) と知り合い、ガルデル+ラザーノ二重唱に加える。この3人で3ヶ月間、サラテ、サン・ペドロ、サン・ニコラース、ペルガミーノ、ロハス、メルセデス、チャカブーコ、ブラガードやヘネラル・ビアモンテなどの内陸部を巡業する。ブエノス・アイレスのスイス館での慈善フェスティバルで歌う。一時期、このトリオはメンドーサ出身のサウル・サリーナス (Saúl Salinas) を加えて四重唱となる。コロンビア・レコードに録音する。最初の録音曲は「Sos mi tirador plateado」であった。

**(1913)**

四重唱からマルティーノとサリーナスが抜けてガルデルとラザーノのドゥオはアルベアール街 (注: 現在のリベルタドル街) とタグレ街 (注: 現在のMariscal Ramón Castilla y Tagle) の角のキャバレー・アルメノンビル\*に初登場する。

\*本誌第34号 92頁参照

**(1914)**

この二重唱は、フランシスコ・ドウチャッセ&エリーアス・アリッピが率いる劇団のアトラクションとしてエル・ナシオナル劇場 (Teatro el Nacional) \*に初登場する。

\*注: コリエンテス街のペレグリーニとスイパチャの間にあったカフェー。1920年代から“タンゴの大聖堂”の異名で呼ばれ、多くの著名アーティストがここでデビューした。1929年にエルビーノ・バルダーロ&オスバルド・ブグリエーセ6重奏団、1939年にはブグリエーセ自身のオルケスタがここに登場。メルセデス・シモーネもブエノス・アイレスでの初登場がこの場所であった。1952年に廃業。(Horacio Salas「El tango, una guía definitiva」から)

この年の3月にはペルディゲーロ&カソー劇団の一員としてアポロ劇場に出演する。モンテビデオ、サン・パブロやリオ・デ・ジャネイロで公演する。リベルタドル街のパレ・ド・グレース (Palais de Grace) \*の出口で銃撃されガルデルの肺には銃弾が残る。この事件の際には俳優のアリッピとカルロス・モルガンティが同伴していた。傷が治るとエスメラルダ通り255番地のサン・マルティン劇場に出演。

\*注: 現在のロサーダス通りとスキアフィーノ通りの間にあったスケート場の建物 (現在はExpo会場として使用されている)。1910年代の半ば頃からタンゴの演奏会場であった。ロベルト・フィルボやフランシスコ・カナーロが出演。1924年からは新しい名前ボーグズ・クラブ (Vogue's Club) に改称。フーリオ・デ・カーロが新規開場式に出演。その後間もなくシロス・クラブ (Club de Ciro) と改称。(Horacio Salas「El tango, una guía definitiva」から)

**(1916)**

“ネグロ” リカルド (José “Negro” Ricardo) がギタリストとして加わる。ヌエボ、エスメラルダとコリセオの3つの劇場に出演。ラ・プラタ、マール・デル・プラタおよびモンテビデオを巡業する。

**(1917)**

この年はモンテビデオ巡業で始まる。3月にエンパイヤー劇場に出演し、パスクアル・コントゥ

ルシ作詞サムエル・カストリオタ作曲の「Mi noche triste」を初演する。4月9日にはオデオン社に「Cantar eterno」と「Entre colores」の2曲を初録音する。

Francisco Defilippis Novoa監督の映画「Flor de durazno」にガルデルが初めて映画俳優として出演。当時ガルデルの体重は117キロだった。

エスメラルダ劇場およびサン・マルティン劇場にデュオで出演。その後チリのサンティアゴ、バルパライソ、ビーニャ・デル・マールの各都市を巡演し、帰国するとメンドーサ、ロサリオ、サン・ニコラスさらにモンテビデオではTeatro 18 de Julio（7月18日記念劇場）\*に出演。

\*注：1930年7月18日ウルグアイ共和国憲法が發布された

## (1918)

1月5日にモンテビデオのパーク・ホテルの慈善フェスティバルに出演。次いで同じモンテビデオのロイヤル劇場で公演。4月にはブエノス・アイレスに戻りエスメラルダ劇場に出演後国内巡業でバイア・ブランカ、トレス・アローヨス、ペウアホーおよびヘネラル・ピコの各地を訪問。

## (1919)

国内を長期間巡業する。コルドバでは刑務所で囚人たちを前にして歌う。エスメラルダおよびエンパイア劇場に出演。マール・デル・プラタやモンテビデオを訪問。ホセ・ラサーノが声帯の手術を受ける。

## (1920)

当時14歳だったイサベル・デル・バージェ (Isabel del Valle) と知り合う。彼女は後にガルデルの恋人となる。キリスト教青年協会に入り、ジムに通って運動（ハイアライ）をする。母親と共にリンコン137番地に住んだ。



イサベル・デル・バージェとカルロス・ガルデル

## (1921)

フランシスコ・マスキオ (Francisco Maschio) に紹介されてイリネオ・レギサーモ (Irineo Leguisamo) \*と知り合う。第2ギタリストとしてギジェルモ・バルビエリ (Guillermo Barbieri) が参加。エスメラルダとエンパイア劇場に出演。

\*競馬の騎手。タンゴ「Leguisamo solo」(作詞・作曲 Modesto Papávero 1925) に歌われている。

## (1923)

モンテビデオで公演。この年ガルデルは客船アントニオ・デルフィーノ号で初のヨーロッパ旅行（スペインのマドリード）を行う。マチルデ・リベラ&エンリケ・デ・ローサスが主宰する劇団の一員として出発は11月15日。この年にアルゼンチン市民権を取得。

## (1924)

2月13日ヨーロッパから帰国。このヨーロッパ行きを利用してガルデルはトゥールーズの親戚を訪問している。スマート劇場に出演。10月4日初めてラジオ局スプレンドイドに出演。伴奏はリカルドとバルビエリのギターそしてフランシスコ・カナロ (Francisco Canaro) のオルケスタだった。このデュオはイタリアのウンベルト・デ・サボイア皇太子とウエールズのエドワード・ウィンザー皇太子歓迎の公式レセプションでも歌う。

## (1925)

9月にホセ・ラサーノとのデュオを解散する。ラサーノは喉の不調で歌手を辞め、ガルデルのマ

ネージャーとなる。オスバルド・フレセード (Osvaldo Fressedo) と録音。10月10日ギターのホセ・リカルドを帯同して客船プリンセス・マファルダ号でスペイン再訪。同行はリベール&デ・ローサスの劇団。バルセロナで公演・録音する。帰国してラジオ局スプレنديドに出演。友人フランシスコ・マスキオはガルデルの懇請で競走馬ルナティコ号を購入。この馬はパレルモ競馬場に3位でデビューする。

### (1926)

ラジオ局プリエトや劇場グラン・スプレنديド、エンパイアーおよびフロリダに出演。ラ・プラタ、マール・デル・プラタおよびモンテビデオ巡演。11月にオデオン社で電気録音を開始する。

### (1927)

アバスト地区のジャン・ジョレス (Calle Jean Jaures) 735番地に自宅を購入して住み始める。地域の映画館やマール・デル・プラタ、モンテビデオで歌う。カフェ・トルトーニ (Café Tortoni) でルイー・ピランデッロ\*記念公演を行う。10月26日客船コンテ・ベルデ号でスペインへ向かう。マドリードおよびバルセロナで歌う。ギター伴奏はバルビエリと“ネグロ”リカルド。

\*ルイー・ピランデッロ (Luigi Pirandello, 1867年6月28日-1936年12月10日) イタリアの劇作家、小説家、詩人。1934年のノーベル文学賞受賞者。(Wikipedia から)

### (1928)

7ヶ月間のスペイン巡業の後、客船コンテ・ロッソ号でブエノス・アイレスに戻る。同じ船にバルセロナ倶楽部のサッカー・チームが乗船していた。ガルデルはこのチームの選手であるホセ・サミティエールとリカルド・サモラの親友であった。ガルデルはバルセロナ滞在中、オリンピックに出場するためアムステルダムに向かうアルゼンチン代表サッカー・チームのホスト役を務めた。彼らとはパリにも同行し、彼らの帰途、ウルグアイ代表チームも一緒にキャバレー・エル・ガロン (El Garrón) \*で歓待した。

\*パリ、モンマルトルの有名なキャバレー。目賀田男爵もここでタンゴダンスを学んだという。

バルセロナではガルデルに当時の最新モデルの自動車グラン・ページュが贈られた。パリではガルデルは (フェミナ劇場での慈善フェスティバルに偶然出演した後) 華やかにデビューする。この年の10月2日にはキャバレー・フロリダが開業。リカルド、バルビエリおよびブエノス・アイレスから呼び寄せたアギラル (José María Aguilar) のギター伴奏で「Siga el corso」「Esta noche me emborracho」フォックストロットの「Manos brujas」folklore風の「Carretero」を歌う。マドリード、バルセロナ、サンタンデル、サン・セバスティアンおよびビルバオの諸都市で歌う。さらにフランスのニース、カンヌおよびビアリッツへ巡業する。公演ではルイス・ピエロッティ (Luis Pierotti) という企業家を代理人とした。

### (1929)

2月5日パリのオペラ座で歌う。カンヌのカジノにも出演。セビリアの国際万博やマドリード、バルセロナで歌う。帰国してラジオ局ラ・ラソンおよびエル・エクセルシオルに出演。確執はあったが最終的にホセ・ラサーノとの共演を応諾してデュオで「Claveles mendocinos」と「Serrana impía」を録音する。この2曲だけが電気録音によるこのデュオの録音である。個人的な問題でギターのホセ・リカルドが退団し、代わりにアンヘル・ドミンゴ・リベロール (Ángel Domingo Riverol) が参加。ガルデルは鼻のポリープの手術を受ける。

### (1930)

2月6日パリへ旅行。同行はギターのバルビエリ、アギラルとリベロール。パリのエンパイアー・ホテルで歌う。サッカーの第1回ワールド・カップがウルグアイで開催される。ガルデルはモンテ



ビデオに渡り、7月11日アルゼンチン・チームの宿泊所で歌う。翌日は同じくウルグアイ・チームの宿泊所で歌う。トーキー映画のパイオニアであるエドゥアルド・モレーラ (Eduardo Morera) 監督の短編映画のために10曲を歌う。ラジオ局ラディオ・ナシオナル、スプレンドイド、リバダービアで歌う。ギター奏者陣に加えてバイオリンにアントニオ・ロディオ (Antonio Rodio)、ピアノにロドルフォ・ビアジ (Rodolfo Biagi) を起用して録音。さらにフランシスコ・カナロ (Francisco Canaro) のオルケスタの伴奏で録音。

### (1931)

ニースのカジノに出演。ギターのアギラール退団。ブエノス・アイレスに戻り、替わりのギターにフーリオ・ビーバス (Julio Vivas) を加える。この年からアルフレード・レ・ペーラ (Alfredo Le Pera) が作詞・脚本での協力を開始。映画「Luces de Buenos Aires」をパリ郊外のジョアンヴィルにあるパラマウント映画で撮影。スペイン対イングランドのサッカー試合観戦のため友人のエドゥモンド・ギュイブルグ、ピエロッティとロンドンへ旅行。ガルデルの友人のスペイン選手サミティエールとサモーラも出場したがスペインは7対1で敗れる。フランシスコ・カナロ楽団と録音。帰国後はブロードウェイ劇場やラジオ局ラディオ・カサ・アメリカに出演。

### (1932)

ジョアンヴィルにあるパラマウント映画で3本の映画「Melodía de arrabal」「Espérame」および「La casa es seria」を撮影する。イギリス、イタリアおよびフランスのラジオ局に出演。バルセローナで録音。ニューヨークへ向かう。14ヶ月の不在の後に客船ジウリオ・チェザレ号でブエノス・アイレスに戻る。ラサーノとの関係が日増しに悪くなり、友人のアルマンド・デフィーノ (Armando Defino) がガルデルの要請を受けて徐々にガルデルの財産の管理を受け持つようになる。

### (1933)

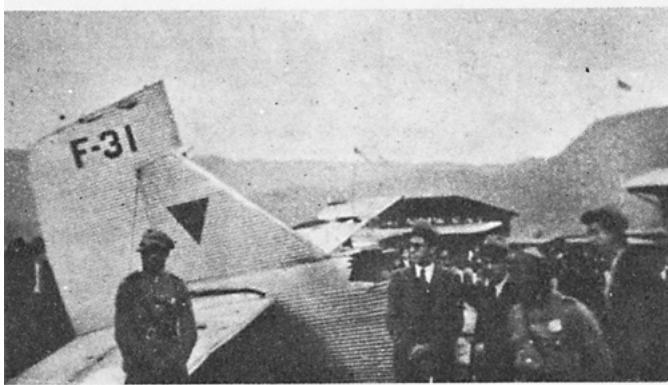
ラジオ局や地域の映画館への出演と国内巡演。ギターにもうひとりオラシオ・ペトロッシが加わる。アルベルト・カステジャーノ (Alberto Castellano) の五重奏団と録音。エル・ナシオナル劇場で劇作品「De Gabino a Gardel」\*上演に参加。ラ・プラタ、バイーア・ブランカ、メンドーサ、サン・フアンおよびモンテビデオで歌う。ラジオ局ラディオ・ナシオナルで3度のコンサートを行う。そのうちの11月6日月曜日に行ったものがアルゼンチンでの最後のライブ公演となった。マヌエル・ホベース作曲マヌエル・ロメーロ作詞の「Buenos Aires」を歌う。映画出演を続けるためにニューヨークに向かう。

\* 「De Gabino a Gardel」 この年にIvo Pelay が作った音楽劇。ガルデルは友人で俳優のTito Lusiardoや3人のギタリストと共に出演。Gabino はGabino Ezeiza を指す。1858-1916。ブエノス・アイレスのSan Telmo生まれのアフリカ系ポルターニョで、初期のパジャドル (吟遊詩人) としてアルゼンチンだけでなくウルグアイやブラジル南部でも有名だったとされる。吟遊にミロンガ (Milonga pampera) のリズムを取り入れたことでも知られる。彼が1884年7月23日に行った公演を記念してアルゼンチンでは7月23日をDía de payador (吟遊詩人の日) としている。(Wikipedia など)

### (1934)

ニューヨークで撮影された映画「Cuesta abajo」と「El tango en Broadway」がブエノス・アイレスで上映開始される。ガルデルはニューヨークで当時13歳のピアソラと知り合い、ピアソラを映画「El día que me quieras」に出演させる。3月5日の23時にガルデルはニューヨークのNBC放送のスタジオから歌う。呼びよせた3人バルビエリ、リベロール、ビーバスのギター伴奏によるもの。これをラジオ局スプレンドイドが放送した。パラマウント社と1年に2本ずつのシリーズものとして合計6本の映画出演契約を結ぶ。トゥールーズで親戚たちと暮らしている母親に会うために8月26日フランスへ向かう。映画撮影継続のために10月15日ニューヨークに戻る。ニューヨークでは2本の長編「El día que me quieras」「Tango bar」および短編ミュージカル「Cazadores de

estrellas」を撮影。3月25日にはブエノス・アイレスの幾つかのラジオ局が、RCAビクターの要請を受けてガルデルがラテンアメリカ諸国巡業に旅立つ前にニューヨークのスタジオで録音した一般向けの挨拶を放送する。この巡業にギターのアラシオ・ペトロッシは参加出来ず、バルビエリ、リベロール、アギラルの3人を帯同。巡業の始まりはプエルト・リコのサン・フアン、キュラソーおよびベネズエラのカラカスであった。次いでコロンビアではバランキージャ、カルタヘナ、ボゴターおよびメデジンの諸都市。23日日曜日には国立劇場で夕方からの公演を行った。そして翌日サコ（SACO）社の3発飛行機F-31に搭乗して、次の公演予定地である3ヶ所、コロンビアのカリ、パナマーおよびキューバのラ・アバーナに向かおうとする。午後2時51分55秒、ガルデルの搭乗機は機首を上げた直後に滑走路にいた別の飛行機の上に墜落し炎上する。この事故でガルデル、レ・ペラ、リベロール、バルビエリが死亡。重傷を負って生存したのがホセ・マリーア・アギラルとガルデルの英語教師であったホセ・プラハ（José Plaza）である。



ガルデルの搭乗機 F-31 の残骸（左）と  
焼け焦げたガルデルのパスポート（右）



## (1936)

ガルデルの遺体は1936年の2月に本国に送還されるまでメデジンに留め置かれた。遺体は本船パン・アメリカ号に搭載されて2月5日11時30分に多くの人々が待つブエノス・アイレス港の北ドックに着船する。前夜はモンテビデオに寄港して通夜が営まれた。ガルデル追悼委員会のリベルター・ラマルケ、フランシスコ・カナーロ、ホセ・ラサーノおよびDr.レオン・エルキン（León Elkin）\*が派遣された。

\*León Elkin. 著名な耳鼻咽喉科医でJulio Sosaからも治療の相談を受けていたという。

遺体は港からルナ・パークへ運ばれた。そこではエンリケ・ガルシア・ベジョーソ、セグンド・ポマール、パキート・ブスト、ロベルト・セリージョ、クラウディオ・マルティーネス・パルバラが演説を行った。ハリウッドのロシータ・モレーノからの手紙をアスセーナ・マイサーニが読み上げ、次いでフランシスコ・カナーロがロベルト・マイダの歌で「Silencio」を2度演奏した。翌日のチャカリータ墓地まで霊柩車に従う葬列は感動的なものであった。現在ガルデルの遺体はチャカリータ墓地の廟に眠っている。

「海を渡ったポルターニョたち」の足跡(4) 

エドゥアルド・ビアンコと

フアン・デアンプロジジョ「バチーチャ」

～枢軸国と連合国で迎えた第2次世界大戦～

齋藤 富士郎

ビアンコ＝バチーチャ楽団 (Orchestre Argentin Bianco – Bachicha) は我国では最もよく知られている「海を渡ったポルターニョたち」\*)の楽団の1つであり、同じく最もよく知られているマヌエル・ピサロ楽団の有力なライバルでもあった。しかし、この楽団が存続したのは僅かに2年間であった。そしていろいろ調べてみると、この楽団を主宰したエドゥアルド・ビアンコとフアン・デアンプロジジョ「バチーチャ」の音楽と（特に第2次世界大戦を挟んでの）生き方は対照的である。

## (1) 渡欧するまでの2人の経歴

### エドゥアルド・ビアンコ

エドゥアルド・ビセンテ・ビアンコ (Eduardo Vicente Bianco、以下ビアンコと表記する) は1892年6月28日にロサリオでイタリア家系の家に生まれた (オラシオ・フェレールのEl Libro del Tango Tomo IIでは1892年、ブエノス・アイレス生まれとなっている。ここでは参考資料 [4] に従った)。ビアンコは1人息子で、他に6人の姉妹がいた。オペラ劇場の管弦楽団のバイオリオン奏者であったビアンコの父親は中々厳しい人であったらしく、それに耐えかねたビアンコは11歳の時に家を出て、ブエノス・アイレスに向かった。

ブエノス・アイレスで始めは理髪店の見習いとして働き、終業後は夜学に通った。彼は雇い主には特に可愛がられたという。ある日、その雇い主がビアンコをオペラのリゴレットを聴きに連れて行った。それが動機であるかは定かでないが、ビアンコはバイオリンの勉強を始め、仕事を辞めて音楽院の学生としてダビッド・ボグリア (David Boglia) の下で勉強した。

バイオリンの勉強に励んだ結果、彼は遂にコンテストで1等賞を獲得し、イタリア留学の認可を得た。しかし、彼の父親はずっと前にイタリアに戻ってしまったので、彼はイタリア行きを断念して母の許に戻った。1942年にビアンコはドイツで自伝 (と言っても自筆ではなくゴーストライターに依るものであったが) を出版したが、その中で母について「母は世界の何よりも優る (Eine Mutter ist mehr wert, als alles andere auf der Welt)」と言っている。かれは相当なマザコンであったらしい。



\*) これは言うまでもなくポルテニア音楽同好会制作のCD「海を渡ったポルターニョたち」(CD-1209)のタイトルであるが、便利な表現なのでそれをそのまま流用させてもらうことにした。



ヨーロッパに行く代わりに、彼はモンテビデオで働き、そこでエンリコ・カルーソ (Enrico Caruso) を知った。モンテビデオで彼は海難事故に遭遇し、九死に一生を得た。彼が乗っていた船の“コロンビア号”がモンテビデオ港を出港しようとしていた時に衝突事故を起こし、瞬時に沈没してしまった。乗員と乗客合わせて947人のうち助かったのは唯の29人であったが、ビアンコはその中の1人であった。

1924年に母が世を去ったので、彼は改めて渡欧する決心をした。

ビアンコが何時クラシック音楽からタンゴに転向したのかは諸資料に記載がない。彼自身の言によると、若い時にブエノス・アイレスでどこかの楽団に入ろうとしたがうまく行かなかったのでパリ行きを考えたということである。

### **フアン・デアンブロッジォ「バチーチャ」**

フアン・バウティスタ・デアンブロッジォ (Juan Bautista Deambroggio) は1890年3月2日にラ・プラタ市で生まれた。彼には「エル・エレリート (El Herrerito) (鍛冶屋)」、「バチチン (Bachichín)」、「バチーチャ (Bachicha) <sup>\*</sup>)」という3つのあだ名があり、中でもバチーチャが最も有名である。彼の本名は長いので本稿では「バチーチャ」で通すことにする。

下層階級出身であった「バチーチャ」は13歳の時から鋳物工場で働いた。そこで当時19歳のロベルト・フィルポと親しくなった。フィルポは「バチーチャ」をるつぽ作業の助手のように扱ってくれた。

フィルポを通して「バチーチャ」は音楽に親しみ、バンドネオンを習い始め、又、フィルポの紹介でアルフレド・ベビラックワの下で音楽を学び始めた。1903年の頃<sup>\*\*</sup>)にはバンドネオンでワルツが弾けるようになった。

1911年にフィルポと共にマージョ大通りのカフェ「センテナリオ (Centenario)」、通称「タカ・タカ (Taka Taka)」、に出演したのが職業的音楽家としての初仕事である。その後、同じ大通りの「ラ・カステジャーナ (La Castellana)」にも出演した。

1914年にエドゥアルド・アローラスが抜けた後任としてフィルポ楽団に参加した。この時のフィルポ楽団の編成はロベルト・フィルポ (P)、ダビッド「ティト」ロカタグリアータ (David “Tito” Roccatagliata) (第1 Vn)、ペドロ・フェスタ (Pedro Festa) (第2 Vn)、「バチーチャ」(Bn)、アレハンドロ・ミチェッティ (Alejandro Michetti) (F1) で、ペドロ・フェスタは1915年にアヘシラオ・フェラサーノと交替した。これがその後のフィルポ楽団の基礎となった。1916年と1917年に「バチーチャ」はフィルポ楽団の一員としてウルグアイ演奏旅行に参加した。フィルポ楽団によるラ・クンパルシータの初録音 (異説もあるが) には「バチーチャ」が参加している可能性が高い。「バチーチャ」



<sup>\*</sup>) 移民してきたイタリア人の蔑称 (小学館 西和中辞典)

<sup>\*\*</sup>) 上に述べられていることと計算が合わないように思えるが、ここでは原資料 [1] に従った。

は1921年頃までフィルボ楽団にいた。

独立を果たした「バチーチャ」は初め4重奏団で、その後はオルケスタを組織して活動した。

1922年にフリオとアルフレド・ナバリネ兄弟 (Julio y Alfredo Navarrine) が海外公演の目的で劇団と音楽部門からなる「ロス・デ・ラ・ラサ (Los de la Raza)」(「純血種の男たち」という意味であろうか) を編成し、1923年8月13日にスペインに向けて出発した。この音楽部門は7人からなっていたが、そこに「バチーチャ」はバンドネオン奏者として参加した。又、マリオ・メルフィ (Mario Melfi) がバテリーア奏者として参加していた。

スペイン巡業の途上で「バチーチャ」はヨーロッパでより多く働く機会を見つけることができるようにと、又、ヨーロッパではタンゴをうまく演奏するバンドネオン奏者が少ないということでメルフィにバンドネオンを教授した。周知のように、この後、メルフィはバンドネオン奏者として独立し、自分の楽団を持つに至る。

一行はこの年にアルゼンチンに戻ったが、「バチーチャ」とメルフィを含む何人かのメンバーはそのままスペインに残った。

## (2) パリにおける2人の出会いとビアンコ=バチーチャ楽団の結成から解散に至る迄

ビアンコは1925年の初めに他の2人のアルゼンチン音楽家、ピアニストのルイス・コセンサ (Luis Cosensa) とバンドネオン奏者のホセ・シュマヘル「エル・イングレシート」 (José Schmacher “El Inglesito”) と共にパリにやって来た。そしてトリオを結成し、ノートルダム・ド・ロレット (Notre-Dame de Lorette) 通り58番地のレストラン・キャピトル (Capitol) で数か月間演奏活動したが、コセンサがホームシックになってブエノス・アイレスに戻るようになったので、トリオはあえなく分解した。ビアンコはとりあえず「ターノ」ヘナロの楽団に、次いでマヌエル・ピサロの楽団に入った。しかしビアンコはNo. 2のポジションに甘んずることを肯んぜず、常にNo. 1のポジションを求める性格の持ち主であったので、なんとか自分の楽団を持ちたいと思った。

同じ年、「バチーチャ」とメルフィがマドリッドからパリにやって来た。それでビアンコは「バチーチャ」に声をかけ、オルケストル・ティピク・ビアンコ-バチーチャ (Orchestre typique Bianco-Bachicha) が誕生することとなった。第1バイオリンはビアンコ、第1バンドネオンは「バチーチャ」、それにメルフィもバテリーア奏者として加わった。なおこの楽団は時と場合によってOrchestre Argentin Bianco-BachichaとかOrchestre Typique Humoristique Argentinとかいろいろな名前と呼ばれている。ビアンコは「バチーチャ」に楽団の指揮を2人で分け合うことを提案し、意気を感じた「バチーチャ」はデビューより2日早くアンサンブルを完成させたという。楽団のメンバーにはバイオリン奏者のアヘシラオ・フェラサーノ、ギター奏者兼歌手のオラシオ・ペトロッシ (Horacio Pettorossi)、歌手のフアン・ラッジ (Juan Raggi) とテレサ・アスプレーラ (Teresa Asprella) らも後に加わった。ビアンコ=バチーチャ楽団は1925年の終わりにパリのキャバレー「ワシントン・パレス (Washington Palace)」でデビューした。1926年以降はキャバレー「パレルモ (Palermo)」、ダンスホール「フロリダ (Florida)」、「ボビノ (Bobino)」、「エンバシー (Embassy)」などで活動した。1926年に初録音を果たし、それらは(仏) オデオンと(仏) コロンビアから同時発売された。

その後、ビアンコ=バチーチャ楽団はパリ以外にもプロヴァンス、ビアリッツ、サン・ジャン・ド・リュズ、ニースなどのリゾート地を巡演した。1928年にスペインに行き、(西) オデオン向けに一連の録音をした後で、この楽団は解散した。存続期間は僅か2年に止まった。ビアンコと「バチーチャ」

はその後自分の楽団を組織し、従来のメンバーは2人のマエストロのどちらかに従った。

僅か2年の存続期間ではあったが、その間のビアンコ=バチーチャ楽団の活躍ぶりについては当時の新聞・雑誌に多くの賛辞が掲載されている。この期間に限定すれば、ビアンコ=バチーチャ楽団はマヌエル・ピサロ楽団の有力ライバルであったと言っても過言ではないだろう。

ビアンコはその後東欧と南欧の旅に数年を過ごし、最終的にナチス政権下のドイツに落着いた。一方、「バチーチャ」はパリに定着した。こうした2人の性向の違いが楽団解散の理由であったのだろうとBruce Bastinは述べている [2]。



#### ビアンコ=バチーチャ楽団

CD “BUENOS AIRES to MADRID” (HQ CD 88) 付属のパンフレットによれば、この写真は1928年5月頃のもので、前列左のバンドネオン奏者が「バチーチャ」、その右がオラシオ・ペトロッシ、中列の立っているバイオリン奏者がビアンコ。パンフレットではビアンコとコントラバス奏者の間にいるのがマリオ・メルフィではないかとしているが確定できない。或は前列最左端の打楽器奏者がメルフィの可能性も高い。

### (3) ビアンコ=バチーチャ楽団解散後の2人の足跡

#### エドゥアルド・ビアンコ

ビアンコは自分の楽団を率いてヨーロッパ各地を巡演した。1928年10月にパリで録音した後、ルーマニアに行き同年12月半ばまでいた。そこで彼はマリア女王からの感謝状を拝受した。1929年5月にはイタリアに行き、スペイン国王アルフォンソ13世に謁見した<sup>\*)</sup>。その後アテネに行き、1930年3月に再びイタリアに戻り、(伊)コロンビア向けに録音した。1932年頃、ビアンコはベルリンでホモコードに録音し、5月にはパリでパテに録音した。1933年にはニューヨークにまで足を伸ばし、1934年にブルンスウィックに録音した。1936年にはビアンコはポーランドに行き、ワルシャワとアドリアで数か月過ごし、その後、ロシアに行き、モスクワ、ティフリス、レニングラード、オデッサで演奏活動した。1936年にはビアンコはオランダのロッテルダムで公演したが、それを聴いたオランダ人音楽家のアリー・マースランド (Arie Maasland) は処女作“オレー・グァパ (Olé Guapa)”をビアンコに捧げた。このマースランドが後のマランド (Malando) である。1937年にはアルバニアに旅した。

ビアンコは親ナチ、親ファシストであったと言われている。1939年には何とヒトラーとムッソリーニの前でタンゴを演奏した。彼のタンゴ“デスティノ (Destino)”は1939年にベルリンで録音され、ムッソリーニに捧げられた (ギリシャ国王に捧げられた、とする資料もある)。第2次世界大戦勃発

<sup>\*)</sup> この後、1931年4月にアルフォンソ13世は王政反対革命委員会によって退位させられ、フランスに亡命した。



時にはビアンコはイタリアに居たが、その後、ドイツに戻った。彼はパリにはあまり良い思い出を持っていなかったらしい。1942年3月にビアンコはドイツでゴーストライターの手になるものではあるが自伝「Der Tango-König (タンゴ王)」(ドイツ語)を出版した(筆者は未見)。「タンゴ王」とは言ったものだが、これは当時のドイツでそのように呼ばれていたことによるのであろう。フアン・ダリエソの「エル・レイ・デル・コンパス」のようなものである。戦前に日本で発売されたビアンコ楽団のレコードのパンフレットにも「タンゴ王」として紹介されている(冒頭の画像を参照)。この自伝にはルーマニア、イタリア、スペイン、アルバニアの王室からの推薦状や各国の政界人と撮った写真が掲載されているという。彼は支配階級、権力階級に近付いて自らの地位を固めようとしたらしい。

ビアンコは1940年末頃までにナチス宣伝のためのラテン・アメリカ向け短波放送のための録音をした。1942年にはビアンコはドイツ占領下のオランダを再訪した。こうした彼の親ナチ、親ファシズム的行動によって彼は一部の人たちから「対独協力者(コラボラショニスト、略称コラボ)」のレッテルを貼られることになる。「コラボ」とは親ナチ、親ファシズムよりもっと悪意を含んだ言葉で、殆ど「売国奴」と同義語である。彼がどの程度「コラボ」であったのかわからないが、そのことが彼の生涯のある部分をグレーにしているとだけは言えるであろう。

後になってリト・バジャルド(Lito Bayardo)との会話の中でビアンコは「大戦勃発を知って、私は交戦諸国から離れようとしたが、出国は許されなかった。ある時、国境を越えようとしたが、インスブルックで逮捕された。しかしタンゴ好きのある陸軍士官のお蔭で自由になったが、我々を追跡する人々に日夜おびえた。それが原因で心臓を悪くし、マグデブルグの病院に入った。」しかしビアンコを「コラボ」と決めつける人々はこの話を真っ向から否定しており、彼の有名なタンゴ「プレガリア(Plegaria)」を「死のタンゴ」とさえ呼んでいる。

ビアンコは1943年にアルゼンチンに戻ったというが、当時ドイツとその占領国は敵国に取り囲まれていたはずで、その中をどうやって抜け出して、大西洋を渡ったのであろうか? 一つの可能性として、ドイツ海軍のU-ボートに乗せられて、大西洋を潜航し、モンテビデオを経由して本国アルゼンチンに送還されたことは考えられるが、勿論、全くの想像に過ぎない。

帰国後、ビアンコはコリエンテス通りのナシオナル劇場(Teatro Nacional)に雇われた。当時18歳であったタンゴ研究家のエクトル・ルイス・ルッチ(Héctor Luis Lucci)は12人編成の彼の楽団の演奏を聴いたことがあり、演奏の最後はスタンディング・オベーションがあったと回想している。戦後の1950年にはビアンコはフリアン・プラサ、アティリオ・スタンボーネ、アルフレド・マルクッチらの新進気鋭のタンゴ音楽家からなる楽団を編成し、ヨーロッパや中近東を巡演し、ギリシャ・オデオンに録音もしている(A.M.P. CD-1175に復刻されている)が、経営的には大失敗であったという。「コラボ」であったという風評のためであったろうか。喘息もちであったビアンコはこの後目立った活動はせず、1959年10月26日にブエノス・アイレスで生涯を閉じた。華やかな前半生に比べれば後半生は「タンゴ王」とはほど遠いものであったろう。遺骨はフランシスコ・カナロの仲介でチャカリータ墓地のSADAICパンテオンに納められた(筆者も彼の銘板を見たことがある)。

### フアン・デアンプロジジョ「バチーチャ」

ビアンコと別れた「バチーチャ」は短命に終わったバチーチャ＝フェラサーノ楽団を経て、1929年にオルケストル・アルジャンタン・バチーチャ(Orchestre Argentin Bachicha)を編成し、「カシノ・ド・ベレーム(Casino de Belleme)」でデビューした。その後、「ビアリッツ(Biarritz)」、「セ

ヴィラ (Sevilla)」、「クーポール (la "Coupole")」などパリの主要箇所に出演した。1930年には有名な「エル・ガロン (El Garrón)」にも出演した。

「バチーチャ」はビアンコと違ってパリに定住したが、彼が率いるオルケストル・アルジャンタン・バチーチャは殆どヨーロッパ全域とアフリカ及び中近東を巡演して回った。



「バチーチャ」は第2次世界大戦勃発後もパリに留まり、ドイツ占領下で

バチーチャ楽団 ギターを持っている女性は恐らくバチーチャ夫人で歌手のエミリア・ガルシアであろう。

もオデオン向けに1941年5月まで録音した。そして戦後も1950年代まで演奏・録音活動を続けた。

「バチーチャ」はビアンコと違って余り派手々々しい動きはしておらず、逸話も無い。支配階級の人々や権力者に近付くこともなかったようだ、おそらくそれが彼の性格だろう。彼はオルケスタの歌手であったエミリア・ガルシア (Emilia García) と結婚し、何人かの子供をもうけた。それらの子供の1人ティト (Tito) は音楽家となり、父の後を継いで楽団経営にあたった。

1950年代にごく短期間の故国訪問をした以外 (右の写真はその時のものであろう)、「バチーチャ」はずっと「パリに繋がれて (Anclado en París)」残留し、「パリで死んだ男 (El que murió en París)」となることを望んだ。そして1963年11月28日に望み通りパリで生涯を閉じた。



左より、カルロス・アクーニャ、バチーチャ、アルヘンティノー・レデスマ

#### (4) ビアンコ＝バチーチャ楽団、ビアンコ楽団、バチーチャ楽団の録音活動

ビアンコ＝バチーチャ楽団、ビアンコ楽団、バチーチャ楽団のディスコグラフィに関しては芝野史郎氏のご自身のコレクションに基づいて作成されたもの [6] [7] が、今のところ最も信頼できるものである。

それによればビアンコ＝バチーチャ楽団は1926年10月23日から1928年5月まで、(仏、西、伊、伯、蘭) オデオン、(英、仏) コロンビア、(西) リーガルに90タイトルを録音している (テスト盤を除く)。またビアンコは1928年8月から1950年まで (仏) パテ、(仏、伊) オデオン、(仏) ブルンスウィック、(独) ホモコード、(伊、希) コロンビア、(独) テレフンケン、(独) ポリドールに102タイトルを、バチーチャ楽団は1928年から1950年代まで (西) リーガル、(仏、西) オデオン、(仏) ティピク、(仏) クリスタルに94タイトルを録音している。またバチーチャ楽団には1950年代に6種のEP盤 ((仏) ティピク) があるが、新録音か再録かはわからない。3者合わせれば286タイトルとなり、マヌエル・ピサロの300タイトルに匹敵する。その意味でもビアンコ＝バチーチャ楽団、ビアンコ楽団、バチーチャ楽団の3楽団はマヌエル・ピサロの強力なライバルであったことは納得できる。

## (5) ビアンコ楽団とバチーチャ楽団の演奏スタイル

ビアンコはアルゼンチンではタンゴ演奏家としての実績はない。彼は「海を渡ったポルターニョたち」の1人ではあるが、タンゴ演奏家としてのキャリアの出発点はヨーロッパである。それ故、彼は、他の「海を渡ったポルターニョたち」とは違って、初めからヨーロッパ・スタイルのタンゴを作り上げて行ったと見る事が出来る。ヨーロッパでビアンコはヨーロッパ人たちの嗜好を速やかに理解し、彼のタンゴにヨーロッパの香りを加えた。そこに彼のタンゴの特徴がある。

ビアンコの演奏スタイルは、例えば“Sentimiento Gaucho”や“Derecho Viejo”のような良く知られた古典の名曲についても、コチコチのアルゼンチン・スタイルとは一味違って、バイオリンのピチカートや独奏を多用し、ギターを入れたりして、ヨーロッパの楽団のスタイルに幾分近付いたものになっている。また掛け声はやし声を多用して、アルゼンチンの雰囲気を出そうとしている（現実とは異なるが）。歌手の歌い方も何となく甘美な雰囲気を持たせている。こういうところが当時のヨーロッパの、特に上流社会の、人々から歓迎されたのであろう。

「バチーチャ」はビアンコと異なり、渡欧する以前にフィルボ楽団のバンドネオン奏者として十分な研鑽と実績を積んでいる。だから渡欧後もアルゼンチン・タンゴの基本スタイルは崩していない。ここがビアンコと異なる点である。もっとも、ビアンコ＝バチーチャ楽団解散直後は、恐らくビアンコの影響と思われるが、コーラスや合唱を多用した時期もあるが、そうしたことは時を経るにつれて少なくなって行き、正統派のアルゼンチン・タンゴのスタイルを維持している。しかし、マヌエル・ピサロの場合と同様に、「バチーチャ」が渡欧したのは第1次タンゴ黄金時代が始まる直前であったから、彼の演奏スタイルは基本的には1910年代のフィルボの演奏スタイルの後継と言える。こういうところはマヌエル・ピサロとフアン・マグリオとの関係に似ていると言えるが、音楽を聴いてそれほど明確に断定できるものでもない。

ビアンコ＝バチーチャ楽団の演奏スタイルは上で述べたビアンコと「バチーチャ」の特徴が入り混じっており、おそらく曲によってどちらかが主導権を取ったのであろう。

以上、述べたことはあくまで筆者が復刻CD/LPを聴いた限りでの感想であり、参考文献[6][7]のディスコグラフィにリスト・アップされているものをすべて聴いた訳ではない。若し、ビアンコや「バチーチャ」の録音のすべてを聴くことが出来たならば、感想もまた違ったものになったかもしれない。例えば、復刻CD/LPに依る限り、エミリア・ガルシアの歌はそれほど多くない。それで筆者は彼女の録音は多くはないと思い込んでいたが、参考文献[7]のバチーチャ楽団のディスコグラフィに依れば彼女は26曲ほど録音（2重唱を含む）しており、何曲かはフランス語で歌っている。またフランス語のタイトルの器楽演奏も数曲ある。本来はこれらをすべて聴いてから結論を述べるべきであるが、それは実際上不可能である。

## (6) 作曲家としてのビアンコと「バチーチャ」

表1は参考文献[1]とディスコグラフィから拾い出したビアンコと「バチーチャ」の作品リストである。勿論、これがすべてとは断言できないが、大部分は含まれているのではないか。両者ともに有名曲はそれほど多くはない。ビアンコでは良く知られているものは殆ど“Crepúsculo”と“Plegaria”の2曲だろう。“Poema”はメルフィとの共作であるが、我が国ではメルフィの作品で通っている。“Madreselva”はカナロの作品との同名異曲なのかどうかは不明である。「バチーチャ」の場合は



“Bandoneón arrabarelo” が有名である。しかし高場将美氏によれば、この曲の元々の作者はギター奏者のエンリケ・マシエールであり、後になってパリで金に困ったオラシオ・ペトロッシがこれにパスクアル・コントゥルシによる歌詞を付けて「バチーチャ」に買い取ってもらい、「バチーチャ」の作品として登録されたということである [9]。又、“Aserrín aserrán” はフィルポの “Ahorcado” と同曲であり、“Piccolo navío (Piccolo navío del Maxim’ s)” もルイス・リカルディの “Il Piccolo navío” と同曲であろう。これらが「バチーチャ」の作品になった事情は不明である。又、“Juan Manuel” と “Se va la vida” も良く知られている有名曲と同名異曲である。その他には “Oración” が有名曲と言えるだろう。

## (7) むすび

ビジネスの世界でも学問の世界でも、故国を離れて海外で活躍する人々の実情は中々本国では、特に日本では、理解されないところがある。音楽の世界でもそれは同様であろう。「海を渡ったポルテーニョたち」についても音楽そのものはレコードを通して聴くことが出来るが、彼らがヨーロッパで実際にどのように過ごしたかについては記録が少ない。それでもマヌエル・ピサロやエドゥアルド・ビアンコ、フアン・デアンプロジジョ「バチーチャ」については比較的資料がある。筆者は本誌の32～33号と34号でマヌエル・ピサロと「ターノ」ヘナロについて書いたが、今号ではビアンコと「バチーチャ」について書かせていただいた。

## おわりに

「海を渡ったポルテーニョたち」はこれまで取りあげた人々以外にも多数いるが、彼ら／彼女らの事績に関する資料は少ない。それでこのシリーズは本号を以って完了としたい。

(完)

## 参考資料

- [1] Óscar Zucchi, “El tango, el bandoneón y sus Intérpretes”, Tomo II, CORREGIDOR 2001, pp.492-510
- [2] Bruce Bastin, CD:Bianco – Bachicha Tangos in Paris 1926-1941 HQ CD 66
- [3] Allain Boulanger, CD:ARGENTINA IN PARIS Vol.2 BIANCO – BACHICHA 1926-1928 Frémeaux & Associés FA 5081
- [4] Néstor Pinsón, <http://www.todotango.com/english/creadores/ebianco.asp>
- [5] Óscar Zucchi, <http://www.todotango.com/english/creadores/bachicha.asp>
- [6] 芝野史郎、「欧州で活躍したタンゴの使節たち（第5回）」 TANGUEANDO EN JAPÓN No.11 (2003) pp.40-47
- [7] 芝野史郎、「欧州で活躍したタンゴの使節たち（第6回）」 TANGUEANDO EN JAPÓN No.12 (2003) pp.42-53
- [8] 大岩祥浩、「アルゼンチン・タンゴ アーティストとそのレコード」、(株) ミュージックマガジン、1999年 pp.34-37, 102-104
- [9] 高場将美、Tangolandia, 2013年秋号、pp.3-6

## フアン・デアンプロジジョ「バチーチャ」の作品

## タンゴ

1	Acuarela bosquense
2	Adiós, adiós (Scalon, Santoneraと共作)
3	Aserrín, aserrán
4	Avellaneda
5	Bandoneón arrabalero (Contrusiと共作)
6	Bésame (Pericón)
7	Boca
8	Buena pinta
9	Cállate corazón
10	Cardo azul
11	Casimoro
12	Cielo de río (Rolton, Viouと共作)
13	Cuenta aparte (Ramunchoと共作)
14	Déjame (E.Albaとの共作)
15	Hasta la muerte
16	Jamais
17	Juan Manuel (Fabreguez, A. de Bacletと共作)
18	La yegüesita (yegüesita)
19	Lasse moi lire dans tres yeux (Emourとの共作)
20	Llamaradas (Santaneraと共作)
21	Madrecita mía
22	Maipú
23	Mentaberry (Taita)
24	Mi viejo fueye
25	Misterio de amor
26	Montparnasse
27	Muchachito rana
28	Naipes
29	Nelly
30	Oración
31	Paisajes
32	Palermo
33	Piccolo navío del Maxim's
34	Plena alerta
35	Quebracho
36	Remolinos
37	Renacimiento
38	Samitier
39	Taita (Mentaberry)
40	Tango bercear
41	Tango de l'or (Rolton, Viouと共作)
42	Tengo ganas de llorar
43	Ton nom, Lina (Maubonと共作)
44	Tus ojos negros
45	Velia
46	Vidalita
47	Viejo poncho
	ランチェラ
48	Enagua almidonada
	パソ・ドブレ
49	Mi Madrid

## エドゥアルド・ビアンコの作品

## タンゴ

1	Adoración
2	Arrepentimiento
3	Ausencia
4	Canción del peregrino
5	Con las alas rotas
6	Congoja
7	Corazón triste
8	Corazone de la culla
9	Crepúsculo
10	Desengaño (Freyhermanと共作)
11	Desilusión
12	Destino
13	Dolor
14	Evocación
15	Ilusión (Melfiと共作)
16	Incertidumbre
17	Ingrata (Ravaciniと共作)
18	Invierno
19	Madreselva
20	Nocturno
21	Pasaron los días
22	Pasionaria
23	Peruja
24	Piedad (Melfiと共作)
25	Plegaria
26	Poema (Melfiと共作)
27	Primavera
28	Razón 5A
29	Romanza (Ferrazzanoと共作)
30	Se va la vida (Melfiと共作)
31	Tus miradas
	ランチェラ
32	Amanecer
	パソ・ドブレ
33	Bohemia

# TANGO関連書籍リスト (日本で刊行されたもの)

2014/12/9 現在

作成：鈴木啓子・島崎長次郎

1	アルゼンチン・タンゴの踊り方	森 潤三郎	朝日書房	1930.3
2	社交舞踏学への序曲	森 潤三郎	朝日書房	1932.8
3	たんご 亜爾然丁風舞踏	森 潤三郎	朝日書房	1933.6.5
4	社交ダンス全書	玉置真吉	山水社	1948.12.10
5	タンゴに乗って—アルゼンチン夜話—	鈴木三郎	日本交通公社出版部	1949.4.20
6	ジャズ・タンゴ・シャンソン	高橋忠雄 他	婦人画報社	1954.1.10
7	タンゴ	高山正彦	新興楽譜出版社	1954.12.25
8	タンゴの異邦人	藤沢嵐子	中央公論社	1956.4.15
9	タンゴ——名曲とレコード	高山正彦	東京創元社	1957.4.30
10	タンゴ随筆	高山正彦	東京創元社	1959.6.30
11	世界ポピュラー音楽全集 (第12) タンゴ	高山正彦・解説	筑摩書房	1962.
12	ラテン音楽入門	中村とうよう	音楽之友社	1962.12.5
13	タンゴ入門	大岩祥浩・島崎長次郎・ 中島栄司	音楽之友社	1965.6.25
14	世界の名曲とレコード ラテン・タンゴ編	永田文夫	誠文堂新光社	1966.11.30
15	タンゴのすべて —タンゴの百科 他	(中南米音楽別冊)	中南米音楽	1967.11.10
16	タンゴのすべて 2 —タンゴ名曲500選 他	(中南米音楽別冊)	中南米音楽	1968.1.1
17	増訂 タンゴ随筆	高山正彦	東京創元新社	1968.11.25
18	タンゴ	石川浩司	小学館	1970
19	タンゴのすべて —タンゴ百科事典 他	(中南米音楽別冊)	中南米音楽	1971.1.5
20	ラテン・フォルクローレ・タンゴ —世界の名曲とレコード	永田文夫	誠文堂新光社	1977.6.1



21	エバリスト・カリエゴ	ホルヘ・ルイス・ボルヘス 岸本静江・訳	国書刊行会	1978.11.25
22	なつかしのタンゴ集	ペドロ・シモン・ゴメス他	南山大学イベロアメリカ 研究所	1979.4.25
23	タンゴ哀愁と情熱の百年史	(アサヒグラフ特集)	朝日新聞社	1980.4.18
24	藤沢嵐子 タンゴの本	藤沢嵐子 青木 誠・編	中南米音楽	1981.7.1
25	タンゴ100年史 (上) 1880~1935	高場将美	中南米音楽	1981.12.10
26	タンゴ100年史 (下) 1936~1980	高場将美	中南米音楽	1982.4.30
27	ジャズで踊って一舶来音楽芸能史	瀬川昌久	サイマル出版会	1983.8.
28	事典 ラテン・アメリカの音楽	アルク出版企画編	冬樹社	1984.4.10
29	永遠のタンゴ	細川幸夫	大学書林	1984.9.1
30	カンタンドータンゴと嵐子と真平と	藤沢嵐子	六興出版	1987.1.25
31	タンゴー情熱のメランコリー	(ダンス・マガジン別冊)	新書館	1987.5.25
32	タンゴ みる・きく・おどる	(アサヒグラフ増刊)	朝日新聞社	1987.6.1
33	タンゴ! この一冊で、あなたもタンゴ通	木田寿司	毎日新聞社	1987.6.30
34	やさしいアルゼンチンタンゴの踊り方	マリア&カルロス・リバロ ーラ編	音楽之友社	1987.10.30
35	青春の音 タンゴの巨匠オスバルド・ ブグリエーセへの旅	齊藤一臣	(私家版)	1988.11.26
36	A LO MEGATA	目賀田ダンスの会	(私家版)	1988.12.12
37	タンゴー歴史とバンドネオン	舩松伸男	東方出版	1991.2.25
38	社交ダンスと日本人	永井良和	晶文社	1991.8.30
39	ラテン音楽パラダイス	竹村 淳 河村要助・絵	日本放送出版協会	1992.3.30
40	ふり向けばタンゴ	五木寛之	文藝春秋・文春文庫	1992.8.10
41	にっぽんダンス物語	永井良和	リプロポート	1994.9.20
42	ぼくらのラテン・ミュージック 〜ものがたり日本中南米音楽史	青木 誠	リットーミュージック	1996.10.20

43	ピアソラ	小沼純一	河出書房新社	1997.5.23
44	ピアソラ・タンゴ世界を駆ける	(アサヒグラフ増大号)	朝日新聞社	1997.6.27
45	タンゴダンスのアルゼンチン	高橋政祺	扶桑社	1997.9.20
46	タンゴ名曲事典	石川浩司・編	中南米音楽	1998.4.10
47	アストル・ピアソラ闘うタンゴ	斎藤充正	青土社	1998.4.25
48	タンゴへの招待	レミ・エス 尾河直哉・訳	白水社・文庫クセジュ	1998.7.10
49	新編 やさしいアルゼンチン・タンゴの踊り方	マリア&カルロス・リバローラ編	音楽之友社	1998.8.5
50	アルゼンチンと日本—友好関係史	ホセ・R・サンチス・ムニョス 高畑敏男・監訳	ジェトロ（日本貿易振興会）	1998.11.9
51	タンゴ…世紀を超えて	岩岡吾郎・編	音楽之友社	1999.4.10
52	改訂版アルゼンチン・タンゴアーティストとそのレコード	大岩祥浩	ミュージック・マガジン	1999.9.10
53	目賀田ダンス	目賀田匡夫	モダン出版	1999.10.10
54	200DISCS ピアソラ／タンゴの名盤を聴く	斎藤充正・西村秀人	立風書房	2000.3.20
55	タンゴの歴史	石川浩司	青土社	2001.6.15
56	アルゼンチンのタンゴダンス	高橋政祺	モダン出版	2002.5.5
57	ラテン音楽パラダイス (文庫版)	竹村 淳	講談社	2003.5.20
58	抱きしめて タンゴ	香坂 優	主婦の友社	2003.6.1
59	踊りませんか？	浅野素女	集英社新書	2004.6.22
60	タンゴ・ラヴァーズ	小松亮太・監修	愛育社	2004.10.16
61	心を熱くするタンゴの名曲20選 (CD付き)	高場将美 他	中経出版	2006.2.26
62	ピアソラ自身を語る	ナタリオ・ゴリン 斎藤充正・訳	河出書房新社	2006.7.11
63	ピアソラ—その生涯と音楽	マリア・スサーナ・アッシ、 サイモン・コリアー 松浦直樹・訳	アルファベータ	2006.11.18

64	知ってるようで知らない ラテン音楽おもしろ雑学事典	高場将美	ヤマハミュージックメディア	2007.11.10
65	小松亮太とタンゴへ行こう	小松亮太	旬報社	2009.10.5
66	中南米の音楽 —歌・踊り・祝宴を生きる人々	石橋 純	東京堂出版	2010.3.1
67	ラテン音楽名曲名演ベスト111 (CD付き)	竹村 淳	アルテスパブリッシング	2011.6.20

☆上記リストには原則としてフィクション、ハウツーもの、雑誌、および私家本は含みませんが、MOOKは含みます。ただし資料的に価値のあるものについては入れました。(私家本、雑誌その他は参考資料として以下に別表を付しました)

1	タンゴ特集 (高橋忠雄、高山正彦他)	(音楽之友)	音楽之友社	1955.8.1
2	タンゴ、……人生模様	真継 真	(私家版)	1990.6.25
3	非西欧世界のポピュラー音楽	ピーター・マニユエル 中村とうよう訳	ミュージック・マガジン	1992.6.30
4	挑発する官能の舞い タンゴ・アルヘンティーノ	(Seven Seas 特集)	アルク	1999.7.1
5	アルゼンチンを知るための54章	アルベルト松本	明石書店	2005.9.25
6	ドクトルは飛んだ —ある町医者 of 南米紀行	毛利雅彦	(私家版)	2009.5.
7	タンゴの革命児没後20年 ピアソラ	(モストリークラシック特集)	日本工業新聞社	2012.2.20
8	国境を越えて愛されたうた	竹村 淳	彩流社	2014.11.10

(まだまだ抜けているものもあると思いますが、情報を鈴木または編集部までお知らせいただければ幸いです。さらに完璧なものを作りたいと思っています……鈴木)



こんなレコード／CDを聴いています

6

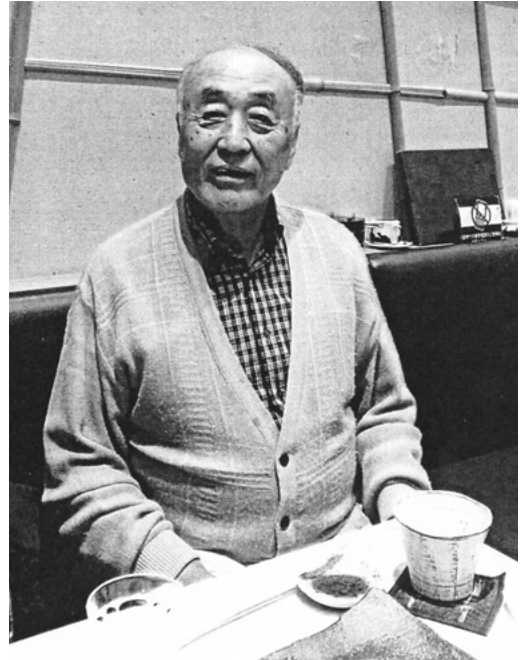
# こんなタンゴを聴いています

佐々木 哲雄(小平市)

私の音楽の聴き方は、学問ならば雑学といったところか、実に雑な聴き方をする。編集部から「こんなレコード／CDを聴いています」についての原稿依頼がありびっくりした次第です。

タンゴに興味を持ってから早や60年余り、レコードを手に入れられない時代、会員諸氏も同じだろうが、ひたすらラジオに耳を傾ける日々だった。NHKのディスクジョッキーの説明する曲目を必死にノートに記した。また高橋忠雄氏や高山正彦氏に手紙を書き、その返事をももらった時の嬉しさは一生忘れられません。代々木上原にあった文化会館での高橋忠雄氏や、信濃町真正会館での高山正彦氏の解説によるレコード・コンサートを今でも思い出します。

現在私が所有するレコードは、SPも含めて1000枚有余、CDは700枚、テープ（オープンも含めて）150本、DAT150本、MDカセット等200本ほどである。高山正彦氏や大岩祥浩氏のお書きになったものや、中南米音楽誌等を読んで参考にしています。



## ○ ラ・トルカシータ

演奏：カルロス・ディサルリ楽団

40年程前に、大岩氏、私の友人とともに練馬にある高山正彦氏宅に伺ってこの曲を聴かせていただいたとき、非常に感動しました。

## ○エル・アパーチェ・アルヘンティーノ（アルゼンチンのアパッシュ）

演奏：グランオルケスタ・ティピカ・ケンウッド

高橋忠雄指揮による30名ほどのメンバーで、日本の有力者が揃った杉並公会堂での録音。高橋氏の甘い音が今でも耳に残っている。

## ○セ・フエ・シン・デシール・アディオス（さようならも言わずに）

50年程前、東京の大丸デパートでSPレコードの販売があり、



リベルタ・ラマルケの歌うレコードを購入した。きれいな曲で、日本でも前田美知子が歌っている。

### ○ラ・モローチャ

演奏：岩崎滄之とタンゴ・コスモス 唄：グロリア・米山  
オーディオ・パークでの録音。最新の機器で録音しただけあって、グロリアの唄が極めて良い。今後期待する方だ。



### ○フェリシア

演奏：アドルフォ・カラベリ  
中南米音楽でのSP交換会で求めたもの。盤質も良く、力強く演奏していて今でも大切に聴いている。



### ○シレンシオ

演奏：フランシスコ・カナロ 唄：カルロス・ガルデル  
アメリカ・デッカ盤。新宿の中古レコード店で50年程前に求めたもの。ラッパの音、ガルデルの唄がとても良く、今でも大切な一枚だ。

会員諸氏へ、乱筆にて失礼いたしました。今後とも宜しくお願いします。

(注：セ・フエ・シン・デシール・アディオスとフェリシアのレコードの画像は編集部提供)



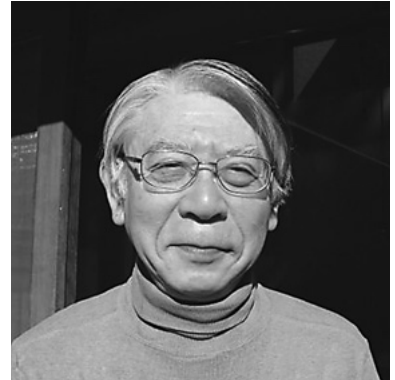
## 全国リレー随想 (15)

## 私のタンゴ人生

池永 博威

むかし、ある民放で波乱万丈という番組がありました。芸能人が有名になるまでの人生を波乱に満ちたストーリーで描く番組です。私のタンゴ人生はとくに取り立ててということもない極ごくありふれたものですが、せっかくですから振り返ってみようと思います。

私がタンゴという音楽に出会ったのは高校3年生のときで、リカルド・サントスが演奏する「ラ・クンパルシータ」のレコードを姉から貰ったのがきっかけでした。



そのレコードでタンゴに興味をもつようになり、タンゴのラジオ放送を聞いていたときにヘロニモ・ポンジョーニの演奏する「エル・アマネセル」の曲が流れました。気に入ったのですぐにレコードを買ってきました。期待に胸を膨らませてレコードに針をおいてみると、聴こえてきたのは全く別の演奏で、しかも音がわれていて耳ざわりが悪く、私には唯の雑音にしか聞こえませんでした。曲名しか憶えていなかったために、間違えてファン・カルロス・カビエージョ楽団が演奏するレコードを買ってきてしまったのです。レコードが不良品であると思って交換しに行ったところ、「タンゴの音はこんなものですよ」と店員に冷たくあしらわれました。“タンゴは音が悪すぎる”、一度はタンゴを聴くのはよそうと思いました。幸か不幸かそのレコードは返品してもらえずに私のコレクションに残ってしまいましたが、現在では貴重なレコードの1枚に数えられています。

それから間もなくのことです。本屋さんで立ち読みをしていたときに、背表紙に「タンゴ」という文字が刻まれた一冊の本を見つけました。高山正彦さんの名著『タンゴ 名曲とレコード』です。たくさんの曲とレコードが紹介されている中で、解説を読んでいてこの曲は絶対よい曲にちがいないと感じた曲が1曲ありました。サボリードの作った「フェリシア (幸福)」です。理由はわかりません。このインスピレーションが間違いでなかったことは、その後たくさんの素晴らしいフェリシアの演奏に出会えたことが証明してくれました。タンゴのことはもちろんタンゴの曲を知らない私にとって、この本は手放せない座右の書物となりました。

タンゴの音の悪さに閉口させられてしまいましたが、センチメンタルな曲想がとても気にいったので、もう一度音のよいレコードでタンゴを聴いてみることにしました。高校生にとっては大枚な2000円を貯金箱から叩いてフランシスコ・カナロの来日記念盤でステレオ録音の「カナロ・エン・ハボン」を買いました。こんどは期待が裏切られることはありませんでした。なかでもピリンチョ五重奏団が演奏する2曲は、曲・演奏・音の三拍子が揃っていて、その演奏を聴いたときの興奮は言葉でいい表すことができないほどでした。そして、ジャケットで曲名を確かめてみるとその二曲のうちの一曲が「フェリシア」だったのです。このレコードで私のタンゴ人生が始まったと言っても過言ではありません。



せん。

初めて入会したタンゴの同好会は「築地タンゴ倶楽部」です。会を主宰していたのは所隆夫さんという方で、はじめのうちは西武池袋線の東長崎にある所さんの自宅の2階が会場でした。会員は5～6人くらいで、コンサートは月に1回、お菓子を摘みお酒を飲みながら聴きました。タンゴのレコードを数枚しかもっていない私にはすべての曲が新鮮であり、家が近かったので例会のほかにも月に2～3回通ってタンゴを聴かせてもらいました。

所さんは印刷会社へ勤めていてガリを切る仕事をされていました。当時私は大学院に在籍していて、卒業するためには論文を提出しなければなりません。パソコンはもちろんワープロもまだ普及していなかったので、字が下手で書くことが苦手な私はどうしたものかと頭を悩ませていました。それを知った所さんは数百ページに近い清書を引き受けてくださいました。土・日曜日ごとに家へ伺って、お酒をご馳走になりながらタンゴを聴いている間に、汚い字で書かれた下書きが目の前で達筆な原稿に仕上がっていくのです。まるで魔法の国にいるようでした。そのときタンゴを好きになってよかったとつくづく思いました。

何年かして築地タンゴ倶楽部の会場は築地に移りました。会員の数も数十人に増えました。現タンゴ・アカデミー会長の飯塚久夫さんと初めてお会いしたのも倶楽部の例会です。東北の大学を卒業して大学院へ入学のために東京へ出てこられたばかりの飯塚さんを出しにして、お酒を飲みにタンゴを聴きに一緒に所さんの家へよく遊びに行きました。タンゴについて前より知識が増えた私は少し兄貴面をしたような気がします。飯塚さんとはそれ以来の付き合いで最も古いタンゴの友人です。

私がアカデミーに入会したのは会が創立して2年目のことで、会員番号は102です。飯塚さんは創立時以来の会員で、会員番号は001です。アカデミーが創立したときに入会していれば私の会員番号は一ケタの002だったかもしれません。毎年送られてくるアカデミーの会員名簿で飯塚さんの会員番号を見るたびに、なぜ最初の年に入会しなかったのか悔やんでいます。

10年くらいして所さんが調布の方へ引っ越して倶楽部は閉会となりました。今年数十年ぶりに所さんのお宅を訪ねました。80歳半ばを超えていていろいろと病気を抱えているけれどもお元気でした。久しぶりの再会がとてもとてもうれしくて、昔を思い出しては話が弾みました。

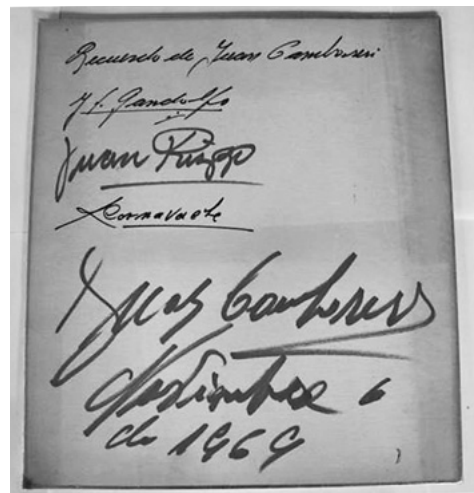
大学に勤めていた40年間は、主に中南米音楽研究会とポルテニヤ音楽同好会の2つのレコードコンサートの例会に出席することと、なけなしの財布と相談しながら新譜のレコードやCDを買い集めて聴くことで十分満足していました。

タンゴとラテンの同人誌である「中南米音楽」を愛読するようになり、中南米音楽研究会のコンサートを知りました。はじめて例会に参加したのは昭和43年の7月で、会場は渋谷信用金庫恵比寿支店の建物の上階にあるホールです。中西義郎さん夫妻に初めてお会いしたのがそのときで、以来いろいろとタンゴについて教えていただきました。また、大岩祥浩さんが主宰するポルテニヤ音楽同好会の例会に出席するようになったのもそれから間もなくのことです。馬場明人さんが主宰のアルゼンチン・タンゴ愛好会や湯沢修一さんが主宰のSUIYOUKAIのレコードコンサートにはときどき参加した程度です。東京には他にもタンゴ・クラブ・タンゴやクラブ・ラティーノ・アメリカーノなどいくつかの愛好会があったようです。いま考えると多くの会に顔を出さなかったことが残念ですが、そのときは時間的にも精神的にもそして金銭的にも余裕がありませんでした。

アルゼンチンからきた楽団の生のコンサートにもできるだけ聴きに行きました。フランシスコ・カナロのコマ劇場での来日公演はまだタンゴを知る前のことで聴くことはできませんでしたが、それ以後に来日した楽団ではキンテート・リアル（1964年4月4日 厚生年金会館大ホール）をはじめ、オスバルド・プグリエーセ楽団（1965年8月2日、厚生年金会館大ホールを含めて3回の公演）、キンテート・ア・ロ・ピリンチョ（1965年11月17日 厚生年金会館大ホール）、フロリンド・サッソーネ楽団（1966年10月1日 日比谷公会堂）、ファン・カンバレリー楽団（1969年11月12日 東京厚生年金会館小ホール）、ホセ・バッソ楽団（1970年2月28日 東京厚生年金会館）、エクトル・バレラ楽団（1971年4月29日 東京厚生年金会館）、ファン・ダリエンソ楽団（1972年7月9日 読売ホール）、フランチャーニ・ポンティエール楽団（1973年3月4日 日比谷公会堂）、カルロス・ガルシーア・タンゴ楽団（1974年3月11日 中野サンプラザホール）、フルビオ・サラマンカ楽団（1975年3月24日 中野サンプラザホール）、フランチャーニとシンフォニック・タンゴ・オーケストラ（1977年2月24日 厚生年金会館）などです。ただし、席は一番安いC席かD席でした。



キンテート・リアル公演のパンフレット



ファン・カンバレリーのサイン

すいよう会が主催する菅平高原タンゴフェスティバルには、平成3年9月22～23日に開催された第13回フェスティバルに1回だけ出席しました。幸運にもその年はプロに転向する前の高校3年生の小松亮太君が参加していて、蟹江丈夫さんがリーダーのロドリゲスタンゴ楽団ほか2つの楽団と共演してエル・アマネセル、アディオス・アルヘンティーナなど14曲を演奏しました。さらにデ・カロが作ったラ・ラジュエラを独奏で、ガルデルの作ったエル・ディア・ケ・メ・キエラスを尾澤昌仁君（オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダのOBで、現在はタンゴ・エチゴリアンのバンドマスター）と二重奏で演奏してくれました。また、アルゼンチン留学から帰国したばかりの古橋 幸さんがタンゴアモールの楽団ほかでブエノスアイレスの春、バイアブランカなど11曲を演奏しました。どちらも愛い愛いしさが残るしかし澁刺とした演奏ぶりでありました。

7年程前のことです。新聞のとじ込みで入っていた「ねりま 区報」の区民の広場のコーナーに載った『ネリマ ラテン・タンゴ倶楽部のレコードコンサートへのお誘い』という文字で、自分が住むすぐ近くでタンゴのレコードコンサートが開かれているのを知りました。例会は毎月第4火曜日の午後1時15分から4時30分迄で、時間が空いていたので出席してみました。会場である生涯学習センター2階の第1教室の扉を開けると受付で上品なご婦人が出迎えてくれました。会費が300円なのに先

ず吃驚、A 4 数枚からなる立派なプログラムを渡されて二度吃驚、さらに休憩の時間に配布された餡子のお菓子の美味しいのにまたまた驚きました。見知った顔が一人もいないので少し寂しい気がしましたが、プログラムの内容はアルゼンチンタンゴのほかにもヨーロッパタンゴあり、ラテンあり、シャンソンあり、映画音楽ありで、多彩なプログラムは私にピッタリでした。しかも会の後で場所を変えておこなわれた二次会の雰囲気がよく、何よりも歩いて帰ることのできる地元で飲むことの利便性が気に入りました。平日の昼間に大学を抜け出すことは少し気が引けましたが、コンサートと二次会の二重の楽しさに負けて出席するようになりました。

大学を辞した昨年5月からネリマ ラテン・タンゴ倶楽部の例会でコメンテーターをレギュラーで務めています。「ジャンルを問わず・歌謡曲からタンゴまで」のタイトルで、6曲担当しています。6曲のうちの最初の1曲は、もちろん私の大好きな歌謡曲を聴いてもらっています。ネリマ ラテン・タンゴ倶楽部のレコードコンサートでタンゴ以外のジャンルがまた一つ増えました。

ノチェーロ・ソイを主宰する宮本政樹さんからダンスを習いませんかと勧められて、練習会に参加するようになってかれこれ6年が経ちました。当初は“いまさらこの年で”という気持ちもありましたが、もし踊れるようになると楽しいだろうと思い練習会に出ることにしました。少し足の動きを覚えた頃に銀座のマイハンプルハウスでノチェーロ・ソイの2周年記念ミロンガが催され誘われて参加しました。またミロンゲーロ・デ・ナガノの主宰する第6回志賀高原ミロンガフィエスタにも二泊三日で行きました。ミロンガで何十人ものカップルが音楽に合わせて優雅に踊っているのを初めて見たときには、世の中にはこんなに高尚な遊びに興じている人がいたのだと感心しました。それからしばらくは自分がだんだんタンゴを踊れるようになってきたと思い込み、ノチェーロ・ソイが主催して港区南麻布のマーゴホール、四ツ谷のアルゼンチンバー「シン・ルンボ」、神楽坂の牛込箆笥地域センターなどでおこなわれたミロンガをはじめ、他の団体が主催したすいよう会、AsakaでTango、東京タンゴ倶楽部、東宝ダンスホールアルゼンチンタンゴナイト、赤レンガタンゴフェスティバルなどのミロンガにも参加して、知らない女性にも積極的に声をかけて踊りました。それなりに充実した満足のいく4年間でした。

ところが2年ぐらい前からのことです。練習を積み重ね、場を踏む数が増えているわりにはなかなかダンスが上達しないことに気がつきました。むしろ下手になっていくのを感じるのです。タンゴのダンスは男性のリードで女性を楽しく踊らせることが必須です。嗚呼それなのに、一緒に踊っていて女性が楽しく踊っていないのがわかるのです。“もう少し上手にリードして”、悲鳴にも近いやるせない女性の声が聞こえてくるのです。これでは女性をダンスに誘うのを躊躇うのは仕方のないことです。このところダンスを踊るのが怖い毎日が続いています。

ここ数年はいろいろのタンゴの愛好会のレコードコンサートにできるだけ出席するように心がけています。田村 茂さんが主宰する「ネリマ ラテン・タンゴ倶楽部」、宮本政樹さんが主宰する「ノチェーロ・ソイ」、黒木皆夫さんが主宰する「すいよう会」、島崎長次郎さんが主宰する「タンゴ心酔クラブ」、米山 宏さんが主宰する「ディア・オンセ」、弓田綾子さんが主宰する「タンゴ・クラブ市川」、水野 中さんが主宰する「上福岡タンゴ愛好会」、佐藤光男さんが主宰する「横浜ボルテニヤ音楽同好会」、内村 宏さんが主宰する「さいたまタンゴ鑑賞会」、日本アルゼンチン協会が主宰する「タンゴ音楽の集い」などなどです。もちろん日本タンゴ・アカデミーの主宰する「タンゴ・セミナー」



や「リンコン・デ・タンゴ＜東京＞」には毎回出席しています。

ライブもできるだけ聴きにいくようにしています。今年聴いたライブだけでも、日本タンゴ・アカデミーが主宰のミロンガパーティー（11月8日、カスケードホール、演奏：メンターオ+2）、リンコンデタンゴ納涼大会（7月22日、山の上ホテル、出演：池田みさ子とロス・アミーゴス）、後援のタンゴ早慶戦（11月16日、浜離宮朝日ホール・小ホール）をはじめ、グレコス・タンゴ・オルケスタ公演（1月24日、中野サンプラザホール）、東京・春・音楽祭2014 アルゼンチン・タンゴの夕べ（4月1日、東京文化会館小ホール、演奏：京谷弘司と仲間たち）、ダンス&スクリーンミュージックin銀座（4月12日、銀座・王子ホール、演奏：マキナ・アンド・カンパニー）、オルケスタ・ティピカ・パンパ タンゴ2014 春のコンサート（4月13日、すみだトリフォニー小ホール）、早川真平 生誕100周年記念コンサート（6月25日、ヤマハホール、演奏：早川真平グランオルケスタ・ティピカ）、RECITAL DE TANGO EN VIVO “PASIONAL”（7月4日、池之端ライブスペースQui、歌と演奏：ユリ・アスセナとグループ・タンゴ）、吉田 篤コンサートシリーズ（10月27日、杉並公会堂小ホール）、「国境を越えて愛されたうた」発売記念コンサート（11月29日、原宿 ラ・ドンナ、演奏：大高 実&アルゴ・ヌエボ+グロリア米山）などがあります。

何より楽しいのはタンゴの仲間と行く一泊二日の旅です。毎年定期的に実施されているタンゴ心酔クラブの「タンゴを楽しむ親睦旅行」、上福岡タンゴ愛好会の「貸切バスでいくバスツアー」、石川県金沢市の金沢蓄音器館でタンゴをS Pで聴く「金沢タンゴツアー」などです。今年はさらにいわき中南米音楽同好会主催の「タンゴ三昧プラス海と温泉と紅葉の名所をめぐる旅行」が加わりました。これらの旅行に参加して、飲んで騒いでタンゴについて語り合うことによって、タンゴ人生の先達たちと親交を温めました。



「夏井溪谷の紅葉の名所瀬戸がろう」にて  
左から、寺本千栄子さん、藤木立夫さん、島崎名誉会長、筆者、宮本政樹さん

タンゴを聴いたお蔭でたくさんのタンゴを愛するひとたちと友達になることができました。タンゴを踊ったお蔭でたくさんのダンスを愛するひとたちと友達になることができました。これからもタンゴを聴いてタンゴを踊ってたくさんのタンゴを愛するダンスを愛するひとたちと友達でいられることを願っています。

次は秋田市の佐藤勝夫さんにバトンを渡します。

## 第2回 アルゼンチンタンゴ早慶戦

笠井 正史

晴天に恵まれた2014年11月16日（日）昨年に引き続きアルゼンチンタンゴ早慶戦が浜離宮朝日ホールで開催された。昨年は千代田区一番町いきいきプラザで開催されたが、200席では到底収容しきれなかったのが、今年は400席は確保すべく朝日ホールの小ホールで開催することとなった。当初は300名くらいの入場希望と予測されたが、コンサートの概要が10月26日付の読売新聞朝刊で「早慶タンゴで競演」と題して報道されるや、とても400席では間に合わない事態となり、福川委員長自らお詫びとお断りに終始せざるを得なくなってしまった。

開催当日は開場12時半、開演13時半と謳ってあるにも拘わらず、受付も何も準備できていない11時過ぎには早くも一人二人とお見えになり、日本におけるタンゴの根強さを感じた一幕であった。予想されたことではあるが、聴衆の大半は高齢者で、学生時代に自らタンゴを演奏していた人や、ラジオの時代からタンゴを聴いていた人、はたまた足腰の弱ってきた連れ合いのお付き合ひというか、介護で訪れた人などいろいろであったが、開演までに400席は文字通り満席となった。

13時半に日本タンゴ・アカデミー飯塚久夫会長の司会、福川靖彦実行委員長の挨拶でコンサートが始まり、前半は慶應義塾大学KBRタンゴアンサンブルOBのシニアバンドに続き、はるばる新潟県から駆け付けた早稲田大学タンゴワセダOBのタンゴ・エチゴリアン、そして中央大学ルナ・タンゴOBの齋藤一臣マエストロ率いるオルケスタYOKOHAMAの3楽団の競演となった。この3楽団の中、KBRシニアバンドは平均年齢70歳後半という面々の元気な演奏であったが、これに若手の華としてバイオリン奏者の鈴木慶子さんが賛助出演した。また、日本タンゴ・アカデミー会員のグロリア米山さんも、「ポエマ」と「カンタンド」の2曲を歌って華を添えた。

ワセダOBのタンゴ・エチゴリアンはバンドネオン、ピアノ、バイオリン、コントラバスの四重奏団であったが、タンゴ4曲の他に「新潟ブルース」というエチゴリアンならではの曲目を演奏し、喝采を浴びた。

オルケスタYOKOHAMAは今回唯一のプロであったが、齋藤マエストロ以外はまだ若手の錚々たるメンバーで構成され、バンドネオン陣には、平田耕治、池田達則、バイオリン陣には専光秀紀、石川麻衣子、ギターには飯泉昌宏といった毎度お馴染みの演奏家が5曲を披露した。

15分の休憩の後は、これまたタンゴ・ワセダOBのロス・ポジーツ、続いて今回唯一の大学生現役楽団であるオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ、そしてKBRタンゴアンサンブルのジュニアバンドの3楽団競演となった。

ロス・ポジーツはワセダOB9名で構成されるオルケスタで、エチゴリアンとは別のOB楽団であるが、何れも今回初出場である。ワセダOBはこの他にもオルケスタやコンフントがあり、随時小規模コンサートを催しているようであるが、何分社会人としては勤めの関係上そうそう集まって練習をする訳にも行かない模様で、何やら勿体ないというか気の毒な感じである。

ロス・ポジーツの演奏の中2曲に、アキト&アヤのダンスが演じられた。アヤさんはそもそもタンゴ・ワセダの出身だそうで、現役の頃はオルケスタの一員としてピアノを演奏していたそうである。

朝日小ホールは文字通り「小」ホールでステージが小さいため、このカップルのダンスはステージ下、客席最前列の真前で演じられた。折角の出演に何か気の毒な感じがしたが、今回のコンサートでは唯一のタンゴダンスで、事前予告もなかったため、来場者には十分喜んで貰えたのであった。

ロス・ポジトスに続いてはいよいよ本邦唯一の学生タンゴバンドであるオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ総勢14名の出演で、「ロコ・デ・コンテンツ」に始まる5曲が演奏された。このオルケスタの常で、曲目によって演奏者が交代していたが、これはどうやら、入団後日の浅い1年生にも演奏の機会を与える一方、曲によっては上級生が交代して先輩らしい腕前を発揮することになっているそうである。勿論第一バイオリンの高橋雪花さんはバンマスなので交代することなく全曲を弾きこなした。バンドネオンが現在2名しかいないので、年々メンバーが変わってゆく学生バンドとしてはこの辺が心配どころではある。タンゴ・ワセダは以前より東大や慶應や芸大から演奏者を得てオルケスタを補給してきた伝統があり、それが強みでもあるので、こういった「手法」も早目に考えておいては如何かと思われる。

6番目の登場は慶應義塾大学K B R タンゴアンサンブルのジュニアバンドで、1番目に登場した同じK B Rのシニアバンドの弟分に当たる訳であるが、「ジュニア」といっても平均年齢は70歳辺りとのことである。つまり、K B Rは現役団員が絶えて久しくなったため、70歳でもなお「ジュニア」として通用するそうである。この高齢者ジュニアに華を添えたのが、シニアでも共演したバイオリンの鈴木慶子さんとトリオメンタオの池田達則、コントラバスの大熊慧の両氏であった。K B Rジュニアは5曲演奏したが、メンバーの一人である柏原誠さんが今回唯一の男性歌手として登場し、「エル・ウルティモ・カフェ」や「トモ・イ・オブリゴ」を朗々と歌い上げ拍手喝采を浴びた。柏原さんは以前は航空会社に勤めておられたそうで、プロの歌手ではなかった由であるが、その歌唱は正確なスペイン語でプロとしても通用するのではないかと思われる程の歌唱力を披露された。K B R側も「今日、これだけはワセダに勝てると確信しています」とアナウンスしていた程で、言わばK B Rの切り札的存在と言えるのではないかという感じであった。

K B Rジュニアバンド演奏の後、出演者一同で「ラ・クンパルシータ」を文字通り「共演」してお開きとなった。何しろ狭いステージであったので、出演者全員が席につくスペースがなく、一部の若手は檀上の最前列に腰かけて演奏するといった姿もあり、他所のコンサートでは見られない光景を目にすることができたのも一興であった。

このタンゴ早慶戦は読売新聞で報道されて以来各方面の関心が寄せられたようで、当日はT B Sと共同通信が取材に訪れ、何れも長時間本格的な取材を行っていたのは印象的であった。K B R出身の星野睦郎実行副委員長はかなり本格的に取材に応じていたようであるし、T B Sの撮影チームも通り一遍ではないシューティングを行っていたようである。多分後日何らかの形で放映されるかと楽しみである。尤もこれで最後にする訳には行かなくなったので、早くも来年の企画を立案する「宿題」を与えられたことも事実である。



出場者全員でのアンコール曲「ラ・クンパルシータ」



# 2014年下期首都圏タンゴ・コンサート情報

作成：脇田 富水彦

## ●ユリ アスセナ PASIONAL

Yuri Azucena & Su Grupotango

鈴木崇朗 (bn)、吉田篤 (vn)、須藤信一郎 (pf)、大熊慧 (cb)

7月4日 池之端ライブスペースQui

## ●オルケスタYOKOHAMA 7月友の会ライブスペシャル

出演：平田耕治クアルテート

7月13日 タンゴの家 (三田塾ホール)

## ●TANGO Buenos Aires

MENTAO 池田達則 (bn)、専光秀紀 (vn)、大熊慧 (cb)

スペシャルゲスト Cristián Andrés López y Nao、Sebastián Martínez y Agustina

7月12日 草月ホール

## ●真夏のタンゴ タンゴ タンゴ

佐藤美由紀 (pf)、川波幸恵 (bn)、山中裕平 (vn)

7月15日 ルネこだいら大ホール

## ●小松亮太 ブエノスアイレスのマリア

小松亮太 (bn)、SAYACA (vo)、KaZZma (vo)、黒田亜樹 (pf)、田中伸司 (cb)、近藤久美子 (vn)、谷本仰 (vn)、吉田有紀子 (va)、松本卓以 (vc)、井上信平 (fl)、鬼怒無月 (gt)、佐竹尚史 (perc)、真崎佳代子 (perc)、片岡正二郎 (cm)

7月15日 板橋区立文化会館。7月18日 なかのZERO小ホール

## ●ロベルト杉浦

ロベルト杉浦 (vo)、青木葉穂子 (pf)、ゲストボーカル磯貝麗子、梅山千鶴枝、塚田ひろ子他

7月26日 アート・カフェ・フレンズ

## ●タンゴトリオ・ペルカント

サッコ香織 (pf)、川波幸恵 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)

7月19日、9月25日 名曲喫茶カデンツァ

## ●ウナドス

江藤有希 (vn)、早川純 (bn)、中西文彦 (gt)、田ノ岡三郎 (acc)

8月8日 渋谷・七面鳥

## ●小松亮太 with ラスト・タンゴ・センセーションズ

8月30日 よみうり大手町ホール、9月6日 さいたま市プラザノース

## ●東京バンドネオン倶楽部 第17回

9月26日 四谷区民ホール

## ●古橋ユキ 秋のコンサート 魅惑のタンゴバイオリン

古橋ユキ タンゴ・トリオ

古橋ユキ (vn)、金益研二 (pf)、鈴木崇朗 (bn)

9月27日 二子玉川 オーキッド ミュージック サロン

●フアン ホセ モサリーニ五重奏団 アルゼンチン タンゴ界 最後の巨匠

Juan José Mosalini Quinteto

フアン ホセ モサリーニ (bn)、久保田美希 (pf)、近藤久美子 (vn)、鬼怒無月 (gt)、田中伸司 (cb)、早川純 (bn)

10月2日 船橋市勤労市民センター

●ARGENTINE TANGO LIVE

古橋ユキ (vn)、仁詩 (bn)、須藤信一郎 (pf)、高杉健人 (cb)

10月22日 渋谷SARAVAH TOKYO

●キサスタンゴ クアルテート

池田達則 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、深町優衣 (pf)、大熊慧 (cb)

10月26日 中目黒 楽屋

●吉田篤 コンサートシリーズ vol.01

情熱のタンゴトリオ 吉田篤 (vn)、早川純 (bn)、金益研二 (pf)

10月27日 杉並公会堂小ホール

●LOS REFLEJOS DEL ALMA vol.9

SAYACA (vo)、青木菜穂子 (pf)、北村聡 (bn)、田中伸司 (cb)、鬼怒無月 (gt)

10月30日 ジャズクラブ銀座シグナス

●オルケスタ・ティピカ・パンパ タンゴ2014 秋のコンサート

西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ

西塔祐三 (bn)、中西伸一 (bn)、北村聡 (bn)、早川純 (bn)、鈴木崇朗 (bn)、川波幸恵 (bn)

永野亜希 (vn)、江藤有希 (vn)、瀬尾鮎子 (vn)、吉田篤貴 (vn)、柴田奈穂 (vn)

宮沢由美 (pf)、田辺和弘 (cb)、あみ (vo)、KaZZma (vo)

チコス・デ・パンパ

北村聡 (bn)、永野亜希 (vn)、宮沢由美 (pf)、佐藤洋嗣 (cb)、金子なつみ (vo)

エストレージャス・デ・パンパ

中西伸一 (bn)、鈴木崇朗 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、吉田篤貴 (vn)、松永裕平 (pf)、小栗亮太 (cb)

兵頭カンナ (vo)

10月31日 すみだトリフォニー小ホール

●タンゴ デ ブエノスアイレス カルテット

サッコ香織 (pf)、川波幸恵 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、東谷健司 (cb)、

11月2日 名曲喫茶カデンツァ

●オルケスタ・アウロラ

会田桃子 (vn)、青木菜穂子 (pf)、吉田篤 (vn)、北村聡 (bn)、鈴木崇朗 (bn)、東谷健司 (cb)

11月4日 南青山マンダラ

●第4回 NTAミロンガパーティー

メンターオ+2 池田達則 (bn)、専光秀紀 (vn)、大熊慧 (cb)、松永裕平 (pf)、宮越建政 (vn)

タンゴ・プラネット 利幸&舞子 (ダンス・デモ)

11月8日 いきいきプラザ一番町 カスケードホール

●秋のコンサート 郷愁のアルゼンチンタンゴ

古橋ユキタンゴトリオ

古橋ユキ (vn)、鈴木崇朗 (bn)、金益研二 (pf)

11月8日 藤沢市労働会館ホール

●Tango Argentino

ユリ・アスセナ (vo)、吉田篤 (vn)、丸野綾子 (pf)  
11月13日 池上イタリアンダイニング マンジャーレ

●アルゼンチンタンゴ早慶戦

オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ  
慶應義塾KBRタンゴアンサンブル ジュニアバンド  
慶應義塾KBRタンゴアンサンブル シニアバンド  
ロス・ボジートス  
タンゴ・エチゴリアン  
オルケスタYOKOHAMA  
11月16日 浜離宮朝日ホール・小ホール

●タンゴ・デュオ コンサート

小川紀美代 (bn)、智詠 (gt)  
11月26日 かなつくホール (神奈川区民文化センター)

●タンゴの名曲&哀愁の旋律

仁詩 (bn)、指揮 榊原徹、管弦楽 東京室内管弦楽団  
11月28日 渋谷区文化総合センター大和田さくらホール

●古橋ユキ タンゴ五重奏団 タンゴバイオリンの魅力

古橋ユキ (vn)、石井有子 (vn)、鈴木崇朗 (bn)、深町優衣 (pf)、吉田水子 (cb)  
12月4日 恵比寿アート・カフェ・フレンズ

●小松亮太&オルケスタ・ティピカ

12月12日 シアター千住

●ブエノスアイレスの冬vol.3

キサスタンゴ 池田達則 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、深町優衣 (pf)、大熊慧 (cb)  
ダンス ギジェルモ・ボイド&間々田佳子、クリスティアン&ナオ  
12月12日 ラゾーナ川崎プラザソル

●小松真知子とタンゴクリスタル クリスマスディナーショー vol.12

小松真知子 (pf)、北村聡 (bn)、鈴木崇朗 (bn)、吉田篤 (vn)、齋藤寛子 (vn)、田辺和弘 (cb)、  
小松勝 (gt)、岸本力 (ゲストvo)、SAYACA (vo)  
ダンス クリスティアン&ナオ、ギジェルモ&ヨシコ  
12月17日 東京會館ローズルーム

●KOJI HIRATA ニューヨーク凱旋コンサート

平田耕治 (bn)、那須亜紀子 (vn)、須藤信一郎 (pf)、藁科基輝 (cb)  
12月18日 横浜鶴見区民文化センター サルビア 音楽ホール



## 原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド・エン・ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド・エン・ハポン」の次号の締め切りは5月末日、「タンゴランディア」は3月15日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。なお人名のカナ表記については執筆者の表記のままを原則としますが、Juanを「ファン」と表記されたものについては、表記の流儀の問題ではないと考え、編集部の方で「ファン」と改訂いたします。

## 編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第35号をお届けします。今号は頁数が過去数号と比べてかなり減っています。これは第34号の頁数が予定よりかなり増え、そのことによって2014年度のNTA予算をかなり圧迫する結果となったことを踏まえ、NTA年間予算の平準化を企図した必要処置であります。ご理解ください。また、2014年下期より池永博威氏、笠井正史氏、鈴木啓子氏の3氏を新たに編集作業のサポーターとして加わっていただきました。3氏は新年度より正式に編集委員に加わっていただく予定になっております。

（齋藤 富士郎）

## 日本タンゴ・アカデミー主機関誌 TANGUEANDO EN JAPÓN

第35号 2015年1月発行（非売品）

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤 富士郎（編集長）

〒195-0072 東京都町田市金井 6-17-2

TEL/FAX 042-736-7445 f-saito@mqj.biglobe.ne.jp

大澤 寛、弓田 綾子、宮本 政樹、島崎 長次郎

編集サポーター：池永 博威、笠井 正史、鈴木 啓子

印刷：（株）藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-13-1

TEL 03-3262-8641 FAX 03-3262-8643 E-mail: fujip@fujip.co.jp

דה